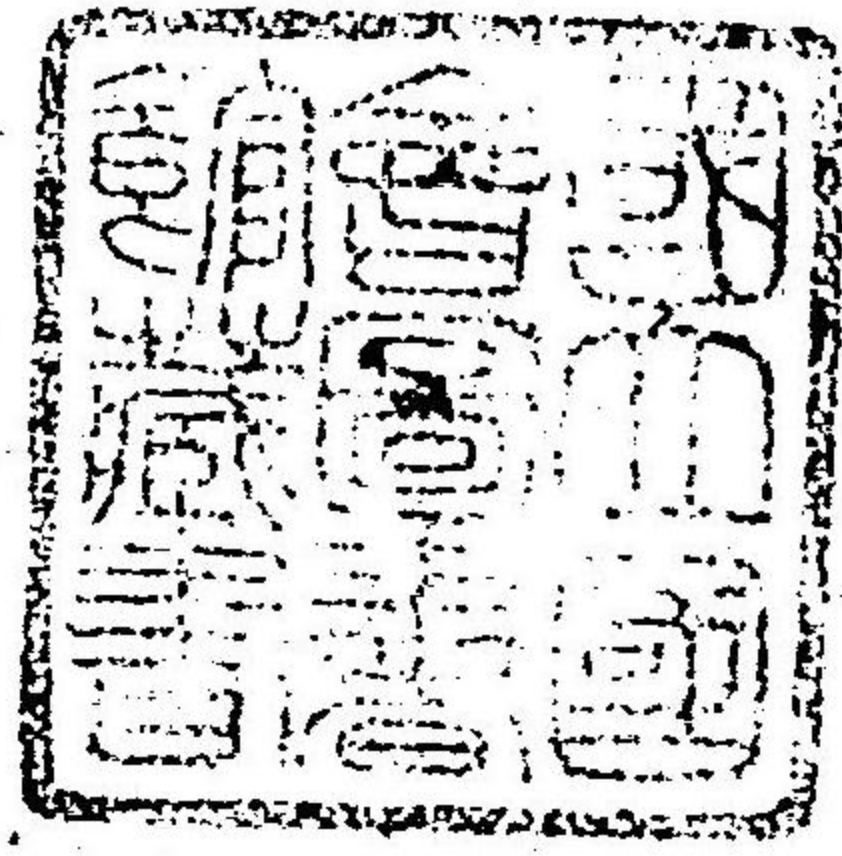


154
a
60



a
154
60

1959

新刊駿臺雜話序

駿臺雜話五卷。廼鳩巢室先生之所著也。夫以講
 論之餘。暨々及此言。大抵發乎所問者。而研窮理
 義。藻鑑人物。或往事之可感。或當世之可警。莫非
 守正學而扶名教之意也。何其諄々諭人之若是
 哉。一時遊門之士。皆虛往而實歸。從可知已。明遠
 雖不敏。執經下座。竊與有聞焉。嗟乎。在則人。亡則
 書。先生已遠。九原不作。後之讀此書者。亦可以想
 見其造詣之深爾。雖然。鐘之應。撞而始鳴。其聲之
 大小。洪纖。惟隨乎其所叩。則善教之待其問。理亦
 不異於是。而先生之蘊。固有非斯書所能盡者矣。

書肆崇文堂。請上諸木以傳不朽。因與其孫室直
溫謀焉。遂告之。

官以一本授之。適劄劄功成矣。於是乎序。
寬延庚午十二月冬至日

東都 直學士 藤原明遠謹識

むさしの國大城の東、駿臺のもとに、草の菴むすひて住ける獨の
翁有り、うのかみ北國より爰に來て家居せしか、もとより深山
木の花にあらざるへき材もなければ、其梢としる人もなくして
た、學の窓に文をひろげ、見ぬ世の人を友とし、老の至るをもわ
すれつゝ、さのふといひけよと暮して、はやはたとせあまりにれ
よへり、ちかきころより衰病日に加り、うれに痿痺の疾ありて、起
居も心に叶はねは、日夜衾枕をのみ親じみ、書籍にさへうとくな
りにたり、何をか世にあるれもひ出にせまし、爰に此翁に就ても
の學ふ輩ありて書を講し文を論し、れのく、虚にして往實にし
て歸らぬはなし、其外花の晨月の夕には、かならず問來てなにく
れと世にあらぬ事とも語りつゝ、け筒、日をくらし僕を更れと
もやむ事なし、むかしより良辰は失ひやすく、嘉會は得かたけれ
は、いつも賓主ともに唐錦たゝまくれしく、難見ゆし、翁も客に對

して清談する事をこのみて身の煩はしきも心地よくたはめ
儘に、いにしへ今の世にいひぬる難波の事よしあしとなく、木
末懸てるの理を盡しけるか、われなかられかしとれもふひとふ
しもあれば、其席はて、わか子弟に命して、やまと文字に寫し置
けるに、日數を経てたほえす卷をなせり、もとより有識のきはの
人の目をと、むへきものにもあらねは、さしてれしむへきとに
はあらねとも、古人の雞肋といへるにも類しぬへし、さすか反故
となしてかいやり捨むも本意なければ、さて兒輩にあたへてよ
ましめむとて、しはらくのこしおきけらし
享保壬子のとし九月中旬鳩巢の翁駿臺の草の菴にして筆をと
る

の目 序 二

駿臺問答の話、是に限るにあらす、經傳の文を論すれば、所論の書により、諸生の間に
答れば、所問の人にしたかふ、この故に、所論の文參差として齊しからず、所問の事多
端にして一にあらす、今こゝに所記は正道を明かにし、邪説を辨し、すへて學問の大
綱に係り、又は世俗の談、淺近の語といへど、平生の事に通して、觀省の益ともなるへ
き事どもを採集して、しるし置になんありける、よりて觀るにたよりあるへきために
章段を分ち、其中の提要の一語を摘て、篇に名付けらし、鋪叙倫なく、議論復出するや
うにきまぬるもあれど、本より撰次して書となすに心なければ、たゝるのかみ語り
し、まゝに叙録して家に貽し置ものならし、
國語大やう古雅にしたかひ、世俗のいやしき語を避るといへど、事情に近かく、人聽
に切なれば、たとひ鄙しき俗語にてもうのまゝ取用て、擇ひすつるにいとまあらす、又
近代漢字をもちひて、音にてつらぬよみて、常語とするあり、武家の盛衰に武運とい
ひ、武士の戦功に武邊といひ、人に禮辭するを挨拶といひ、事に懈弛するを油断とい
ひ、君父の義絶を勘當といひ、山林の鬼魅を天狗といふ、是等の類なを多し、甚無謂と
いへども、久しく世にいひ來る詞なれば、今改るに及ばず、又字を誤りもちぬるあり
號令して流布するをふるゝといふに、御字たるへきを、觸字をもちひ、強忍にして

例 三

てするをねすといふに、忍字たるへきを押字をもちも、是等は同訓に誤らるゝなるへし、雨露の滴をしつくといふに、雫字をもちひ種菜の田をはたけといふに、畠字をもちひ伴語の人をときといふに、伽字を用也、是は雨下の二字を合せて一字として、露の下垂するといふ意をとり、白田の二字を合せて一字として、白地の田といふ意をとり、人加の二字を合せて一字として、人の相加るといふ意をとるなるへし、又同仇の兵をみかたといふに、味方の字をもちゆるは、一味の方といふ語を略するあるへし、又家號氏族のちかちかといふに、梶字を用也、是は柁字を誤て梶に作るなるへし、すへて此類は假名をもて其詞をしるしおきてもよかるへし、されど畠山梶原などいふ氏族をしるすには假名をもちひ難し、誤りなから異名をもちひても、各なかるへし。

雑話の中に引用る古語古文、もしくは事實頗多し、うのかみ客に對しては、あらまし覺へしまゝに、語りし程に、すこしつゝたかひ、又は首尾せぬ事もあれば、後に本誓を考へしるし置ぬ、されど今老筆して、精熟も乏ければ、うの出處を忘れて、急に考へむたらぬとは、必しもしむて考索せすも、し善讀者あらば、たゞ大意のある所をとらんかし、其餘は論するにたらず。

の例 目

四

駁曇雜話目錄

老學の自叙……………一
 釋源空が誓……………二
 異説まぢく……………三
 心の目しひ……………七
 愚公か山……………一〇
 老僧か接木……………二
 葉公か龍……………三
 扁鵲藥匙をすつ……………五
 矯輕警惰……………二
 忠孝のころろ……………三
 鬼神の徳……………五

の目

五

聖人の誠……………七

妖は人より興る……………九
 飛驒山の天狗……………一〇
 年内の立春……………一〇
 袖ひちての歌……………一〇
 諸道わさより入る……………一六
 釋寂室か秘訣……………一七
 武運の稽古……………一七
 善惡の報……………一七
 天人相勝……………一七
 夢の浮世……………一七
 鈴木某か歌……………一七

朝がほの花一時……………五
 不伎不求……………七
 春秋のあらうひ……………六
 秘事は嘘……………三
 佛になるやう……………五
 仁は心のいのち……………七
 義は心のされ……………七
 浩然の氣……………三
 敬の工夫……………五
 民は王者の天……………六
 富士のすう野……………六
 天下の寶……………六

風俗は政の田地……………七
 天下は天下の天下……………九
 直諫は一番鎗より難し……………六
 杉田壹岐……………一〇
 伴大膳……………一〇
 阿閉掃部……………一〇
 士の義節……………一〇
 歳寒知松柏……………一三
 手折し手にふく春風……………一六
 烈女種なん……………一三
 澤橋か母……………一三
 天野三郎兵衛……………一六

結解の何かし……………三
 二人の乞兒……………三
 燈臺もと暗し……………三
 運慶か口傳……………四
 法は江河のことし……………四
 鴟鵂のふみ……………四
 つれく艸……………五
 青砥か續松……………五
 渡部番……………五
 大佛の錢……………五
 泰時の無欲……………五
 楠正成……………五

足利家の亂……………一六
 武田信繁……………一六
 兵法の大事……………一七
 孫臏韓信か兵法……………一七
 兵は詭道……………一八
 不忘向君……………一八
 大敵外になし……………一八
 月は世々の形見……………一八
 離騷の秘事……………一九
 遍照か黒かみ……………一九
 世をすて、身をすてす……………一九
 詩文の評品……………一九

倭歌に感興の益あり……………三〇一

六義の沙汰……………三〇五

作文は讀書にあり……………三〇八

多錢善買……………三二二

文章の盛衰……………三二四

曇陽大師……………三二五

寸鐵人をころす……………三二八

言は身の文……………三三〇

一日の澤……………三三三

尤物人を移す……………三三九

年にはつかし……………三四一

壬子試筆の詞……………三四三

駿臺雜話目錄終

駿臺雜話

老學白叙

室鳩巢先生著

つら／＼身の過來し昔を思ふに、もとは武藏の産にてなんありける、うのかみ初て髪を結ひて、詩書と事としてよりこのかた、或之楸を捧て藩邸に游事し、あるは笈を負て、京師に旅食す、其後北地に家居せしかは、常に舊學を脩め、素願を償て、一生を終る事をなんばかりにき、然るに往年はからざるに、大家の徴を辱うして、ふた／＼ひ故郷に歸り住せしか、身老材腐て、やかて丘に首する死を待程になんなれりける、されは多くの歲月を経て、今犬馬のよはひ、七十にあまる四の年まで、學を好み道に志すといへども、人の師表となるべき道徳もあく、又外になにの材能もなくして、ひなしく世にあるころいとはいなき事なれ、されと翁を信して、こゝに問來る人々に、日ころ自得したる事を語りさかせて、後學のたよりともならずは、うれこ責てなからふる甲斐もあるへしとおもふにう、病をつとめ痛を忍んで、たぬす書を講するにでうありける、ある日講はて、宋儒以來、學術の異同にねよふ、座中に程朱の學に疑を貽す人ありしに、翁のいふやう、某もわか／＼りしとき、俗儒に習て記誦詞章を學ひて、多くの年月を曠うせしか、或時忽往日の非を悟て、始て古人已か爲にするの學に志ありしかども、不幸にして良師友もなかりしかは、諸儒紛々の説に眩惑して、

程朱をも半信し半疑ひつゝ、定見なかりし程に、とかくして又むなしく歲月を經にけり、年四、
 ころにもあらん、ふかく程朱の學、つゝに身へからざる事をさとりて、それより日夜程朱の書
 をよみて、心を潜め思を覃うする事今に三十年、仰けはいよく高く、されはいよく堅く、高
 に過す、卑近におちす、聖人復出とも、必其言に従ん事疑なし、されは天地の道は、堯舜の道なり
 、堯舜の道は孔孟の道なり、孔孟の道と程朱の道なり、程朱の道を捨て、孔孟の道に至るへからず
 、孔孟の道をして、堯舜の道に至るへからず、堯舜の道をして、天地の道に至るへからず、老
 學もとより信するにたらぬ事には侍れども、是はかりは實見ありて申事にて侍る、もし實見なくし
 てさもなきことを申ならば、翁が身忽天地の罰を蒙るへしと、誓ひけるに、座中も聽を改むる氣
 色なり、其時翁いふは、是は五百年來論定りたる事あり、今更翁かちかひを待へきにもあらず、朱
 子以後、宋には真西山魏鶴山、元には許魯齋吳草廬、明には薛敬軒胡敬齋の諸賢をばしめ、其外道
 學に志ある人、程朱を尊信せざるはなし、一代の碩學たる事、宋清溪かごとく、百家を綜核する事
 、楊升菴かごとく、文字論說の末においては、程朱を議すといへども、學術道徳に在りては、問然
 する事をさかす、されは明の中葉までは、おほやう世の學術も正しく、名教も頽れざりしをかし、
 王陽明出て、良知の學を唱へ朱子を排せしより、明の學風大に變しぬ、陽明既に没して其徒王龍溪
 のことき、つゝに禪學とある、それより世の學者良知に沈酔し、窮理に欠伸し、其弊嘉靖萬曆の間

に至て、天下の學者、陽儒陰佛の徒となりてやみぬ、諸賢よく思て見給へ、西山以下の諸賢、たと
 ひ汚下なりとも、所好に阿ねるには至らし、又其德行材識、いつれも明季并に今の儒者の下にある
 へきにあらす、それ程朱萬分の一にも及ばぬ學識をもて、輕々しくなにくれと譏議するは、鸚の
 脚を笑ひ譏にて海を測るに似たり、韓愈かいはゆる、井に坐て天を觀て、天を小なりといふの類な
 り、然るに輕薄無識の徒、其說の新奇なるをよろこひて、雷同瓦鳴する事、あけて數へからず、國
 家百年以來、太平久しく、文化日に開て、師儒世に輩出しけり、其學の是非はしらす、たゞ程朱を
 堅く崇信して、ふるき模範を失はざりしをう、ひとつの幸とせしに、ちかき比備作る人ありて、始
 て一家をたて、徒弟をわづめしより、老姦の備いて、其上にたゞん事を欲し、猖狂の論を肆にし
 て、忌憚る事なし、一犬虚を吠れば、群犬これを和する習なれば、邪說橫議世に盛なるころ、理に
 て侍れ、誠に此道の厄運ともいふへし、されは韓愈も佛老盛に行れし時に生れて、獨これを排斥し
 て、みづから孟軻に比せしか、その孟簡に與る書を見るに、天地鬼神臨之、在上質之、在傍
 とは誓ひしをかし、今翁かちかひも、孟子の功にこそ及はずとも、韓愈か心にはおどろきするよし、
 あなかしこ、かり初の空言とおはすへからず、

釋源空かちかひ

むかし源空上人、九條の月輪殿へつかはせし一枚起請とて、今に新黒谷に残りてあり、其誓書を白

は見付らねども、そのかみ人に尋ねしに、念佛申て極樂に生るといふ事、源空地獄に墮へしといふ事、なんわりけると語りし、彼宗門にてはさう慥なる事におもふへけれど、吾儘取りへは、この誓はどうける事はあらし、いかにとなれば、もとより極樂といふ事なければ、又墮へき地獄もなし、いくたひ誓ひても、いと安かるへきわさなり、前代いまた殉死の御禁なかりし時、ある諸侯の家殉死あまたありける中に、ひとり輿論のれしむ人にやありけん、其家の老臣みつから其宅へ行て死をとめしに、中々許諾せざりしを、いろくこしらへければ、其人やむ事を得ずして一諾しけり、さらば誓ひてよといへば、いと快く誓ふ、さては心安しとて歸りぬ、さて其翌日には殉死の面々亡君の菩提所へと相約して寺に聚りしに、日ころ知舊名残をおしみつゝ、まうて來にけり、かの老臣も行て上座しけるに、昨日ちかひし人、いちはやく來て諸客にいとまをしけるを、老臣らみて、某をこゝ欺き給ふとも、いかて誓ひとは背き給ふへき、口惜きわさかなといへば、其人笑て、御うへを欺き候事は御ゆるし候へ、昨日ちかひ申さす候へば、とかく御のかしなく候故、御疑を散する爲にこゝ誓ひ候へ、誓を背て神罰を得候とも、死ぬるより外の事はあるましく候、されば死をさばめたる身にて候へば、もとより誓ひを背く覺悟にて誓ひ候といへば、老臣こと葉なくしてやみぬ、此人の命を喪外に神罰なき事を意得て誓ひしやうに、源空も土になるより外に地獄なき事を意得てこゝ、かくは誓つらめ、今翁か誓はるれと異なり、上は皇天をいたさ下は后

履て、天地にかけて誓ふ、誓ひもし謬ならば、天地の罰をかうふるへし、されど我道の爲に誓ふは、源空も同じ心なり、是につけてたもふに、釋氏の教り、有を無にし、實を虚にするにあり、然るに無を有にせねば、有を無にしかたし、虚を實にせねば、實を虚にしかたし、されば極樂地獄のさたは、もと虚なる事としれども、もとより眞假一如とみてこれをどく、往生の教をたて、衆生を導けは賢愚をわかす、思慮に涉らず、すべて念佛滅罪の中に歸してやみぬ、是釋迦如來の密旨なり、我朝にても諸宗の祖になる程の僧は、此旨を互に心をもて心に傳て、假にも淨土地獄の沙汰をうさたる事とはいはず、今源空か誓も相傳の旨なるへし、九條殿の生るへき淨土もなく、源空か墮へき地獄もなし、されば無をもて有とし、虚をもて實として、衆生に生死を出離さする法とするは、釋迦の本意にかなへり、それはいさゝか僞なきことなり、もし吾儘至誠をもて人を教化する道といは、雲泥のさたなるへし、

異説 まち

ある日翁か病を問とて人々來りしを、翁も徒然にこゝ侍れ、今日はしはしといへば、さらば侍坐つかふまつらんとて、日をくらし語りあひし程に、當代異説の事に及へり、座中一人翁にむかひて、た、今西京東都におゐて、世お鳴て人を率る者の説を承り候に、或は我國の道とて、神道を雜へてどくもあり、或は陽明か學とて、良知を主としてどくもあり、或は古の學とて、新義を造りてど

くもあり、紛々異同の説まらくなり、いつれを是とし何れを非とせん、翁の心におゐるいか、思ひ給へるにや、翁さいて、當代門戸をたて、異説を唱ふるもの、おほやう今申さるゝ三流とさこへ侍る、是等の説を立る人々、さこそ所見あるにて侍るへし、もし翁か古に聞ところをもていはし、いつれもさには侍らす、それ道は天にいて、一原なるものなり、その一原のところをさへ悟りぬれば、わか國の道とて人の國にかはるへからず、良知の説とて窮理にはなるへからず、鄒魯の學とて濂洛にたかふへからず、然るに是を知るは、聖賢の書にあり、聖賢の書はよみやすからず、されは志を遂てくはしくよますしては、その意を得る事なし、今の儒者、おほくは自高ふる心ありて、濂洛の書をつくはしく讀人まれなり、いま程朱の藩籬をも窺はすして、已か心を先たて、にはか大賢を議す、所見の是非は姑くさし置ぬ、先其學の輕薄浮淺なるころうたてしく覺へ侍れ、さやうの人は孔孟の書をもくはしく讀ましければ、孔孟の意をも得ざるへし、孔孟の意を得ずしては、いかて程朱の説に疑なかるへき、然るに程朱をは輕々しく議すれども、孔孟を議する事をはさかす、是は孔孟にも疑なきにあらねども、孔孟は二千年來世に尊信す、それを議しては人のうけかはぬ事也、程朱は世代ちかく、明朝に至て或は譏る人もありける故に是を譏るなりといはし、是毛遂かいはゆる因事成人なり一定の所見ありといふへからず、もし又已か道德學術孔孟には企及はねはるは、是は程朱を譏るは、是已か賢はるか程朱の上に立とみつかから許すなるへ

◎異説まら

し、それはともあれ、神道といへど其説をさくに、我國に荷擔し、湯武叛逆の類といへば、其いはゆる神道は、仁義の外に有にやあらむ、良知といへど其説をさくに、佛性を明德と並へ稱し、武藏房辨慶を智仁勇の士といへば、其いはゆる良知は、是非の心にあらざるにやあらん、古學といへど其説をさくに、大學を聖人の書にあらすとし、孔釋の道二つなしといへば、其いはゆる古學は、徳性の外にやあらん、是等の説、いつれも翁か疑をのかれぬ事にて侍る、然るに仁義をかね、内外を合せ、古今に通するは、たゝ程朱の學なり、されは大中至正の道にて、孔孟の正統たる事、なにの異論かあるへき、たゝ翁かふかく恐るゝ所は、程朱の學をするのともから、身をもて踐履をせずして、たゝ講論をのみ事とせば、其學は正しといふども、道において何の得る事かあるべき、明朝にすてに其弊ありし故に、陽明も支離をもて朱學を譏りしるか、邪説の起るも是故にてこそ侍れ、もとより實行を忘れて空談をつとむるは、聖賢の戒る事なれば、今更翁か事新しく申にも及はず、ふかく慎むべき事にこそ

心のめしひ

座中又ひとりいふは、翁の仰らるゝこと、吾黨の士は、相戒めて實行をつとむるころ、邪説を距く上策と申へく候、されは孟子も揚墨を距て、好辨の説を辯し給はねども、其要を論して、君子は經に反るのみといふに歸せられ候、況や今偽學詭辨の徒、野邊におふる葛のつくはひひろこり、

◎心のめしひ

邪麗妖妄の説、林に落る木の葉のまじりけ、これに似たかひて辨説を費やさんば、反て吾道
を淺はかにするにて侍りなむ、此ころの事にて候、ある儒者の説とて、耳を驚かす事をころ承候へ
、道は天地に出るにあらす、聖人の作り給へる事也、又いふ道は、事物當然の理にあらす、文雅風
流のものなり、又いふ、五倫の内に夫婦のしたしみはかり天性なり、其外君をたつとひ父母をうや
まふの類は、人の性にあらす、聖人の作り出せる道なり、其作者聖人なる故に、古今に行はれて變
する事なしとて、古より邪説多しといへど、是ほど乖戻りぬる事は承らす、いへはいはるゝものに
候とて、互にいひあひて笑ひけるお、翁さいて諸賢は東坡か日陰の説を見給へりや、生れて盲たる
人あり、日はいかやうなる物と思ひてかたへの人にとへは、日はかく圓なりとて銅鑼を探らせける
に、銅鑼をたゝひて、さては日は聲ある物とおもへり、又かたへの人いふは、日は光あり、燭の至
る時には、おのつからあかるきやうにおほへぬへし、ろのことしといふを聞て、蠟燭をなてゝ、さ
ては日はほろく長きものとおもへり、今の世俗道理にくらき人多し、たとひ書を讀ても、道理にく
られれば、いふ人もさく人も、目ころあき候へ、心は盲たるにて侍る、されはろの盲たる心をもて
いろくにおもひならへ候は、此人の日ははかるやうに、おほきに取たかへたる事もあるへき
ろかし、今承ることさきの説は、取わけてなにと申へきやうもなく侍る、たとへは喪心の人を相手に
して是非を論するに似たり、ろの論する人もさきと同じ事と申へし、然れども翁ひろかに此説の起

◎心のめしひ

りを考るに、其人もと記誦の儒なり、記誦の儒は諸子百家を涉獵することをのみ好みて、四子六經
お心をとゝむる事なし、たゝ其文辭訓語を僉議して、理趣のふかきに及はず、然るに日ころわか學
の義理にくらきをはしらす、飽まで己か博學を自負して虚譽を要する程に、世も亦是をもて推崇
て一代の儒宗とす、明季諸儒の風、大抵かくのことし、ろれに放蕩不遜にして、人に驕り物に傲る
を高致とし、好て大言を吐て先賢を毀り、抗然として高く唐宋諸儒の上に出んとす、然れども有識
より是を見れば、學は遠く荀莊か餘毒にゑひ、文は近く王季か浮華を拾ふに過す、されは己か臆見
にまかせて、道は天地に出すとし、事物當然の理にあらすとす、己か曲學に合せて、道を文雅風流
のものとし、己か俗情にこゝろみて、夫婦の外は五倫みな人の性にあらすとす、本より論するにも
たらぬ事ながら、世俗多くこれを信して、群をなし徒をなすにう、とかく世は奇怪を好む事となん
今更思ひ當り侍る、たゝ人の心術を害し、世の名教を損するころ返すくもなけかし候へ、周禮
に造言の刑あるは、この爲にて侍るろかし、かやうの中に翁か道徳もなく材力にも拙き身をもて、
是を支へむとするは、誠に大厦の一木ともいふへし、たとひ言て距き、辭して闕くとも、たれか信
すへき、己か量をしらするの識も身にのかれかたく侍る、たとへは程朱の説は先王の禮服なれども
、宋人の章甫を越に賣かことし、斷髮の俗には用るところなし、程朱の説は天下の名曲なれども、
鄧容の陽春を楚に唱ふるに似たり、賦舌の俗には和する人なし、詩にいはいく、知我ものは我心憂

◎心のめしひ

ありといふ、不知我者是我何をか求むといふ、悠々たる蒼天これ何人うや、此詩は周の大夫周處の衰るをかなしひて作れり、今翁か吾道の衰るをかなしむも、事はかはれども心はおなじかりぬへし

愚公か山

されども翁か心は、知己を一世にもとむるにも候はず、昔より邪僻妄誕にして、根もなき事のさかんに世に行れてあなしかましくきこもるは、女郎花の一時とや申へき、大かたはつゝかぬものこころ、世を歴て正道へかへらぬはなし、しかるを心短くして、早く其驗を見むと思ふは、未練のといふへし、諸君列子か書を見給へりや、愚公といひし人ありけるか、家居ちかく山のありしをいといひてわさへ移さんとして、日々に子ども引ぐし出つゝ、手つから耒耜をとりて一簣つゝこぼちどりけるを、智叟といひし人是を見て、かく大なる山を、わづかなる人の力にてこぼしてはとてこぼちつくるへきかと、其をろかさ笑ひければ、愚公さして、わか代よりこぼちりめて、わか子の代にも繼てこぼち、わか孫の代にも又其子の代にも繼てこぼちなは、終にはわさへ移さぬ事やあるへきといへは、いよく笑ひけるとなんしるし置けり、もとより寓言あれは、この人あるにはあらねども、愚公かいふやうなる事は、世に愚なりといへは、愚公と名つけ、智叟かいふやうなる事は、世に智なりといへは、智叟と名つけたるならし、およそ天下の事、愚公の心ならば、おろくも一たひ

は成就すへし、然るに世に智ありと稱する程の人は、大かた智叟か心にて、愚公か山を移すやうの事を聞てはろの愚を笑ふ程に、なに事もろの功を成就せぬなるへし、しかれば世のいはゆる愚は反て智なり、世のいはゆる智は反て愚なり、それ故に禦寇か世を諷してころかくはいひつらり、今翁も百年論定まるの日を身後に期し侍れば、世の明智なる人よりみては、翁か迂濶なることを笑へし、されど老ひかめるにやあらん、此志を守て身を終なんところ思ひ侍れ、愚公か山を移すの類なるへし、

老僧か接木

されは是につけて思ひ出し事あり、忍か岡のあな谷中のさどに、何かしの院とてひとつの異言寺あり、翁いどけなかりしころ、其住僧をしりてはく寺に行つゝ、木の實ひろひなどして遊ひしか、住僧かたへの人にむかひて、前住の時の事をなん語りしをさく侍りしに、寛永のころの事になん、

將軍家谷中わたり御鷹狩のありし時、御かちにてこゝやかして御過かてに御覽ましましけるか寺へもおもほへす渡御ありしに、折ふし其時の住僧はや八旬に及て、庭に出てみつわくみつゝつから接木して居けるか、御供の人々おくれ奉りて、御側に二人三人つき奉りしを、中くやんなき御事をは思ひよらねは、ろのまゝ背き居たりしを、房主なに事するろと仰られしを、

あやしと思ひて、いとはしたなく接木するよと御いらへ申せしかば、御わらひありて、老僧か年にて今接木したりとも、其木の大きになるまで命もしれかたし、うれにさやうに心をつくす事よふなるうと上意ありしかば、老僧御身は誰人なればかく心なき事をさこゆるものかな、よくれもふて見給へ、今此木もつきておきさば後住の代に至ていつれも大きになりぬへし、然らば林もしけり寺も黒みなんと、我は寺の爲をおもふてする事なり、あなかに我一代に限るへき事かはいひしをさこしめして、老僧か申こる實も理なれど御感ありけり、るの程に御供の人々おひく來りつゝ、御紋の御物とも多くつとひしかば、老僧うれに心得て、大きにおられて奥へにけ入しを、御めし出しありて物など賜りけるとなん、いま翁も此老僧か接木することく、老朽ぬれども、ある限は舊學をさはめて、人にも傳へ書にもこのして、後世に至て正學の開くる端にもなり、此道のために萬一の助ともなりなは、翁死ても猶いけるかことし、古人のいはゆる死しても骨くちしといひしころ、思ひあたり侍れ、いさゝか我身のために謀るにあらす、諸君も翁かこのころを信じ給へかし、しかれどもかく申せば、翁か身ものに似たるやうにて、はつかしくころ候へ、翁わかゝりしより心に聖賢をしたひ、口に六經を誦し候へとも、たゞ載籍のうへにて聖賢を窺て、少し其意を得たると申はかりにて侍る、今もし眞の聖賢にあひ奉りなは日ころしたひ奉りし心とちかひ、反ていみは、

葉公の龍

かる事あるまじきや、心もとあくころ候へ、すこしもいみは、かる事ありなは、今申事も皆偽になり、林慙淵愧つくへからす、又なにをもて後世を待候へさや、むかし葉公龍を好て、其形を畫か、せて日夜愛翫せしか、ある時眞の龍これを見て、あかける龍をさへさやうに、愛翫あるに、わか行たらぬには、ことあるもてなしにもあひなるとおもひ、窓より顔をさし入たれば、葉公大きにおられてにけまどひけり、今東西兩都の儒者をみるに、多き中には正學の志ある人もあるべけれども、大かたは自から尊大にして師儒と稱しつゝ、我ころ聖賢の道を好むといへど、たゞ論説をつとめ、著述を衒ひ、是をもて世に傲り名を釣には過す、もとより道に實得の功なければ、もし眞の聖賢にあは、目をかへして相見むと覺侍る、しからは日ころ聖賢の道を好むといふは、葉公か龍を好むに同じかるへし、晏嬰か仲尼を毀り、蘇軾か程頤をにくむにて、考へ見給へ、ひとり齊の賢人ひとり宋の名臣にて候へとも、うれさへかくのとし、況や二子に及はざるものをや、されは漢の楊雄道徳を論し太玄を著し、一代の儒といこれしことも、一旦賊葬に臣としつかへて、節義を失ひしるかし、たとひ葬か世に生れずして此事なくとも、是等の學問にては、もし孔孟にあふて節義のこともて責られなは、必にけさけぬへし、然らば太玄五千文皆虛文にあらずや、後世の子雲ありてをしらんといへど、後世葬か太夫ありて知音たらんかし、この故に、言論のみを聞いて、その實迹を見されは、世話にはたけ水鏡といふとく、仕かたはかりにては人信しかたきものなり、へや三十

前の事にて侍る、加賀の國に杉本の何かしとて、ひとりの微賤の士ありき、翁の人を久しく相好しか其子九十郎といふもの、十五歳の時父はあつまへ行役しける其跡に年輩同し程なる近隣の人の子と、圍碁のうへにて口論しけるに、九十郎こらへず、刀を抜て相手を一太刀きりしを、かたへの人取さへけり、さて其事廳に達して後、相手の創療治さすへしとのことにて、其間九十郎は官長の家を預かり置しに、いさゝか臆したるけしき露ほどもなく、言語ふるまひの落つきたるは中々年におはぬやうに見へける、日を経て相手終に創にて果てければ、九十郎も切腹するに議定しける程にその前の夜、主人名残をおしみつゝ、酒肴いろ／＼／＼いしてもてはやしけるに、九十郎母への文などしたゝり置、さて主人にくはしく謝詞をのべ、此程附居たる家人へも、それ／＼にねんころにいとま乞して、さていひけるは、面々へ名残もおしく候へは、こよひはあくるまでも語りたく候へども、あす切腹の時ぬふたく候ては、いか／＼と存し候へは、先へふせり候へし、面々は是にてゆる／＼と酒すゝめられ候へとて、奥へ入て高脚してねむるを聞て、跡に居たりし人々感しあひけるとり、又の日つとめてよき程にれさいて、沐浴し衣服あらためつゝ、／＼／＼い心静にし、其後切腹の席へいて、檢使に一禮し、こゝろよく切腹しぬ、其有様從容としてやすらかなりし、いかなる勇烈老功の士たりといふども、是には過まじきと見へしとて、其場に有合し人々、年を経て後迄も語り出して、涙おとさぬはなし、此事おこりし始に翁彼か父のもとへ文やりてしらするとて、九十郎た

とひ切腹するに及ひたりとも、此程のおとなしさにては、未練なる事あるまし、それは心安くおもふへしといひつかはしけるに、後にきけば父のよみを人にみせて、かくはいひて來れども、わらはへに疾するに、前には人にすかされて、思ひの外におとなしく見ゆれども、火を取てむかへは、うのきはになりて俄になき出して、前の言葉には似ぬ物か、わか子もいまた年にたらねは、いささよく切腹したりといふたよりをさくまては、心もとなく思ひ侍るといひしとて、古人のいふとく、此父なくは此子あらしとなん思ひ侍りき、さて此事を今申出し侍るは、九十郎かかくはかり歳にも似すしてけなけなるを、世にきゝ傳ふる人もなくて果なんは、あまり不便に候へは申事にて侍る、其上今翁をはしめ、言論文字にて古人のまねをして、うの實のわらはるゝ時に至て、日ころのあらましどちかひありなんは、是も誠にわらはへの疾なるへし、多年學問して歸者といはるゝ身に、かの童蒙無智の九十郎か覺悟にさへおどるへき事かは、いとつかしきこゝろならずや、諸君も常にこゝを察して、よく／＼省み給ふへし、

扁鵲藥匙をすつ

他日の會に翁いふは、過し日學術の邪正を論せしか、其論いまた盡ざるやうに覺ゆ侍る、今日其論を果し候へし、今世儒者、朱子を講するに三等あり、第一等は陽明良知の説を祖として朱子を講するあり、陽明は傑出の人なり、朱子の學を毀て支離とするも少しいはれなきにもあらず、當時朱學

の弊多は文字言語にもとめて、内省の工夫や、すくなきを見て、朱子格物の説を義外とする程に、良知を標的として、一向に内省につとめしむ、これ其意よからざるにはあらず、然ども朱學格物の説、良知を外にするにあらず、事物に即て良知を致すなり、たゞ陽明の説のよく良知にもとめて事物に求へからずといは、先王の教、詩書禮樂といはずや、詩書禮樂、事物に非して何う、孔門の教、文行忠信といはずや、文に六經あり、行に百行あり、忠と不忠と、信と不信と、必事物によりて其理をしるへし、もしひとつの良知を致せばおのつから敬して、禮を學に及はず、おのつから和して、樂を學に及ずといひ、又ひとつの良知を致せば、おのつから百行も脩り忠信にもすゝむといは、それはと簡約にして手近き道あるを聖人何としてしめし給はず、かくむつかしく迂濶なる教をたて給へき、且いへ良知を致すに、事物をもてせずしてなにをもつて致すや、定て内省を專にして私欲をさるをもて良知を致すとするにやあらむ、それはたとへ五聲をしるは耳にあり、耳を守れば五聲をさかすして五聲をしるといひ、五色をしるは目にあり、目を守れば五色をみすして五色をしるといひ、五味をしるは口にあり、口を守れば五味をなめすして五味をしるといふかとし、しらすや五聲をしるは耳にありといへども、五聲は物にあり、五聲をさかすしては、五聲の眞をしるへからず、五色をしるは目にありといへども、五色は物にあり、五色を見すしては、五色の眞をしるへからず、五味をしるは口にありといへども、五味は物にあり、五味をなめすしては、五味の眞をしるへからず、況や五聲にも清濁物ことに異同あり、五色にも深淺物ことに異同あり、五味にも厚薄物ことに異同あり、其物によらずしては、なにによりて其別をしるへき、親を愛し兄を敬するは不學してしるといへど、事親事兄の事の上にて愛敬の理を窮むへし、すへて君子の百行皆しかなり、其事に即て、其理を窮めすして、己か善知り悪知るものひとつにしてしるへきにあらず、孝は百行の本といへば、しはらく事親の事あて申し侍るべし、朝省昏定やうの事は、およろ事親の人たれかしらざるへきなれども、其さへ田舎農家の民などは、愛親の心なきにはあられど、朝に省むへく昏に定むへき事ともしらするるかし、況や親を養ふは誰も養へども、口體を養ふと志を養ふの異同あり、親を敬ふは誰もうやまへども、嚴威儼格は事親の道にあらず、其外父母の前にては、恒言不稱老叱咤の聲犬馬に及はずといふの類に至まてすへて事親の事なり、もし其事に即て各其當然をさはめすして、わか愛親の心にもとむれば、おのつから事々つくすにたりぬといは、聖人の上にはさもありなん、學者の及ふへき所にあらず、おろらくは孝の道をつくさぬのみにてもなく、又心ならず不孝の事もありぬへし、かくいへばとて、事親をやめて是等の事を講せよといふにもあらず、又是等の理をのこらす究めねば事親へからずといふにもあらず、たゞ事親の上にて其事の當否をさはめ明にし、又は讀書の上にて聖人孝を論し給ふにあは、反復して其理趣を味へ、其本末をさはむへし、もろくの事はをもて例してしるへし、是即格物の學なり、かくこの

をしるへからず、況や五聲にも清濁物ことに異同あり、五色にも深淺物ことに異同あり、五味にも厚薄物ことに異同あり、其物によらずしては、なにによりて其別をしるへき、親を愛し兄を敬するは不學してしるといへど、事親事兄の事の上にて愛敬の理を窮むへし、すへて君子の百行皆しかなり、其事に即て、其理を窮めすして、己か善知り悪知るものひとつにしてしるへきにあらず、孝は百行の本といへば、しはらく事親の事あて申し侍るべし、朝省昏定やうの事は、およろ事親の人たれかしらざるへきなれども、其さへ田舎農家の民などは、愛親の心なきにはあられど、朝に省むへく昏に定むへき事ともしらするるかし、況や親を養ふは誰も養へども、口體を養ふと志を養ふの異同あり、親を敬ふは誰もうやまへども、嚴威儼格は事親の道にあらず、其外父母の前にては、恒言不稱老叱咤の聲犬馬に及はずといふの類に至まてすへて事親の事なり、もし其事に即て各其當然をさはめすして、わか愛親の心にもとむれば、おのつから事々つくすにたりぬといは、聖人の上にはさもありなん、學者の及ふへき所にあらず、おろらくは孝の道をつくさぬのみにてもなく、又心ならず不孝の事もありぬへし、かくいへばとて、事親をやめて是等の事を講せよといふにもあらず、又是等の理をのこらす究めねば事親へからずといふにもあらず、たゞ事親の上にて其事の當否をさはめ明にし、又は讀書の上にて聖人孝を論し給ふにあは、反復して其理趣を味へ、其本末をさはむへし、もろくの事はをもて例してしるへし、是即格物の學なり、かくこの

久しうすれば、やうやく道理純熟して、後はわか愛親の心ひとつをもて親につかふるに、其道をつくさすといふ事なし、是程朱格物の學の妙處なり、かねて力をこゝに用る人にあらすは、其味をしるへからす、孟子の不學してしるゝと良知なりといへるは、人に孝弟の心學ひすしてあり、是を本として學びて、其量をつくせとの事なり、不學してもうれにてたれりといふにはあらず、今朱學の弊を改んとて格物窮理を廢するは、朱子の意をしらざるのみにあらず、矯枉過直といふへし、それも亦まかれるなり、第二等には、理氣體用などの説、孔孟の言及はさるといふに據て朱子を議するあり、ひかし孔子性相近しとの給ひしに、孟子に至て性善を論したまひ、其外養氣夜氣の論など唐虞三代の書に沙汰もなく、もとより孔子も似たる事をもの給はざりしかども、宋の諸先生、其指の聖人にもとらずして毫髮の疑へきことなきを見つけられし程に、先聖のいまた發せざる所を發すとて殊に稱嘆せられけり、况や程朱の時、孔孟の世をさること遠し、言を撰ひ論をおこし、道を明かにするに急なり、道理におゐてたかふ事なくは、何る必しも規々とし古人の言を踏襲すへき、今朱子の説孔孟の給はざるに出なは、其意をふかく考へ究へし、もしまた合ざる所あらは、しはらく疑を闕とも可なり、然るを己か心にわはぬとて、孔孟の給はざるに事よせて、にはかに大賢の説を軽々しく毀るころ、其學識の淺陋なるもしられ侍れ、其議論をさくに、いつれも疎鹵膚淺なる事になん有ける、おゝに一々擧正するにいとまあらず、たゞ其理氣の説をあらゝく辨し侍るへし、改

○ 固陋を脱す

かいふは、天地の間氣の外になにかあらん、この氣四時に流行し、萬物を生して、おのつからやます、是則天道なり、昭然として見へたる通りの事なり、然るを朱子一等上に形象なき物をたて、氣に配して理とするは、隱怪にちかしとて、其説似たり、此疑は彼に限らず、あなたにても先儒の中に是に類したる疑難ありしるか、それは朱子の言をふかく考へて、なを疑を免かれぬといふにてありける、彼か一過の見をもて臆決するやうの事にはあらず、もとより理氣前後の説は微妙なる事にて、一座の話にていひ盡しかたし、翁しはらく老子の語をかりて、たとへをもてかたはかり申侍るへし、車をかろへて車あし、歳をかろへて歳なし、たとへは車を數へて、是は輪なり、是は軸なり、是は軾なり、是は轅なり、輪をもて車とすへからす、軸をもて車とすへからす、軾轅をもて車とすへからすとて、輪をすて軸をすて、軾をすて轅をすて、見たれば、車もともになくなりけり、たゞ車の理は、車の出來ぬ前に定まりてわれはあらず、上代車のみかりし時、車をは作り出すらめ、今とても車匠車を作らんとては、輪を剝り軸を剝りて、何時によらず車を作り出すは、車の理常にはるひすしてある故に、それ本つきて作り出るにあらずや、是によりて見よ車は輪軸より出る歟、輪軸は車より出る歟、車は輪軸より出るといふは車の形ある事をしりて、車の理ある事をしらすればなり、歳をもてたとへても同じかるへし、十二時を日とし、三十日を月とし、十二月を年とす、是は時なり是は日なり、是は月なり是は年なりとて、のけて見たれば、外に歳といふ物なし

◎ 固陋を脱す

◎扁鵲藥貼をすつ

二十

然れども三百六旬有六日に、天と日と會して歳となるの理は、前に一定してありて、日月も約束のどく運ればころろれに本つきて、上代に曆をも作り出し、今も曆家に當代の曆を作るは勿論にて、只今亦き日月を考て、前百載後百載の曆を作るに、毫髪もたかひなきうかし、是るの理は日によらず月によらずして常に存在するにあらすや、されは天言はずして四時行はれ百物生す、是るの樞紐根抵となるものありて、天地の太極柱となりて、四時も是より行はれ、百物も是より生す、然るに車をかろへて車なく、歳をかろへて歳なければ、氣をはなれて理なし、外に形象もなく方所もなきはどに、たゞ道理とまていふへし、よりに孔子は形よりして上下をもて器に對して道といひ、朱子は形よりして先後をもて氣に對して理といふ、すへて同一理なり、今其本源をしらすして、枝葉の上にて議論を生せば、紛々異同なにの底極かあるへき、體用の説も亦しかり、道に用あれば、必體あり、寂然不動は體なり、感而遂通は用なり、靜にして存養すれば、體に即て用存し、動て省察すれば、用に即て體行はる、是を體用一源顯微無間といふなり、孔子の敬以直内義以方外と本給ひ、子思の中和をもて大本達道といひ、孟子の仁義をもて正位大道といふ、是またすへて同一なり、體用をいはねども、いつれか體用にあらざる事ある、彼曲學の徒、僅々として得る小自足とすれば、道に全體大用あるをしらぬもことばりうかし、ふかく論するにたらず、第三等には、放蕩を貴ひ、名檢をいとひ、專に文辭典籍を學とし、一たひ程朱居敬窮理の説をきへては、腐儒の常態

とて、相ともに嘲笑ふ程に、學者脩己の道においては、講すへきものとせず、その議論をさくに、不急の察無用の辨、諛々として人耳を喧しうせざるはなし、なにをか取擧ていひ出すへき言の葉にせん、たゞ太息に付してやみなまし、むかし扁鵲齊桓公の疾を見て、二たひ迄はなをいふ事ありしか、三たひに及ては、もはや療治の手なかりし程に、藥匙をすて、驚走りき、俗學の弊もこゝに至てと桓公の疾の日にふかさかことし、儒に扁鵲ありども、療治の手なかるへし、況や老學非才無智の身に何とて道の輕重をなすにたらん、たゞ口を籍て驚走りつへうころ覺へ侍れ、

矯輕警惰

翁又いふやう、當代東西兩都の人を見るに、もとより人によりて一概には論じがたけれども、多くは異論を好み、名譽を要するは同事にして、其病根は又異なるへし、大抵洛陽の儒は驕惰の弊あり、東都の儒は剛輕の弊あり、洛陽は風氣和し土地狹し、この故に近き比まで其土の宿儒おほくは温厚柔謹にして、制行正しく、威重ありて人望を失はざりき、然るに近年溫柔變して惰弱となり、威重變して驕泰となる、空談を尙び文史を玩ひ、是をもて自から尊大にして、曾て遜志時敏する事をしらす、されは良工用意の勞をいかしてしるへきなれば、たゞ道を容易なる事に意得る程に、はては先賢を慢り、程朱を毀りてやみぬ、たどへは王孫公子、あたゝかにろたちて艱苦を経ねば、おほえす驕泰になるかことし、宋武帝の高祖の葛燈籠麻蠅拂を見て罵て田舍翁とするも、祖宗の大業を

◎矯輕警惰

廿一

建立せし艱難を知らねば、更にどかひるにたらず、翁ひかし史記蘇秦か傳をよみて、秦か我をして
 洛陽負郭の田二頃あらしめは、豈能佩^二六國相印^一乎といふを見て、實もしかりとおもひき、今洛陽
 の備、大かた土着に安むして、隱居放言自からたれりとす、もし其人をして世務にあつかり、一官
 をつとめ一職を辨せしめは、しらすよく其任にたへんや否や、恐らくは洛陽二頃の田崇をなさは、
 懐^レ居^レ求^レ安^レの心ふひかれて、やかてかけこもらまし、いかて是等の人と聖賢の志を論すへき、東都
 の儲は又是に異なり、關東は風氣薄く土地潤し、るれに武人俗吏其地に逼居て、其風おのつから儲
 者にも移れば、昔は文飾なく質直なるかたありて、取へかりしか、今は質直變して盛惡となりぬる
 程に、放蕩輕薄徳義を銷刻し、浮辭怪説文字を造作す、たとへは蘇秦か洛陽宿執の害はなけれど、
 世に游説するは縱橫捭闔傾危の道なるかとし、されは今天下の學者、情弱ならねは剛毅なり、此
 二病除かされは、高談^二性命^一博究^二群書^一とも、聖賢の徒といふへからず、横渠先生も是をもて
 の要務とし給へはこころ、矯^レ輕^レ情^レの一語を擧て示されしなれ、情弱なれば義にいさむ志なく、つ
 いに郷愿の人とある、剛毅なれば忠厚の心なく、はては臆^レ依^レの徒に陥るへし、こゝをもていへば、
 矯^レ輕^レ情^レの一語學者の要務なるのみにあらず、しかしなからずへて士たる者の頂上の銀針たるへ
 し、

忠厚のこころ

されば士は第一忠厚の心を本とすへし、その人となり輕薄にして材美ありといへどみるにたらず、
 るれにつきて翁日ころ樂毅か傳をよみておもへらく、毅は戰國の士にあらず、學問ありて道のあら
 ましをさくの人なり、しかるに後世毅か將略あるをしりて、學問あるをしらす、樂毅燕の昭王に仕
 へ、上將として齊を伐て、七十餘城を下せしは、非常の大功なり、不幸にして師いまた凱旋せさり
 しに先に昭王薨し、惠王齊の反間を信して、將をかへ兵權を奪ひしかは、毅みつから垂^レ成^レの大
 功をすて、すみやかに燕をさる、見^レ幾^レ而^レ作^レ不^レ俟^レ終^レ日^レといふにちかし、其後身を趙によせし時
 、趙王燕を伐む事を毅に謀りけるに、固辭して其謀に預からず、誠に忠臣の法とすへし、その惠王
 に報する書をみるに、忠厚の心言外に諒然たり、戰國反復の世には、空谷の足音と申侍るへし、り
 の書中に、君子交絶不^レ出^レ惡聲^一忠臣去國不^レ潔^レ其名^一といへるは、三代の遺言なるへし、も
 し學問なくしては、誰か其言の旨き事をしらむ、今其意を解侍るへし、交絶不^レ出^レ惡聲^一とは、たど
 へは人と交通して、其人の惡事をいはぬは、もとよりの事なり、其人と中たかひては、已か是をい
 はんとて、其人の非をいふへきに、交絶て後に其人のあしき事を一向に言に出さぬは、君子の忠厚
 人に負かさるの心なり、翁其意を詠し侍るとて、

ならはしな、見の手かしはの、ふたれもて、身は葛の葉の、うらみありとも、今更翁つれか申も
 おろかなれども、伊川先生に感服する事あり、蘇東坡伊川をうねみ惡みて、哲宗に上る奏狀に、程

頤か姦と稱し、又衆中にて嘲て、慶曆岐裏の叔孫通などいひしか、伊川遂に東坡か是非を一言の
 給し事をさかす、是にて知へし、洛蜀の二黨いつれか正なるいつれか邪なる、いはすして明かなり
 、又刑恕初めは伊川に従ひて學ひしか、後に小人に黨し、伊川を讒して陪陵に謫せしむ、門人聞て
 伊川に告しに、伊川の給ひけるは、故人かねて情厚し、われ少しも疑ふの心なしとて、いさゝか不
 平の辭色なかりし、是等の事誠に吾徒の師法とすへし、忠臣、去國不潔其名といふも、忠厚の
 事なり、是は人臣たるもの、君と義絶て其國をさらんに、あなかちに君の非をいふにもあらねど、
 己かあやまらぬ事をいふて一分の上を潔うせんとすれば君のあしきになるゆへ、わか名をにこらし
 自からわかあしきやうにしておるとなり、是忠臣の心なり、翁加賀にありし時、ひとりの老人あり
 、其父太陽寺左平次といひし者、長湫の戦に池田勝入の手にて戦功あり、其後天下泰平になりて、
 大阪籠城の輩をさへ、御仁政にて諸侯の國につかふる事を御ゆるしありし程に、戦功ありし士ども
 己か手にあひし事をいひたて、仕をもとめしに、左平次一生己か長湫にての戦功をいはず、さて親
 しきものに、大將の敗亡したるに、其手に屬したるもの、己か戦功をいふへきにあらすといひしと
 語りし、己か戦功をいへば、惣勢の敗軍をは大將の越度にし、一分のいひわけしてのくに侍る、
 左平次をねもふにこそ、古人忠厚の餘味あり、いとやさしき事なり、其戦功をいふははるかに
 劣り侍りぬへし、

◎忠厚のこゝろ

廿四

鬼神の徳

ある日講過後、五六輩跡にのこりつゝ、おのゝ疑問に及しか、中にひとりいふは、こゝにひと
 つ問まいらせ度事侍る、我朝は神國とて、ちかきころ世に神道をとく人あまたあれども、いつれも
 其説隠怪にして、正理を得たりとも覺ぬ侍らす、もとより鬼神の説は、聖人も假初にはのたまは
 ねは、我等ことさ薄識の人のにはかにささるへき事よはあらねども、たゞ其かたはしを示し給は、
 他日の功夫の種ともならましと、各同じころに益をこへは、翁きつて先易を引て、聖人以神
 道一設教とあるは、聖人の道、神妙なるをさして神道といへり、仁道などいふかとし、是をひとつ
 の道とするにあらず、然るに世に神道とてとくをさくに、我國の道とて聖賢は道より一等たかき事
 のやうにいへるころ、意得難けれ、抑鬼神のふかき道理は、翁もしらぬ事にて侍れども、日ころ覺
 悟し置けるあらましをかたり侍るへし、中庸に鬼神之爲徳といへるはいかゝ心得給へる、朱子釋
 して性情功效といへるは、徳字の義を釋してかくいへり、もし其徳たる實をいへば、左傳に神は聰
 明正直にして一なるものありといへる、是則神の徳なり、然るに神は正直なるものといふ事は誰も
 しれども、聰明なる事をしらす、神はかりすゝときものはなし、其故は、人は耳をもてきけば、耳
 のねよはぬ所は、師曠か聰といふども、さかすしてありなん、目をもて視れば目の及ばぬ所は、陸
 震か明といふども、見すしてありなん、心ありて思慮すれば、顔悟の人といふども、なを猶豫あり

◎鬼神の徳

廿五

ぬへし、神は耳目をからず、思慮に涉らず、真直に感し真直に應ず、是ふたつもなくみつもなきた
ハ一ツの誠より得たる徳としるへし、されは天地の間に、きはめて耳とく極て目はやき物ありて、
時をもわかす所さりせず、有のまゝに現在し、端的に往來し、あらゆる物の體となりて、兩間に盈
わたりてあれども、元より形もなく聲もなければ、人の見聞には及はすして、たゞ誠あれば感し、
感すれば應ず、誠なければ感せず、感せねば應せず、應すれば忽ちあり、應せねばおののからなし
、これ天地の妙用にあらずや、中庸に視之而弗見聽之而弗聞體物而不可遺といへるは此
事なり、昔西行法師伊勢の神祠に詣てよめる歌に、

なに事の、おはしますをば、しらねども、かたしけなさに、涙こぼるゝ、なに事のればしますと
もしらすしてかたしけなさは、何事によるや、涙は何故にこぼるゝや、是誠の感動にあらずして何
ろ、神前にて其心他念なく一筋に誠になれば、神も其誠のなりに來格して、かたみに感動する程に
、涙もこぼれつへし、たとへは清くすめる水には、其まゝ月のうつりて、たかひに光をますかとし
、久しくなれば、一ツ誠お渾融して、神と人とをわかす、たとへは水や空空や水ひとつにかよひて
すめるかとし、こゝに至では、洋々乎として其上に在かごとく、其左右に在かごとくあるへし、是神
のあらはるゝなり、誠のればふへからざるなり、さりとて神を遠き事と思ひ給ひる、たゞわか心
にもどめ給へ、いかにといへば、心は神明の舍なり、一毫も私欲のさりなければ、れのつから天

○聖人の誠

地の神明と同氣相感して、かくいちしるさうかし、但相感する事なければ、さる事なかるへし、西
行も神前に至らぬ時は、いかて涙こぼるゝはかりのかたしけなさはあるへき、是をもて來格は相感す
るにありといふ事をしりぬ、今各に申す、たゞ躬に省み内に求めて、心の誠の本つき給は、下學
の功積て上達せらるへし、其時にこゝ只今翁か申すやう、いさゝかうける事にてなしと思ひしり給
はめとて、其談やみぬるに、座中良久しく聲もなく、静まりかへりてありしか、翁の御物かたりい
とたうとくこゝ侍れ、誠に西行か歌にこたへて、今日もかたしけなさに涙こぼれつへう侍るとて、
各感心にたへする見へし、

聖人の誠

へいふは前に申侍る西行か歌にて、舜の無爲にして治まるといふ事を思ひ給ふへし、聖人の誠は
神明なり、もしなに事の、ねはしましては、無爲といふへからず、ろもなに事のなに故とはしら
ども、たゞろの篤恭の毛りなん神のことくにして、れのつからかたしけなさに、涙こぼるゝはか
に覺ぬへし、るれに衣裳をたれ手を拱て、上に現在しておはじませは、天下仰き奉る事日月の
とく、したひ奉る事、父母のことし、天地無形の神の感應時あるやうなる事にてはあるへからず、
されは所過者化とて、聖人の身の歴たまふ所は變化をなして改まる事、ものゝかたに入るかこ
とし、舜歴山に耕したまへは民皆畔を譲り、河濱に陶したまへは、器皆いしまわらざるといふ

○聖人の誠

にてしるへし、又所存者、神として、聖人の心のとまる所は自由を得て廻る事、もの、寧にあるかとし、孔子邦家をぬてんには、殺すれば其まゝ來り、動かせはうのまゝ和すといふにてしるへし、こゝに至ては、とかく凡慮の及ぶ事にあらず、これ聖人の手からにて仕出したまへる不思議にもあらずた、誠はればはれぬものになんありける、されは君子室に居て言を出して善なれば、千里の外應す、況やろの邇き者をや、室に居て言を出して不善なれば、千里の外違ふ、況や其ちかき者をやと、孔子ものたまへり、さりとて家にてする事の忽に千里に及ぶといふにはあらず、たとへば風の草木に移るかとし、其ひゞき彌高にまさりゆく程に、家より國にひゞき、國より天下にひゞく、是自然の理にして、誠のおほふへからざる所なり、こゝをもて君子は常に内に心をもちひつゝ、たゞ手前を正しくして外を飾ることなし、たとへば錦を衣てうははおほひするかとし、其美れはへともおほふへからず、いやましにするさうかし、小人は内行れさまらすして、外見のみ飾れはくさきものに蓋するかとし、其臭ふさげともふさくへからず、いとゝわらはるゝうかし、枚乗か吳王を諫る書に、欲人勿聞莫若勿言欲人勿知莫若勿爲此語淺きに似て味ふかし、名言といふへし、口にひて人のさかぬやうにし、身になして人のしらぬやうにするは、いやしきたとへなから、悪に利息を添て身にねふかとし、口にうひ月にうひて其おひまざりなは、いかておほひかくすへき、聖人より以下は、君子も過ちなさにあらねども、これをかくさんとせすして、人の見るまゝにあらたむる程に、過ちは過ちと見へ、改るは改ると見へて、其しかたにかくる事なく、心に一點くもりなきとしるれば、反て其徳のひかりもまさりぬへし、されは子貢も、君子の過は日月の食のことし、過てるも人皆見、更むるも人皆仰くといへるうかし、ひかし小邦鐸千乗の盟を信せずして、子路の匹夫の一言を信し、回紇六軍の兵をおろすして、郭子儀か單騎の約をおろる、是二子の誠かねて隣國にあらはれ、蠻貊に及ぶとをしるへし、千里の外應するにあらずや、もとより聖人の誠には及はねども、心事明白にして一毫の疑なき事を、天下の人皆しる故に、一たひ其言をき、一たひ其面をみると、其まゝ信服する程になにの手もなく、なにの造作もなし、是誠の感應にして恩威智力の及ぶ所にあらず、是をもていふに好事門を出す、悪事千里を行と、世話にいへとこれ辭言なるへし、好事悪事ともに其實ある事のいつれか千里にもかさる事あるへき、悪事のみに限るへからず、

妖は人より興る

座中ひとり、神は聰明正直なるものにて、至誠の感應はさもあるへきことにて候、然るに昔より妖怪不正の事ども、世に流布し侍る、是もろの理ある事にやといふに、翁、鬼神は天地の功用二氣の良能といへは勿論正理より出たる事なれども、人の本性悪くして氣質に、おちては善悪あることごとく、神も人世に降ては、正しきあり、正しからざるあり、其子細は陰陽五行の氣の四時に流行する

◎妖は人より興る

三十

は、天地の正理にて、不正なけれども、其氣兩間に游散紛擾して、いつとなく風寒暑濕をなすには、おつつから不正の氣もあり、人に感ずるにてしるへし、されは天地の間、この氣の往來にあらざるはなし、正氣をもて感ずれば、正氣感し、邪氣をもて感ずれば邪氣應ず、但正邪ともに二氣の感應より、出れば、邪氣の感とても神にあらずといふへからず、夫正氣の感は、大小となく精誠の所致にあらぬはなし、大事にていは、高宗の良弼を感し、周公の金縢を感し、小事にていは、鄒衍か六月の霜を感し、韓愈か惡溪の鰐を感ずる、其事は異なれども、同じく精誠の感にして怪むにたらず、前年真西山の集を見侍るに、ある民家の女子、父の疾を憂て夜になれば天に向て身をもて、代らんと禱りしに、其誠感してやありけん、一夜群鵲にはかに遶屋飛噪し程に仰て空中を眈れば、大星三ツ燐煜として月のこゝく欄檻の間を照しけるか、翌日より父の疾瘳けり、西山群守として其事をまのあたり、見聞せしま、其閭を榜表して懿孝坊とし記を作て其事をくはしく著されける、是等はことになしかなる事にて、其感いちじるしといふへし、然るに衰世に及て、人心正しからねば、大かた邪氣の感のみにて、それより妖怪を生ずるなるへし、もとより怪力亂神は聖人の語り給はぬ事なれども、其理を窮るは格物の一端なれば、諸君のために申侍るへし、左傳に妖を魯の申繻が論じて、人之所忌其氣饑以取之妖、由人興也といへり、よく物理に通する言といふべし、饑は、火の未盛して進退するとあれば、人の氣にてもかくのことし、すへて、人の忌おるる

所は、世話におろろしき物の見たさといふやうに、さなから心に忘れぬほどに、思想にひかれて、火のかつもへかつきゆるやうに、あるとみつなしと見つして、かくしてやまねは、氣うかれて、我にもあらずなりぬる程に、邪氣隙に乗じて、幻に形象をさへ生しぬれば、さまざまに妖をなし、怪をなするか、齊侯の彭生を見、鄭人の伯有を見るの類是あり、すへて氣饑の所致にて、正氣の感には絶てなき事なり、唐宋小説の書に、洞庭湖の邊に水神の祠あり、大湖を渡る人は、是に水難をのかる、やう禱る事になんありける、ある賈人毎年大湖をわたる程に、その祠をふかく信じて、往來に必賽祀せしか、あるとし湖上にて風に遇て船破れて、つゝに溺死しけり、其子湖邊に祠り、父の死を悲しみつゝ、怨悔する餘りに、わか父此祠を多年信仰して、祭奠いさゝか懈らざりしに、冥助なかりしころ遺恨なれ、あすは必此祠を焚んと思ひきはめていねたりし其夜の夢に、水神ふかく恐るゝけしきにて汝わか罪をゆるさば、湖上にて樂を奏して、其恩を報すへし、されはとてわれ祠をやかるゝを恐るゝにわらず、又汝か怒氣のいさはひに恐るゝにもあらず、たゞ心のろこに必焚んと決断したる一念、我にこたへて、敵しかたき程にかく謝するといひけるを、もとより齊東の野語、信するにたらぬ事なれども、神は決断におろるゝといふ事、道理ある事なり、もし此人怒の心もくまゝ、やかんと思ひながら、その氣饑にして、やくともやかぬとも決せず、其氣進退せば、やかて神にけおされて、反て祟を受へし、むかし駿府の御城に、うは狐といひ傳へし狐あり、人

◎妖は人より興る

三十一

の妖は人より興る

三十二

に手巾をわたふれば、それをかぶりて舞しか、聲はかりて形は見へず、たゞ手巾空に翻轉して廻舞のやうを見せし程に人々輿に入けり、人手巾をわたふる時に受取る形は見へぬとも、もたる手をものゝすりて通るやうに覺へて、其まゝ取てもきける、わかき人々わざと渡さしとあらかふに、なにと堅く持ても、とられぬといふ事なしと語るを、大久保彦左衛門聞て、我はとられしとて手巾をもちてこれをどれといふに取得す、さていふは、さても無分別の人よ、あなおろしとてにけさりぬとて、彦左衛門は、手に覺のある時にわか手ともなさりておとさんと思ひつめけるを、狐さとりしなり、されは武士の心剛にして一筋に直なるさへ、其氣儀になき程に、狐も妖をなしぬす、まいて正人君子においておや、本より邪は正に敵せねは、正氣にあふては、氷の日にひかふて忽に消るることし、西域の妖僧、傳教をいのり殺すとて自から暴死し、武三思か妾、狄仁傑にあふて藝を施しぬす畏縮せしにてしるへし、それをつきても世に正人君子乏しき故に、邪氣已かしし威福をなすこと悲しけれ、しかのみならず世ころりて宮觀の淫祠をわかめ、浮屠の邪法を信して、あゆみをはこひ、貨を費やさるはなし、もとより正體もなき事なれども、ものゝゆるみながらも、形われは其なりに影あるやうに、ふかく信向する心から、不思議と見ゆることもあれば、いよくこれに惑て正理を失ふにてるありけるともある事には、おの神かしこの佛とて、漫に靈驗ありと稱しつゝ、いろく虚誕なる事を造作して、世を誣民を欺く程に、人群聚て市をなし、錢財積て山をなす

其人は國家の大賊、其事は天下の大弊といふへし、

飛驒山の天狗

しばらくありて翁、鬼神の感應は氣の往來なり、わつか氣に涉れば、聲色にあらはるゝを待すして、鬼神ははやとくにしる者にて侍る、こゝに寂然不動にして、毫末も氣をましへず、鬼神もいろいゝさる所あり、是わか本分のある所にて候へば、翁はこゝをさして我と申たく候、謝靈運か詩に、達人貴自我といひしは、暗に申あて候へども、その我といふもの、中々靈運ことさかする事にてはなく候、天且不違況於人乎況於鬼神乎とあるも、人はいふに及はず、天地鬼神も我にたかひぬさる事をいふなり、三代の聖人、この我をもて天下の上に立て、天下惟我のみあり、たれか我志に違ふ事あらむといへり、後世の賢人、この我をもて萬人の外に立て、千萬人の中といへども、たゞ我ある事をしるといへり、されば、我といふ者のあり所を尋るに、一念未生の時、本然未發の體是なり、君子こゝを存養してることなはねば、天地も我より位し、萬物も我より育し、鬼神も我より感應す、なに事か我によらぬ事あるへき、邵康節の一念起る事なければ、鬼神もしる事なし我によらすして誰にかよらんといへるは、これをいふ也、それを付てあやしき事ながら、加賀にありし時、人の語りしは、北國にいやしき工の飛驒山にゆきて、杉を採てへきて生業とする者ありき、ある時山中に杉をへきて居けるに、ひとりの山伏の鼻の隆きか來りしを見て、心に不思議のものか

◎飛驒山の天狗

三十三

な、天狗にやとおもふに、汝はなにとて我を天狗とおもふるといふ。いやくされかしとれもふに
 汝はなと我をいとひてされかしとれもふるといふ、何にても心にたもへは、はやしりてとかむる程
 に、後は是非なくろのへさし板のなかくはへたるを箱繞めて、繩して括らむとしけるに、心ならず
 取はすして板はねける程に、其板の末、天狗の鼻にした、かにあたりしかは、汝は心ねのしれぬも
 のかな、ねろろしとて行さりぬると、板のはねけるは、思慮より出さる事なれば、おゝは天狗も
 及はぬにあり、是にてしるへし念慮なき所は、鬼神も窺ひえさるになんありける、常人多くは心に
 閑思雜慮常に絶る事なく、なに事も思慮作爲の中より出る程に、氣にひかれ物にうはれて、我ど
 いふ物自立する事あたはず、されはあの我を失はしとあらは、心源存養の工夫をあすへし、心源存養
 の工夫は私欲なきを本とす、あの心私欲たになければ、靜慮動直とて、何事も思慮作爲をからず、
 た、靜慮の中より、道理のまゝに真直に出る程に、萬物の先に定まりて萬物の後に隨る事なく、鬼
 神を制して鬼神に制せらるゝ事なし、無聲無臭して天下の大本となる、無體の體ともいふへし、
 無思無爲もして、萬化の大柄となる、不御の權ともいふへし、老子の象帝之先といひ、釋氏の
 唯我獨尊といふも、此所をすあし見つくるにやあらぬ、されと彼は人倫をすて事物を外にし、た、
 空寂を事とすれば、人欲を制すといへと天地を明かにするにたらず、一心を治むといへと、萬事を
 宰するにたらず、其體はありと見へて其用なし、なにをもて大本とし、なにをもて大柄とすへさるゝ

大に似て大に似ざる事なるへし、

年内の立春

されは中冊にいはゆる其不親を戒慎み、其不聞を恐懼るとは、誠の本源、かのなに事も、おはしま
 さぬとあるを持養するの功夫にて、さて隱微の中、一念の起るを省察して、その本源の地を亂らぬ
 やうにするあり、又簡要にて侍る、それは中庸を講せし時にくはしく申たる事にて侍れば、今更い
 ふに及はすうれに、見ぬ京物語に似候へ共倭歌の意に引合て申候へし、古今集の巻頭にのする在原
 元方の歌、もとより歌のさまも手つよく力あるやうに覺侍る、二十一代集をはしめ、家々の集に
 も春の巻頭とするを見るに、大かたは空の霞谷の鷺など春のけしきをもて春たつ事をよめり、それ
 は春の始をいふには第二段に落るなるへし、いまた冬ふかく何のけしきも見ぬに、氣色をはなれ
 てよまんは、なにをか言葉の種とせむ、いと難かるへさむなるに、おるとやいはんおとしとやいは
 んとは、なにの造作もなくさりととは、おもしろく取なされたり、祖父にもはらざる作者といふへし
 されと翁か此歌を取侍るは、詞のおもしろさといふにもあらずおれをわか修行にたどるに、我心
 に人しらす、一念の萌すは、獨居の時暗處の事なれば、なにのけしきも見へず、いは、年の内に
 春の來るに同じ、一念の萌すとあるに、既に善惡のわかれば、年の内にこそとこのしわかるゝ
 に同じ、されは千里の謬も毫釐の差より、おあるといふも、おゝにある事なり、濂溪先生の説は善

悪といふも此事なり、是非のさかひ善惡の關と見るへし、されは目をはなたす此關を守りて、われどわか心に善とやいはん惡とやいはんと尋つ、一筋に惡をさり善に向ふあり、我儒の修行の本とする事なれ、もし此所に心ゆるして、色にいて聲にあらはれて始てさどらは、たゞ手の延たるといふはかりにもあらず、たどへ勉強すとも力をもちゆるに難かるへし、されは元方の歌、詞のおかしきのみにもあらず、聖學のふかさにさへたとへつへし、常に打吟して、我心の省とするに助なきにあらす。

袖ひちての歌

座中ひとり和歌を好める人ありしか、只今迄元方の歌たれも口馳たる事に候へども、人心善惡の幾にして意得へき事とは思ひよる人なく候に、御物語にて始て承りて候といへは、翁古今集は外の集どちかひ、其歌いづれも誠實に候故、おのつから道理にかよはして見るへくあり候へ、右の元方の歌にさし繼て、貫之か自からよみたる袖ひちての歌をのせしも、月令に孟春のはしめに東風解凍とあるに、かなひて、心ありて見へ侍る、其故は春風の凍をどくあり、陽和の至る最初のしるしにて侍れ、かの霞鶯などやうの事は、是程に的實には覺へ侍らす、されど春風の凍をどくといふばかりにては、いかによみかなへたりども、さまたて餘情あるまじきに、いにし歳の春過ての後より夏秋冬をへし事を、袖ひちて結ひし水のおはれるを、一首の中によみおめて、さて春たつけふの風や

どくらひと、今又春にかへるありて結ひし事、千鈞の重さある物から、歌にたけありて、餘情かきりなきもの也、此の外の歌も古今集にのせしは、いづれも言葉すなはにて、なにの手もなきやうにて、打吟すればうの味おのつから深長にして、言外にあるやうに覺へ侍る、詩にていは、漢魏の樂府古詩のおとし、詩は盛唐といへど、漢魏の詩は、實情より發して、おのつから巧拙をはなれて見ゆ、更に同じものにあらず、古今集の歌もしかなり、其言葉すかた後の作者の及ふへきおどからどは見へす、是をおもふにさして撰者よみ人のどこにもあらず、文章は時と上下するあれば、時代の盛衰につれてかくあるにあらず、いか、思ひ給へるといへは、翁の仰られやうちかふましく覺へ侍る、歌人の論も大かたさにてある候へ、さて右の貫之か歌に付て思ひ出したる事侍る、天文のおろかどよ、織田備後守一族彦五郎と不和になりて、争戦に及ひけるを、備後守か家老平手中務といひし者一族の不和なるは、敵國の侮を受るものなりとて、和睦の事を謀りしが、事と、のひしかは、彦五郎か家老坂井河尻などいふ者のもとへ、中務よろあひのふみをつかはすとて、其文のはしに、貫之か袖ひちての歌をかきつけるとどう、親族のちなみは、袖ひちて結ひしやうになれむつましきもの、不和なるは是こはれるにて、今又和睦してもとへかへるを、春たつけふの風やどくらんとよせけるにて、かゝる事にようへても、こゝろふかく思ひなかく、言葉さへたりて、誠にたけき武夫の心をも和けぬらんとおほむ侍る、中務かしこくも思ひよりぬるにて候、翁はいか思ひ

◎諸道わさよりい

三十八

給ふにや、翁打うなつきて、昔春秋の世に列國の士大夫宴會（ひやくくわい）の時は、必三百篇の詩を歌て、互に志をあらはしけり、其後此事世に絶て、魏晉（すいしん）よりこのかた、たゞ自から詩を賦するを専（もつぞろ）にし、巧拙（こうせつ）を爭事（まがひ）になりけるころなけかしけれ、やまと歌もさにてころ侍れ、むかしより歌を好む人を見るに、たゞよまんとのみするなるへし、必しも自からよますとも、萬葉古今などの歌を、時にあたりて思ひよりにて、打吟（うた）したらむは、心もやすらかに、あはれもふかゝるへし、

白河院五月のころ淀（よど）に行幸の時、曉（あけ）になる程に、子規（こき）はのかに鳴て過ければ、俊賴（しゆんらい）など一首詠せまはしく覺へしに、女房の舟中にて、淀のわたりのまた夜ふかきにと打吟したるは、中々あたらしくよみたるにはまさりてさこぬけるよしいひ傳へ侍る、されど是はほとゝぎすの歌を、ほとゝぎすに思ひよりにたるなり、作者の心はうれとはなきを、平手か袖ひちての歌を引しやうに、その意のかよふをとりて、外の事に引合たらんは、すくに比興（ひききやう）のころにもかなひて、ことに感情ありてさこへ侍る、周人の三百篇の詩を歌ひしも、みな斯のことし、いとやさしき事なり、其平手、後に信長をいさめかねて自殺しけり、その諫書（かんしょ）を見るに、學問ありて義理のあらましをしる人となしはからる、れしき事なり、古より忠臣義士の不幸ほど、痛ましき事はなしとて、長使（ながし）英雄（いゆう）涙滿（なみだみ）襟（えだ）といふ句を口すさひけるにう、座中の人々感しあへりき、

諸道わさよりい

ある時講會や、懈りしに、日を経て諸客來會せしか此ほどは世事に、さへられて懈怠（けんたい）からなりとて、悔みけるを、翁聞て世事にさへられて懈怠するといふは、大かた學者の常語にて候、此翁をばしめ、左様に申す事にて候へども、畢竟（ひつじやう）己か志のたゞぬ故にて候を、それとは意得すして、世事に答をおふするにて侍る、但世事にさへられて、書をよむに懈るは、さもあるへし、それは一説ある事なり、すへて學といふは、聖賢の道をつとめ習ふ事なり、其つとめ習ふ致知（ちち）あり、力行あり、されど其理をしらねは行はれず、其理をしるは、書に限らねども、聖賢の書を第一とする程に、學といへは致知を主とし、致知といへは讀書を主とす、此故に大學に、自修（じしゆ）も學なれども、學をもて自修に對しぬれば、其學といふは、致知の事なり、子夏（しげ）も仕而優則學（しにゆうぜんがく）といへり、仕るも學に外ならねども、仕へて違われは學ふとあれば、其學といふは、讀書の類なるへし、又子路（しよ）何必讀（なんにびどく）書然（しかん）後（ご）爲（な）學（がく）といへるを見れば、そのかみ孔門の學といふは、讀書を専とすらしられ侍る、しかいへど學は讀書に限るへからず、書をよみて義理を講し、事物（じぶつ）も即て其理を窮（くわ）る、同じく致知の事にして、力行の始なり、もとより聖人の道は、日用事物（にちようじぶつ）を外にせねは、父母につかへ君につかうまつり、朋友（とも）に交るより、其外世にあらゆるもろくの應接（おうげつ）に至るまで、一事一物、いつれか致知の地にあらざる、一動一靜（いちどういちじやう）いつれか力行の時にあらざる、善はるの善なる理をさはめ、悪はるの悪なる理をさはめなは、世事善惡ともに、皆わか學中の事あり、いかて世事にさへられて懈るといふ事あるへき

◎諸道わさよりい

三十九

◎ 諸道わさよりい

四十

翁加賀にありし時大阪よりひとりの後生北地に寓居するあり、翁に相見したきよし紹介していひこしけるか、他日翁が徹慮を問て、談論時を移しけるに、翁ちかきころは世事多くして、久しく廢學なんしけるといひしかは、其人學は世事の外なる物にやといひしに、翁意得て、其失言を謝しき、翁か意は、讀書を廢する事あるをふと廢學といひける故彼さ、咎めけるなり、されは天下の事に即て其理をさはめて、吾心の知を致すは、内外を合するの道といふへし、しかるに陽明良知の學をする人、朱子格物の説を讀て、朱學の格物より事にもせよ、世の居官務職日夜給仕する人などは、何のいとまわりて天下の理をさはむへきと難しける由さ、侍る、是朱子格物の説をわしく意得て、先一閒時を得て事物の理を窮めて、後に其事をするにてもへるよかあらん、朱子の格物といふはさにはあらず、親に事する上にて、その事々に即て孝の理をさはめ、君に事する上にて、其事々に即て忠の理をさはめ、昨日情のいまた至らざるを今日しり、今日事のいまた盡さるるを明日しる、是格物致知の學也居官任職かことさも、必其事をつとむる上にて、當否を所し事空を察し、日々に職事に熟し誠實にすむ、是則格物致知なり、もし居官任職ものは窮理のいとまなしといは、獨に翁か世事故に廢學するといふに同じかるへし、されは事に大小ありて理に大小なければ、時どなく所どなく格物の地にあらざるはなかるへし、さりさらひすへきにあらす、よりて天下の物に即て其理をさはむといふなり、さりとて先後緩急の序はあるへき事なり、日用親切の事をすて、一

草一木の理をさはめよといふにはあらず、今良知の説、手短く本づきやすきよふにさなむれども、聖人の道はさにはあらず、およろ天下の道、なにもわさより入るはなし、詩にいへらすや、天生丞民一有物有則物はわさなり、則は法なり、たどへは六藝を習ふかことし、其心さよより、其法によらすして、吾心の知にて其理をさはめんとせば、なにとして其道を盡すへきや、聖人の道もかくのおとし、吾心に不學してしるの良知ありといふとも、事物に即て其知を致さすしては、未鍛のかねのことし、昆吾の鐵といふとも、あらかねにては銳利の用をなさし、未磨の玉のことし、荆山の璞といふ共、あらず玉にては、温潤の色を發せし、此理をよく思ふへし、今孝にていは、聖人門人の孝を問に答へ給ふを見給へ、孟懿子には無遠をの給ひ、孟武伯には慎疾をの給ひ子游には不敬をいましめ給ひ、子夏には色難しを詠し給ふ、此四子親を敬愛するの心あらざるとにはあらず、た、事親事長の上に付て、或は此に得て彼に得ず、又は愛勝て敬たらず、敬勝て愛たらずる故に、斯の給ふにてありける、仁を問に答へ給ふも是に同じ、顔子には克己復禮を告給ひしか、克己復禮、必日用事物に即て其理を驗る事なれば、視聽言動をもての給へり、仲弓には敬恕を告給ひしか、敬恕も亦日用事物の上にて驗る事なれば、出門使民をもての給へり、其外も推してしるへし、もし六經の教も、良知にて、すむ事にしあらば、詩は思無邪にすみ、母不敬にてすみ、易は審變識時にすみ、春秋は尊周抑夷にてすみあまし、何によりて詩に國風雅頌の情をい

◎ 諸道わさよりい

四十一

ひ、禮に經禮曲禮の目をわかし、易に陰陽卦交の變をつくし、春秋に朝聘會盟の事を備ふべき、この故に六經の教は、天下にあらざる事物の理を明かにするにあり、事物の理明かならざる事なければ、吾心の知つくさるゝ事なし、わか心の知つくさるゝとなければ、是をもて身を檢するに、節文愼をさる事なし、然れば程朱のいふ所の致知力行は、則孔門の博文約禮にあらすして何う、それ致知格物の説を義外とて譏るは、たゞ罪を程朱に得るのみにあらす、實に孔門の教に違なるへし、

釋寂室か秘訣

ある日講はて、翁もの語り、昔足利家治世の季に、寂室といひける僧あり、わかさころ大明に渡海し、東歸の後、僧侶歸依せしか其徒に語ていふは、吾に緊要の一訣あり、秘密の事なれども汝に付すへし、汝毎日晨に興て、まつ手を引て、頭顱を摩、又目をもて袈裟を顧て、心に念し口にいふへし、吾はこれ釋迦文佛の法孫なり、たゞひ命を殞すとも、比丘の摸範を失はしと、是第一の覺悟なりとぞ、寂室異端の徒なから、いと殊勝なる事なり、儒家にこれ程の志操ある人をさかす、大方儒者の摸範を失て、反て釋氏に阿同し、彼か下風に立事をしらす、ひかし尹和靖の踐履の嚴整なるをは、僧も見て感し、儒家にいふ周孔も是に過しといひ、朱文公の高風を圓悟仰慕し、其梅花の詩を和して、獨隣萬木飄零後屹立風霜慘淡中となむいひける、二賢は眞儒にて、異端を絶れしかども、彼さへ、歸向せしるかし、今世の儒者をみるに、武人裕吏にも貶職せらるれば、いかて人

の敬信を得へさや、甚しきものは、戈を倒にして聖言を駁し程朱を譏る者も、近來世に多く出來侍る、儒教の振はさるころ理みて候、又近來武士の風の衰弱になるも、人々多くは武道に心懸薄さか所致にて候、北地にひとりふるさ武士ありしか、子弟に訓て、汝等すてに兩刀を佩て武士と名乗ぬる上は、朝夕武名をけかさしとねもふへし、こゝにひとつの口傳あり、汝等門外に出る事あらは、家の閤を蹴く時に、必氣をつけて、ふたゝひ家に歸らしと覺悟すへし、此覺悟なくは、外にて不慮のことあらん時に、心れくれしなるといひし、寂室かいふ所と、道は替れとも、其意趣は同じ事なり、されはいつれの道にも、心懸ふかき人は、かくなんありける、但其心懸て忘れしとするはなに事うといふに、釋氏は五戒を破らす、聲利に近つかさるをいひ、武士は武道に不覺をとらさるをいふにやあらん、それは簡約にて紛ることなく、心懸るにやすかるへし、吾儒の道は百行を該れば、何をか題目として心懸へき、翁常に立居につけて思ひ出つゝ、忘れぬ事三あり、其三は父の恩、君の恩、聖人の恩なり、樂共子か言に、先王之制民生於三事之如一惟其所則致死焉、父生之君養之師教之といへり、是樂共子か始ていひ出るにあらす、先王の大訓にして、古今の通語なり、中に師といふには同異あり、道德の師あり、術業の師あり、古人も人師は得かた、經師も得やすしといへば、まいて後世に至ては、道德の師は得かた、大かた術業の師なれば、君父の恩に並ふへきは稀あるへし、たゞ後世に教をたれて、我人依頼し、其恩深長なるは聖人なり、

報本不忘恩は、人道の大端なり、されば父母は、わか出来し本なり、我を生して我を育す、一毛一髪までも、父母の遺體にして、遺愛のある所にあらざるはなし、いかして忘るへき、さて君恩に浴して、不餓不寒、妻子を養ひ、親族を賑はす、すへて養ひ生送し死の道、世話にいふ第一本までも、君恩にあらざる事やある、いかして忘るへき、されど飽まで食し、煖に衣て、君父よつかふまづる道をしらすは、禽獸に近かるへし、幸に聖人の教によりて、義理のあらましをもしり、禽獸に免かるは、これ聖人の大恩にあらすや、いかして忘るへき、れよう人として、常に此三を忘すは、天理おのつからほろひすして、本心を失ふに至らざるへし、兼善のあつまる所ともいふへし、翁は常に此三を忘れずれもひ出て、身にしむはかりに覺へ侍る、家學の要訣とも申つへし、今人家の子弟を見るに、多くは我身の樂をのみ思ふて、君父の恩を思ひしる心なきよりして、言行に愼みなく、放逸に流れ侍る、又老子碩學と稱する人も、聖人の恩を身におもひしらするか故に、自から高ふり、名聞を務て、篤實なる方は露のこり侍らす、もし此翁か家の要訣を授て内省せしめは、陽浮の氣を降伏して、誠實にすむの媒ともなりぬへし、されど彼か師といひ弟子といふ者、程朱親切の訓を聞ては、嘲笑て頭痛すといふもあり、悪心すといふもありと、人の語りしか、翁かいふ説をさかば、さころ嘔吐もしぬへし、もし世に篤學の人しあらば、老耄の警言にあらざる事しらすんかし

武運の稽古

ある時わかき人々、武藝の場より歸るさに、翁の巷へ來て例の文談に及へり、翁いふやう武藝は各の家業といふへければ、常に稽古あるへき事也、但武藝と武運といつれか重き事とれもひ給へる、翁の武藝より武運は重き事とれもひ侍る、其故はいかに武藝に達したる人なりとも、武運つきなは何の詮かあるへき、長湫の合戦に、森武藏守は打物取て鬼武藏といはれけれ共かけ出るとひとしく銃丸に中りて即時に果ぬれば、武藝も武勇も用ひへきやうなく侍る、然れば武運ありての武藝ならずや、各武藝の稽古あらば、先武運の稽古し給へかし、さて武藝の稽古は、うれくの師に問給は、くはしかるへし、武運の稽古においては、藝術の師のしる事にては侍らす、うれは翁なところと語りのこしけるに、座中ひとり翁の仰事には候へとも、武運の稽古と申事どううけられ候はぬ、ひかしより人力の及ばぬことなれはこそ、武運とは申つれ、もし稽古にて及ふ事ならば、誰か稽古せざるへきといへば、翁かしら打振て、いや武運に稽古する侍れ、さらば承らむといへば、翁各思案して見給へ、運はいつくより出る事にて侍る、天より出るにあらすや、されば世話にも運は天にありと申候、どかく運をば天に禱るより外はなかるへし天の心に叶はんとならば、天の好める事は何事、悪める事は何事と尋ぬへし、翁つらく天の好悪を案し見るに、天は仁をこのみて甚不仁を惡む、信を好みて甚不信を惡む、其いはれをいふに、天はた、萬物を生するを心とする故に、

より今に至るまで、年々人物を生し、てやむ事なし、秋冬肅殺の氣行はる、といへど、果して肅殺するには非ず、生氣を固うして根へ歸せしめ、春を待てて又發生せんとなり、易に生々之謂、易といひ天地之大徳曰、生といへるは此事なり、天にありて物を生ずるは、人に在ては人を愛するあり、各是をもて、見給は、天の仁を好て不仁をにくむといふ事疑なかるへし、又信を好む事をいはい、日月星辰の行度、萬古を經ても一日のことし、日月の食を見給へ、遙に大空の外なる事を、こゝもにて推歩するに、分秒迄もたかはす、是に過たるたしかなる事あるへきや、天下の至信といふへし、然れば人は外の事はしばらくさしをく、たゞ仁にして信にたにあらは、おのつから天心に叶ふへし、天心にかなは、などか擁護なかるへき、さりとしてしばらく仁を行なひ、假に信を守りて、其驗あるへきとはならず、是は平生にある事なり常に仁を好て人をうこなはず、常に信を篤うして人を欺かす、かくしつゝ、歳月を積なは、其誠天にこたへて、はからざるに自然の冥助もありな、されは、戰場にても、ねのつから禍機に觸す、矢石にもあたらざるへし、翁か武運の、翁は、是を申すにてこそ侍れ、老人の僻言と聞給ふへからず、たゞなげかしきは、世俗の、専に身を利して人をうねみ、偏に智を恃て詐を飾る、自から是を世を渡るよき計とてころれもふらめど、終には天に見捨られぬへし、人として天に見捨られなは、いかてかよき事のあるへき、翁わかき時より世に時めく士大夫の邸宅を過て見るに、三つ葉四つ葉に作りならへたるに歳々に諸寺

諸山より捧げすゝめける武運長久といふ牌を門に釘せぬはなし、然るに其家或は刑戮せられ、或は子孫斷絶して、武運長久の牌は其まゝ門にありなから、主うせ家滅ひて、跡方もなく成行もあまた有にて侍る、又それ程にこそ侍らぬ身を辱しめ名をねとして、晩節を保さるもいくはく人、是等は皆武運の稽古なき故にこそをしはからるれ、日ころ稽古なくして、祈禱厭勝の力にて、武運を守らむとれもふ事、至てれるかなりといふへし、孔子も獲罪於天、無所禱也とてころの給へり、凡神にこひ佛に詣て、符章陀羅尼やらの事を信する、婦女などのするはいか、せん、丈夫たる者の有へき事にはあらず、然るに近世士大夫より上つかた民の師表たる人も、こゝに惑はざるはすくなし、されは左道の民間に行はれてはてしなきも是誰か、過るやとて翁毛詩の瞻鳥、爰止于誰、之屋といふを打吟して慨嘆にれよひしか、いかある心にありけん、

善 惡 の 報

しばらくありて座中より翁にいひけるは、武運の稽古と申事あたらしき事、承て感服し侍る、今より、此稽古はわすれおこたるまじきにて候、但世には仁にして信ある人に禍あるもあり、不仁不信なる人に福あるもあり、顔回は大賢なれども、貧窮にして夭し、盜跖は大盗なれども、富厚にして、翁のいへる武運の稽古もこゝに至て、少し疑はしむころ候へ、是はいか、意得侍へきにか候、ふ、それ善をすれば福あり、惡をすれば禍あるは、是正理の前にて必定の事なり、それ幸あり

不幸あるは、時の仕合にて不定なる事なり、聖人はたゞ正理を説給ふにて侍る、不定の事をはいか
 て説給ふへき、たとへば身に病なく、長命ならんと思は、常に酒色をいましめ、養生するにあり
 、主君の氣にあり、立身せんとおもは、職事を懈すして、よく奉公するにあり、然るに養生よく
 ても、天死する人あり、養生あしくしても長命なる人あり、されはとて養生しても益なし、養生せ
 すしても、害きしとはいふへきや、よく奉公しても、不幸にて立身せざる人あり、奉公よくせずし
 ても幸にて立身する人あり、されはとてよく奉公しても、益なし、奉公よくせずしても害なしとは
 いふ可からず、もし養生しても益なしといひて、日夜酒色を恣にせば、やかて病死に至るへし、奉
 公しても益なしといひてたひく職事に懈らば、やかて黜削せらるへし、しかれば養生は長命を得
 るの道、奉公は立身を得るの道たるは、是不易の理といふへし、各よく考へて見給へ、なに事こ
 もわれ、かねて覺悟をさため給はんには、道理の前にて定まりたる方にさはめ給はんや、時
 はせにて定まらぬかたにさはめ給んや、道理の前にて定まりたる方にさはめ給ふにてあるへし、
 理にて極めたる事は、たとひちかひても後悔なかるへし、しあはせをたのみては、覺悟もさたま
 ぬものなり、それ故に兼てのあらましたかひぬれば、必脚を踏らしかし、されは福善禍惡といふは
 道理の前なる事なり、聖人の教も君子の守も、道理の前にてきはめて、其上吉凶禍福は天にまかす
 外はなき事なり、いはんや道は人の當然の事なれば福を得んとて善をなし、禍をおうれて悪をなさ

ぬといふにもあらず、この故に孔孟の人を教へ給ふを見るに福善禍惡の沙汰に及ぶ事なし、商
 書にころ天道は福善禍淫とは見へたれ、是はもろく愚頑なる民に命し給ふによりて、かくは
 ありし事ならん、然れどもこれ道理の至極したる事なれば、釋氏の方便とやうの事と、同日の談
 にはあらざるへし、

天人相勝


翁かさねていひけるは、人衆勝天、天定勝人、是は伍子胥吳王闔閭をすゝめて、楚國に攻入、
 父兄の仇なればとて、舊君平王の墓をわはさて、尸を戮するを、伍子胥か舊友申包胥、平王の臣た
 りしか、あまりの事とて、人して伍子胥かかきいせける、古人の名言といふへし、天は必人にか
 ち、邪は正に敵せず、然ども人衆くして勢盛なれば、人力をもてしはらく天に勝事もあれど、ろ
 れは天の未だ定まらざる内の事なり、天定まりては人に勝すといふ事なし、但天は悠久にて自然な
 る物なれば、人間の約束などの、急に其驗みゆるには似へからず、然るを人ちいさき眼をもて、天
 道を窺ふ故に、たゞ目前見る所をもて善惡の報なき事と見過しつゝ、君子は善をしても疑あり、小
 人は惡をしても恐れず、ろの善惡はかはれども、いつれも天定まりて人に勝といふ事をしらねはな
 り、それ顔回の天盜跖か壽は、天の未だ定まらざるなり、其後天の定まるを見に、顔回は一簞の食
 一瓢の飲、陋巷に窮居せしかども、其名今に日月と俱に垂て、千載朽すしてあり、盜跖は聚徒手

人天下に横行せしかども、身死して肉いまた寒さるに名先ほろひて、誰いひ出す者もなし、責て遺臭百世、ころ積悪のしるしともいはん、是をもて見給へ、天の顔回に報する事果して薄しとせんか、盜跖に報する事果して厚しとせんか、ろの上顔回盜跖のことく善悪の報遅きは稀なり、其外世俗を見るに、善悪の報端的なるもあり、又しはらくおろきもあれども、其身は及はぬはなし、近きころ國家賊吏多して前後罪にあたるかごとし、早くあらばるゝもあり、をうくするゝもあり、又幸にして一生のかれて死後にしるゝもあり、いかゝしてかくはあるといへば、郡縣の租税金穀の出納、年を積て限なく稠疊する故に、ろの交互紛糾の間、金銀の出入たかひありても、大かたはしれ難き程に、小人は利欲にさどきものなきは、ろれをよき機會と見て、色く智を廻しつゝ、ひろかに官財を私して妻子をさかやかし、奢侈をさはひれども、ろの跡見へぬ程は、恬然として自から計を得たりとす、其内あらはれて罪に行はるゝもあれども、ろれは其人の才覺たらぬ故なりと反て己か智に自慢して、いさゝか懲戒むる心あし、されど才覺をもてする事の、いつかたかはぬことやある、一旦はからざるに其端見へて、糺問におよぶ時にころ、分釐も勘定に漏ることおければ、智も計も施す事なく、ろの姦利忽にあらはれて、さきにしはらくのかるゝと見へしも、末の露もとの雫にて、彼も是も終には免るゝはなし、しかれば國家の上にて見るに、大きな所帯はかくのことく事の實否俄にはしれ難きうかし、いはひや、天は四海國土を徧覆し、幾億萬ともなき人を引受て、いは

ゝ莫大の所帯なり、れよろ人のする事、善となく悪となく限もなく入亂るれば、善悪の報いか、急に極るへき、されは前後不同ありて、治定せぬ事のやうに見ゆる程に、小人の險を行ふて幸とせむる事もあやしむにたらず、しかるに天にも終には勘定の極まる時あり、是を天定するといふなり、こゝに至て天の聰明は、天下の名算の人といふとも及ふまじければ、善悪の報、輕重大小すこしもたかふ事あるへからず、ひかしよりもろこしやまとゝもに、世の英雄豪傑多くは已か武勇智謀に誇りて、天のいまた定まらざるを見て、天道は人力をもて自由になるものとおもひつゝ、猛威を逞うし、詐力を恣にして、一旦は志を得るに似たりといへども、程なく天定まりぬれば、忽ち天罪あたりて、身うせ家滅ぶる事、古今歴々として、ろのためしすくなからず、されは人として天に勝は、禍のもとゝしるへし、小人は眼前の利を見て、淺はかにこれをよろこひ、君子は未然の害を監て、ふかき心れを懼る、詩にいへらすや、畏天、之威、干、時保之、誠につねにおられて保つべき事なり

夢のうき世

こゝにもと葱嶺の教を信せしか、近きころ翁にまなへる人あり、ある日の會に、かたへの人にむかひて、某翁にまみぬしより儒道の尊き事をさとり侍る、されと釋氏にもすてかたき事侍る、今の儒者を見侍るに、多くは實有の相に泥て、世事に拘はり名利にわつらふ程に、一生道に所見なくて

終り侍る、佛者は世を如夢如幻と見る故に、異端にもせよ、佛性をさとり、本覺の地に至る人も多し、吉凶糾へる細のごとく、慶吊躡を門に接るを見れば、浮○の有様すへて夢にて侍る、いかて是に心をどゝむへき、一向に夢と見破りてこの道にも本つくへけれといふ、翁聞て、なにかしの申さるゝ所、其いはれなきにもあらず、昔より高明の士の儒を逃れて佛に歸するは、其故にてこの候へ、それにつきて鄙しきものかたり侍る、いつの事にか、或人翁に語るは、さる家に宴饗の設けありしに、其座はて、衆客もろどもにまかりしか、其中に一人あまり酒食に飽満してろのくるしさにたへかたきまゝに、うめさゝく、果然の腹を抱て歸りしに、路にて乞兒の飢て食をもとむるにあふて、あなうら山し彼か身にならば、なにかあるへさといひしとろ、いとおかしく侍る、今儒者世事にあき名利をいとひて、反て頭陀の教をしたはしくおもふは、此人の酒食に飽て乞兒をうらやむに似たり、わか明教中に樂地ある事をしられはなり、夫天下に眞と妄とあり、天理より出るは眞也、人欲より出るは妄なり、天地開きろめしより、三綱五常の道ありて、古も今もかはる事なし、されは天道の誠より出て眞なる物なり、いかて是を夢となし、假となさん、但世の人々、多くは富貴利達を謀り、毀譽得喪に拘りつゝ、一生東西に奔走して日夜經營する程に、忽に往忽に來り、圖らざるにさかへ、はからざるにおどろふ、是等は皆人欲よりいて、妄なるものなり、夢ともいふへく、假ともいふへし、孔子も不義の遺棄、、浮雲のあるかなさかのやうにおもひ給ふとなり、

しかるに釋氏三世の説世に行れしより、すへて此世を夢と見假と見て、眞と妄とをわかすして、三綱五常をはしめ悉く打破て、これを棄る事塵芥のごとし、たどへは目ありて物を見、耳ありて物をきく故に、みる事にまよひ、聞事にまよふとて、終に目をつふし耳をつふして警覺となり、何事も見すきかすして快しとするかごとし、じらすや心はもと天より受て、衆理を具へ萬事に應するにてころ、ろの虚靈なる事を貴ふなれ、今理と事とを二障として、三綱五常をさへすて、わか心をわらぬものとなしなは、なよをか本來の心とすへき、定めてろの神識の靈覺なる物ととらへて、本覺眞如とするにかあらん、たどへは心は火の光明なるかごとし、火は物を照してころ火とはいふへけれ、もし山海などにある龍燈山燈など、世にいふ火の如く、ものを照す事もなく、たゝすさましく沈める光のみありて、人里遠く無用の地に自在に飛ありくを、神火とて尊ふか如し、されは佛法世に行はれてより後、五倫五常をはなれて、たゝひなしく動作する人あり、人事物理を具せすしてたゝひなしく靈覺なる心あり、日本は推古より前唐土は、後漢明帝より前に終にかくの如きの人なく、終にかくのときの心なし、佛性ともせよ本覺ともせよ、無用の妖物といふへし、然るに大和もろこしごもにはや千年に餘りて、尊きも賤しきもあれに傾ぬはなし、或は君臣をすて、父子を背て出家遁世する人も世にたへせず、夫を見聞人をしなへて、眞の道に入ぬとらやまぬはなし、いかなる心によとあやしきまてに思ひ侍る、昔の賢道にはあらねども、長大息しつべしとて翁しはら

默然たり。

鈴木某か歌

五十四

鈴木某か歌

扱て云けるは、むかし鈴木の何かしといふ人なんありけるが、父は一向に釋教に歸依せしに、るの子は儒を學ひて道の大意を知たる人と聞へし、其人のよめるうたに、
夢の世と、たかいひろめし、ゆめあらぬ、そのことわりを、身にししらはや、
それを同志の人に見せけるに、其ことわりを知れどもかく讀けるにや、但しらくかくよみけるにや、
問ければ、知れどとて遽に知りたるとは言難し、よりに疑てしらはやとよみたりといひしと、或人の語りしに翁其時はいまたいとけなかりしかは、左様の事にふかく心つきなく、重て問聞事もなかりき、今思へはこの歌身にしゝると言ふ所に、深き意有へし、さきに翁か云ける外に夢ならぬ理とてはなけれども、るのことわりを身にししらは眞に知りたるとはいひ難し、もし人有て此道の天より出て、我に有事を身にし知りなは其親切なる事前に似たる事にあるへからず、たとへはいまして、緒あるともしらして、其人といひかよひたるに我どのかれぬ事をしりては日比のしたしさは物かはと思はまし、霍去病か父と名乗り逢て始めて其遺體たる事をしりし後は、其したしさを其ゆかしさ前に百倍すへし、るのびとはもとの人なれども、別人の様にころ覺ゆるめ、旨酒のむまさは下戸もしれとも上戸のしるは別の事なり蒸餅のうまさは、上戸もしれとも下戸のしるは別の事也、儒者も此道

の眞にして實なる味を劉伶か酒の美をしり、何曾か餅の美をしることく朝夕に身にしりなは、何とて外物に移され實理にまよふ事有へき、起るも是居るも是、動も是靜も是、行住座臥皆是なり、夷にも是險にも是、生ずるも是死するも是、吉凶禍福皆是なり、造次にも爰に於てし顛沛にもこゝにをいてす、是を道を身に知るとはいふ也、かくいへはとて翁もいまた爰に至らねは、眞に知る人にあらず、鈴木某も爰に及ぬ事を自らさとりて、希望の意にてころ、身にししらはやと讀けるに、

朝かほの花一時

此時松永某とて、鈴木氏か道學の友ありけり、其人朝顔の歌とて語りしか、自らよめる歌にや又鈴木氏かよめる歌にや、とかく兩人の内にてあるへし、

あさかほの、花一ときも、千とせ經る、松にかはらぬ、あゝるともかな、

此歌も意味ふがさやうにおほへ侍る、昔よりあさかほをよめる歌おほけれども、大かた朝かほのあたるなる事をいひて、秋のあはれをうへ世のはかなきをしらすを趣向とする外は見へす、白居易か松樹千年終是朽、樅花一日自爲榮といふ詩を、公任の朝詠にも取て風雅とすれども、是もしひて榮枯をひとつよし、彭殤を齊うする意にて、俗耳には高きやうにきこれども、いと淺き事になひありける、是等は羅盤か測を引、莊周か睡をなむるに過へからず、今松永氏か松にかはらぬ心といへるは、るれにてはあかるへし、各いかゝおもひ給へる、翁は朝に道を聞て夕に死するも可なりとい

◎朝のほの花一時

五十六

へる意どころ思ひ侍れ、朝に咲て日かけを待てきゆるは、朝かほの天より受たる性なり、世には千とせを經る松さへあるに、是程はかなき生を得て、いさゝか己を忘れ外を羨の心なく朝な朝ないど快く見事に咲て受得たる性分をつくして枯るころ、花の見する誠なれ、いかてあたには見るべき、それは松も同じ事なれど、あさかほのはかなきにて、一入りのことはりしるく見へ侍る、されは松の心に千とせなく、あさかほの心は一日なし、たゞ各己か性分を盡すはかりなり、然るを松の千とせをさかぬと見るも、あさかほの一日をばかなしと見るも、たゞ見る人のよくめなり、松と朝かほの心になにかあらん、れよる無情の物はかくのことでし、人は有情ある故に萬物の靈とはいへど、反て私智に妨られて、いまた道をきかざる時はこゝに至る事を得ず、されは人は道をきくへき事なり、しかれども道をきくといふは佛者の頓悟などのやうに、前段の事とは意得へからず、道はもとより事物當然の理なり、匹夫匹婦もともにしうともに行ふところなり、たゞ真にしらねは、實に行はず、うれ故に習て察せず、行て著しからず、身を終るまでこれによれども、つゝに悟入する事なし、今道をきくといふは、外の事にはあらず、たゞ此道理を真にしり實に行ふて、魚の水を安んじ、鳥の林を楽しむことく、常に道理をいのちとして、しはらくも離るゝ事なく、いきてある限は道にし、たかひ、死すれば身も道もこれまでにてなかくやすかるへし、一日いきては、一日の道をつくして死し、一月いきては、一月の道をつくして死し、一年いきては、一年の道を盡して死す、かくては

たどひ朝に道を聞て其夕に死しても、絲毫の遺念なし、こゝをもておもん見るに、あさかほも一日の壽といへど、已か受得しまゝに殘なく十分にさきて、さて日かけを待得てきゆれば、何の恨かありなん、松の千とせと脩短は大きにかはれども、いつれも天命をつくして自からあきたる事は同じかるへし、これを松にかはらぬ心とはいふなり、松永氏も此心にならまほしきまゝに、朝かほにまうへてかくはよみけるならし、翁も其歌にならひて、
 天地に、うけしまを、ろのまゝに、咲てはしほむ、あさかほの花、
 あたなりと、見てやはやまぬ、あさかほの、さくもしほむも、花の誠を、
 ろこなはず、むさはらぬをう、あさかほの、松にかはらぬ心とはしる、
 まことに世話にいふ兎唇の嘯も心なくさみにて侍る、各さうおかしくおほすらめ、たゞ辭をすて、意をとり給へかし、

不 收 不 求

座中の人々、翁の歌めつらしとて、各たゞう紙にかきつけしに、中にひとりいふやう、ろこなはずむさはらすといへるは、毛詩の詞にて侍る、いま朝かほにはちどあはぬ事のやうに覺へ候はいか、といへは、翁聞て、およろ人をうねむは、ろこなふ心にあらずや、人をうらやむはむさはる心にあらずや、是は朝かほの己か天のまゝに、なに心もなかつさきかつしほめるを、人の心に移して見

◎不收不求

五十七

れは松の千とせをうねます、又うらやます、たゞ己か上をつくすと見ゆるをかくいひけるなり、さらは此序に詩のこゝろを語り侍るへし、此詩は婦人の作れる詩なり、其夫役に行て、久しく歸らぬ事をかなしみて、前に先わか思ひの切なる事をいひて、

瞻彼日月悠悠我思道之云遠曷云能來一たひわかれしより、いく度か日もいに月もさぬ、

されは日月の往來を見ても、これとゞもに悠々となかき我思ひあり、はるく路遠き所なれば、我夫の歸らむ期もはかりかたし、いつかこゝに來て見もし見へもすへきといひて、其跡に、

百爾君子不_レ知德行不_レ收不求何用不_レ厥是は夫に告やるやうにいふなり、早く歸り給へ

かし相見まほしとおもふは女のつたなき私の情なり、かねておのこは德行こゝろ大切の事と承る、ろれに羈旅はよろつ艱難にて、れもひかけぬ事もあれば、日ころの名節を損せられぬやうにとこころ思ひ侍れ、ろれは百の君子なへて御存知の事なれば、申にれよはねども、女のおろかなる心におもふには、人はたゞ人をうねみにくす、人に貪りもとめすして手前をさへ正しく守らは、いつくにもわりても、何のよからさる事かあるへきといふなり、かくいふ意をみるに夫の德行に疵なく、身を全うして歸るを望むにこゝろありける、限なく殊勝の事なり、誠に情に發して禮義にとゞまるといふへし、其上不收不求といへるは、淺き事にはあらず、ろれをいかにといふに、人は人我あれば、必人をうこさひ、利害あれば、必人にむさはる人我を忘れ、利害を離れすして、此味はしりかたし、

されは孔子も子路の敝れたる緇袍を衣て、狐貉を衣たるものと並ひ立て恥ざるを、此詩を引てはめ給ひしるか、いかされはいにしへはいやしき閭里の婦人にさへ、かやうの事をしりける人あるにや、されと是は先王の遺澤いまだ竭さる時の事なり、もろこしも漢より以後は、此俗ある事をたへてさかす、まいて我朝は、昔より釋教のみ世に行はれて、聖賢の教ある事をさかねは、婦人の事は申にやおよふ、士大夫たる人も、たゞ名利の境にのみ一生をくらして、かりにもまとの事をしらぬ程に、一旦空とゞき夢とゞきをさへては、いと高き事にれもいつゞ是をもて世を觀念して、身の活計とするのみなり、もとより五倫五常をさへ空と見るなれば、いかて一草一木にふかき理ある事をしらむ、されは松永氏かあさかほを詠するの主意は道をさかざる人のしるへき事にあらず、今翁か不收不求をもて松にかはらぬ心とするは、子路の狐貉をきたる人をうねますうらやますして、狐貉も緇袍もふたつなから忘れたる心とひとつ事と見れば、かくよむなり、かやうの事を詩にいふさへ、明朝の人は、儒者の頭巾をぬかすどて笑ふ事になんありける、いはむや和歌によめるをや、京師和歌の名家など、翁か此歌をさへては、さこゝろ笑ひ給らめ、されど、詩は人情に發すとあれば、なにのいはざる事かあるべき、三百篇を見てしるへし、和歌は人の心を種として、よろつこの言の葉となれりとあれば、なにのよまざる事かあるへき、萬葉集を見てしるへし、もとより歌の風體詞の用捨はあるへきなれど、ろれは翁かしる事にあらねば、今更沙汰に及はず、

春秋のあらうひ

ころは彌生の半にもありけむ、庭の櫻もやうくさかりなるに、驚さへ友をもとむる聲に打啼て渡
 るめれば、今日こそすはあすは雪とどどひとりこちて、人待かはなる折しも、楚然たる音して五六輩
 打つれて問來りぬ、あるしもともに花のもとにまどむしてなん數献におよひてかたりくらしつる中
 に、ひとりのまろうと、春の花はかりめてたき物はらし、花紅葉といへど、紅葉は花なき時に見れ
 はころわれ、花にはれよひかたしといへば、又ひとり、紅葉もさのみいひくたすへからず、秋さり
 の晴間に、千林萬壑さながら錦をさらすことくなるは、春の山も忘れつへし、今花にむかひてかく
 いふは、義山か殺風景の譏もあるへけれど、我は紅葉に心をよするといふに、又ひとり山有木
 工則度之、寶有禮主則擇之とあれば、所詮主の心にまかすへしといふ、其時翁いさり出て、此
 あらうは、
 大津の宮の御宇に、大織冠に詔して其沙汰ありしとかや、るれより秋に心よす
 るは多し、大伴の黒主も、錦をはれる秋はまされりとかよみし、されど其後代々の歌人、春に心よ
 する人もあまた出來て、淺緑花もひとつにかすむなどよみ、秋は夕とたれかいひけんなどもあれ
 は、吉野の雪、龍田の錦は、伯仲の間にあるへし、さはいへど豈陽桃李の節に先たつへき時しなけ
 れは、紅葉はつゝに花におどるへし、但此事は清豫閑暇のはかなき戯事に似たれば、いつれ優劣あ
 りてもさてやみぬへし今是をもて古の詔と武との樂を論するに、善諭と覺へ侍る、昔孔子詔をば美

盡せり善盡せりとの給ひ、武をば美つくせり未盡善との給ふ、美は聲容の見事なるをいふ、善は
 美の實なりとあれば、美の出る所なり、たとへば詔は春の花なり武は秋の紅葉あり、花紅葉ともに
 ろの見事さは更に優劣なきかとく、詔武ともに、ろの聲容の、盛なるにかはる事はなけれども、
 花は春の陽和より咲出れば、其見事さの中におのつからすさまじき氣をふくめり、詔の樂は揖讓より出る故に、其
 り染なせば、其見事さの内におのつからすさまじき氣をふくめり、詔の樂は揖讓より出る故に、其
 美の實優々として泰かなる方に勝れたり、いは、春の花の陽和の氣あるかとし、武の樂は征伐より
 出る故に、其美の實、慄々として嚴なるかたに勝れたり、いは、秋の紅葉の風霜の氣あることし、
 いつれも聖作といひながら、詔はあくまで手厚く、武も薄きにはあらねども、詔に比すればすまし
 薄きかたともいはん、るれ故に詔は善つくし武はいまた善つくさぬなるへし、されはどて春も秋も
 天なり、天の德に同異ありとはいふへからず、舜も武王も聖人なり、聖人の德に同異ありとはいふ
 へからず、た、其時の同しからぬ故としへし、詔は花の陽和の時にあへるかことし、聖人の幸な
 り、武は紅葉の風霜の時にあへるかことし、聖人の不幸なり、されはころ程子も是を論して、所遇
 之時然爾といへるにあらずや、此たとへはと始終よくかなひたる事は侍らす、各はいか、思ひ給
 へるやといへば、座中の人々もろとも感して、日ころ詔の善つくし武のいまた善つくさすといふ
 事、くはしく自得しかたかりつるに、けふ戯に花もみちの事をあらうひて、はからざるに久しき事

を解侍る、あり難くころ侍れとて、各額をつきて謝し侍りぬ、

秘事は嘘

さて諸客いひけるは、我等書を讀てなましむに性命道德の説のみ沙汰し、其道理を世話に移して、
し候はぬ故、世話は別段なる事のやうにいと軽く意得候つか、此程世の諺に申し傳しはかなき
事ふつきて御物かたりを承候て、いつれもふかさ意味ある事を覺へ侍る、誠に秘事は嘘にて、あま
ゆちかきは反て見へぬものにて候故、我等どもの意得ぬにて侍るへし、翁の事にて候、孔子も舜
の邇言を察し給ふにて大知と稱し給へり、されは堯堯の言も聖人捧焉とも中にて候、むかし孔子の
りて、

滄浪之水濁兮可_レ以_レ濯_レ我_レ纓_レ 滄浪之水濁兮可_レ以_レ濯_レ我_レ足_レといひける、此歌の本意は定て聖人は不
凝_レ滯_レ於_レ物_レ世と推遷るの意にてかくいふにてもあらんかし、それを孔子さへ給て、水すむ故に人纓を
あらひ、水濁る故に人足をあらふ、是纓をあらはるゝも足をあらはるゝも水の自から取事なり、
子よくさけとの給へり、されは榮辱禍福みな藻にすむ虫の我から招くといふ事、此歌にてしる
る、たゝ人をとかめすして、手前をつゝしむにしくはなかるへし、かり初の歌とてわたにさく
事に侍らす、翁わかゝりし時、京師にひとり老儒ありしか、ふるさ事をおはえて語しは、
東照宮御在世の時、御近習のわかき者に、汝等身をたもつに簡要の語あり、五字にていふも

七字にていふもあり、いつれをさふたさうと仰られしに、いつれをも承度と申せば、五字にていひ
、うへをみな、七字にていひ、身のはとをしれ、汝等是を常に忘るへからすと上意ありしとな
り、當世の人、大かたは上に目をつけ身の程をしらす、それ故におのつから驕りたかふりて、物こ
とに華麗を事とする程に、家をもち崩し、不義のことも出来て、禍辱にも及ぶるか、むかし或諸
侯の元老何かしといひしもの、萬石以上の身にてありしか、其國にて登城の時、あかねの木綿羽織を
着けるか、路次にて雨にあふてぬれける程に、玄關の扉にかけてはしけるを、其主君折しも鷹野の
かへりにこれを見て、あかねは日にはせは色かはる物、とり入させよといはれけると、又同じ
ころ親藩の家にて物頭たりし者、黄金十兩にて着かへの鎧を威せしか、今當家中にこれ程の金出し
て鐵威す人はあり難かるへし、武器は格別の物なればかくは結構にしつるなり、子孫わか此意をよ
く知て忘るへからすと一筆書て、その鎧に添て家にのこしけると、又同じ比諸侯の中に、世に賢
君と稱するありしに、其家老の子弟年かなるか、蒔繪の印籠に、大きな珊瑚樹を結しめにして
腰にさけたるを、其主君に見とかめられ、他日に其人を前へよひて、汝は印籠を好むと見へたり、
此印籠は薬をよくもつなり、是をさげよとて、黒ぬりの印籠に木槩子を結しめにして賜りける、
それより國の貴族皆恐れて蒔繪を禁せしとなり、是等は皆六七十以前の事か、いつの程に風俗
かく驕奢にはなりぬるや、馬具武器は軍装にかゝる物なればいか、はせん、それも華麗を專にし、

もの數寄を事とするは、何の用をなす事にやあらん、はめられぬ事なり、古き人のかたりしり、大坂夏御陣に、

將軍家惣陣を御巡見の時、本多佐渡守は濫帷子を着して、冑ばかりにて御供せられしとなり又加賀の家臣に山崎長門守といひし名高き武功の者あり、後は祝髮して閑齋と云ひし、翁其子孫なにかしどしはく參會せしか、閑齋大阪在陣の時着せし物とて紙子羽織に銃丸のあたりたるものとあるを其家に藏めけり、是等よて其比軍裝の輕き事をしるへし、況や平日の衣服飲食家作等に華美をつくし、無用の事に金銀を費すこと、なげかしき事なれ、古より太平の弊かくあるとはいひながら、これを改すしては、風俗日に敗れ國事も日に非なるへし、但其本源をいへば私欲にひかれて、上に目をつけ、身の程を忘るゝより起る事也、東照宮をかねて思しめして、かくは仰ありけるならし、但この驕といふ病は、上下ともある事にて、わか一身の奉に限らず、古より戰國の時主將たる人、自から驕て力を恃み敵を慢るは、必國を失ひ身を滅す、その例和漢どもにわけて數ふへからず、永祿天正のころにていは、今川氏真武田勝頼にてしるへし、いつれも上にはかり目をつけて身の程にくらく、たゞ一旦の強さにはこりたる故に、まのあたり滅亡しけるを、かの高き御目にて御覽ありて御料簡の上にての給ひし事にもあらんかし、されは參河より起らせ給ひ、御威光日に盛なりしかとも、いさゝか驕らせ給ふ御心なく、常に御身の程を御考へ御働ありしかは、寸を得れば王の

、尺を得れば王の尺にて、終に天下をしるしめしけり、されは右の五字七字の訣、なにはにつけてふかき御心も有なんと覺へ侍る、たゞ假初の事とは思ふへからず、

佛になるやう

座中ひとり、是を聞いて上を見すして身の程をしるは、わかともから道藝を學ひ候にも要訣たるへく候、身の程をしらす思ひあかりて高慢なる人の成就したる事は承らす候、たゞ引さけて身の程をかんかへて進脩するにてあるへく候といへは、翁はよくも心つき給へり、なる程さにて侍る、其につきて物語ころ候へ、ある大藩の主は刀物の目利に長したるありしか、或時無銘のふるき刀を見て、是は相州の正宗なりとて本阿彌にみせられけるに、本阿彌うけかはず、是は志津と見へて候、中く正宗にてはなく候といへは、いやとよ正宗なるう、汝に預けおくなり、よりく研で見よ、いつにても正宗にありたる時に返し候へどありし程に、意得かたき事に覺へけれど、取て家に歸りてしばく研でみるに、志津に似たる鍔は見ゆれども正宗とは見へず、かくて年ふる程に右の主君もうせられしか、二代になりて本阿彌右の刀を持參して、御預けの刀はたして正宗になりて候、今更先君御目利のつよきにいつれも驚て候といへは、家老ども其子細を問けるに、本阿彌これは不思議にさる男の後生はなしにて正宗になりて候、日ころ某か家に心易く出入いたし候老人あり、常に念誦打して後生をねかひ候ひしか、ある時に來て我等此程は後生のねかひやうをかへ侍る、只今

◎佛になるやう

六十六

迄のねかひやうころあしく覺へ候へ、このあら凡夫の身として、俄に佛にならんとねかへはどて、佛になら候へきか、佛にならんとならば、先よき人にならむとねかふへし、よき人になりて後佛をねかひ、佛になるにたよりあるへしと語りしを承りて、是は尤なる事にころ、彼刀もすくに正宗の鑄にせんと研程に、反て正宗にならざるにてあらん、それよちかき志津にして見はやと存し候て、志津の鑄をころさして研候へは、やかて正宗に似より候程に、さてころと存しいよ、心にいれてときあけ候へは、今はたしかに正宗になりて候といひしとなり、正宗の鑄には目をつけずして、その刀の身に應したる志津を心さして研し程に、つゝに正宗にはなりたり、翁此の物かたりを聞ておもしろき事に思ひしか、其後さる酒もりの座にて、二人盃の先後をたかひに辭退しけるに、ひとりのわかき士御年にあやかり候やうに御盃を給り候へといふに、其相手の人われらか年もることあまりちかひ候まし、御あやかりありたき程の年にもなく候といふに、其時わかき士其事にて候、大きにちかひ候ては急にあやかり申へき思ひよりもなく候、先すこしの御年たかにあやかりまいらせて、それよりよはひをかさねはやところねかひ候へといふに、相手道理にまけて盃をさしけり、彼老人の佛のねかひやうと、此わか士の年のねかひやうと同事なり、いつれも高遠に目をかけす身の程をしりて、卑近なる所より漸々に至る意得なるへし、いへは當座のはかなき物かたりのやうなれども、よくおもへはまことに秘事は隠にてころ侍れ、もとより學は聖人を目わてにす

る事にては侍れども、たゞ目はかりたかあかりして身の程を省みすしては、道といよ、遠くなくつゝ、一生自得する事なくしてやみなん、右の老人わか士の覺悟には大きおどりとるといふへし、古今高明の人の行過るは、大かたこゝにあやまらるゝにて候、されどそれは虚見にてころあれ、道に少し見付たる所ありての事也、今の世に鉅儒と稱する人はうれにもあらず、道におゐてなにの見付たる事もなく、自から高ふる心より、むなしく大言を吐てたゝ人の上にならんとのみする程に、後は世にもてはやされて、自身にも聖賢のやうに思ひなすころ身の程をしらざるの甚しきなれ、たゞし是等の人は、論するにもたらざるへし、

仁は心のいのち

ある時例の人々とふらひ來て講習しけるか、仁義の説に及へり、中にひとりいひけるは、人は天地の心を得て心とす、天地は萬物を生ずるをもて心とする故に、それを得て心とすれば、人は人を愛するをもて心の徳とする事勿論なり、よりて仁は心の徳愛之理といへり、心の徳とあれば、仁義禮智諸どもに仁にもるゝ事なき程に、仁は四者を包て、義も禮智も仁によりて立なり、是は翁の講説にてかねて承りし事にて侍る、但仁は人を愛する心にあらずや、それを衆善の長とする事たれも知たるやうに候へども、大かたは人はたゞ慈悲を第一とするをもて、仁を衆善の長とするとはかり意得侍る、それは慈悲の重き事をいは、しかいふてもやみなまし、今仁を心の徳とするは、さやうの

◎仁と心のいのち

六十七

一通りの淺き事にてはあるまじく候、いかなれば慈悲の心ひとつか心の徳となりて、義も禮も智も仁なければうせはるふるにやあらんと工夫すへき事にて侍る、此ところを今少し承たく候へ、翁聞て只今申さるゝ所すこしもちかひなく聞へ侍る、されは日ころ申たる外に、改めて申へき事もなく候へども、猶更くはしく申候は、心の仁あるは人の元氣あるかとし、人の元氣は脈にあらはれ心の元氣は愛にあらはる、脈のかよひ絶れば人死することく、愛の理はるふれば心死する程に、仁は心のいのちとも申へし、夫心は活物なるにより、人に情あり物の哀をしりて常にいきたる物ろかし、よりて父母を見ては自然に親愛し、親愛せざるに忍ひす、君長をみては自然に尊敬し、尊敬せざるに忍ひす、齒徳を見ては自然に遜讓し、遜讓せざるに忍ひす、義を聞ては必感ずる事をしり不義を聞ては必恥るとを知る、もし情なく哀をしらすは、其心頑然として鬼畜木石のことく、痛さ痒さもしらすなりなん、何をもて自愛し、なにをもて恭敬せん義を聞て感ずる事なく、不義を聞ても恥る事なかるへし、是をもていふに、仁義禮智いつれも心の徳にして、各其理わかるれども、其本源は仁に外ならず、人として不仁なれば、義も禮も智も其さまり其用ありといへど、所詮内より生せぬは眞の徳にわらず、公の理にわらず、この故に仁に心の徳といふて外に徳をいはず、仁に愛の理といふて外に理をいはず、このいはさる所にふかき意ありとしるへし、其につきてひとつの物語ころ候へ、相州北條の幕下、佐野の城主天徳寺、豪健の勇將なりしか、ある時琵琶法師を招

て、平家を語らせて聞けるに、いまた語らぬ先に琵琶法師にいひけるは、某はたゝあはれなる事をさへ度ころあれ、其意得して語り候へといへは、法師意得候とて、佐々木四郎高綱か宇治川の先陣を語けるに、天徳寺あはれかりて、雨傘と泣ける、さて今一曲前のそくあはれなる事をさへ度といへは、那須與市宗高か扇の的を語りけるに、平家半より天徳寺また落涙數行に及へり、後日に家臣の輩に、過し日の平家はいかさつるといふに、家臣ども、尤ももしろき事にて候、但我等どもひとつ意得ぬ事ころ候へ、前後二曲ともに、勇烈なる事にて、あはれなるかたはずおしも候はぬに、君には御感涙に咽はれて候、是はいかゝの事にて候にや、今に不審なる事にいつれも申あひ候といへは、天徳寺をとろきて、只今までは各を頼もしく思ひ候しか、今の一言にてさてく力をととして候、先佐々木か先陣をよく合點して見られ候へ、頼朝舍弟の蒲冠者にも賜らす、寵臣の梶原にもたまはらぬ生暖を、高綱に賜るにわらずや、されは其甲斐もなく、此馬にて宇治川を先陣せずして、人に先をこされなは、必討死してふたゝひ歸るまじきと、頼朝にいとま乞して出ける、其志を察して見られよ、あはれなる事かほとと、しはく涙を拭ひつゝ、しはらくありていひけるは、又那須與市も、大勢の中より撰はれて、只一騎陣頭に出しより、馬を海中に乗入て的にむかふに至る迄、源平両家鳴をすめて是を見物するに、もし射損しなは、みかたの名をれたるへし、馬上にて腹かき切て海に入らむと覺悟したる、心を察してみられ候へ、武士の道程あはれなる物は候はず

不は毎に戰場に臨ては、高綱宗高か心にて鎗を取候故、右の平家を聞時も、兩人の心を思ひやりて落涙にたへさりし、然るに各にはあはれにいなかりしと申さるゝにつけて思ふに、各の武邊は、たゞ一旦の勇氣にまかせて、眞實より出るにてはなきやと思はれ候、それにては頼もしからず候へど、云しかは、諸臣皆迷惑して辭なかりしとなり、是天徳寺か武邊は涙より出れば、もとより仁者にはあらねど、武の一筋は仁に根さして惻隱の心より發するにあらすや、然るに武は殺獲の事にて、平あらし道なれば、いは仁とは黑白のたかひあるやうなれども、仁より出さるは眞の武にあらす、況や其餘の事はなをもてしるへし、されは忠孝も禮義も、文道も武道も、内より油然として潤ひわたりて發するにあらされは眞の者にあらす、是則前にいひし人に情あり物の哀をしるの心なり、すへてもろくの言行どもに、義理に當ては悉々忍ひさるの心より出て、天徳寺か涙をこはすやうにたにあらは是心徳の全きなり、仁者といはんになにの疑かあるへき、

義は心のされ

座中ひとり、仁は心の徳にして、愛の理たる事は、くはしく命をさし訖ぬ、今承ることきは、仁は心の全徳にて四性を包侍るに、四性の中にひとり義はかり掲出して、仁に對して仁義と申候は、義も仁にさし次て大切なるものとみゑて候、此序に義字の意をも承りたく候へといへは翁、人に仁義あるは、天に陰陽あるかことし、この故に易にも、立天之道曰陰與陽、立人之道曰仁

◎義と心のされ

七十一

與義といへり、されは乾元は春に居て四時を統すといふ事なけれども、秋の肅殺するにて發生の功をなすにあらすや、人道もまたしかなり、仁の四者を包るといふは、一向に自愛するといふにはあらず、もし義の裁制なくは、心の生道を損して、仁も亡ひぬへし、翁かねて初學の人に申侍るは、義は心のされなり、朱子も心之制事之宜と註し給へり、心の制は、心のされなり、事之宜は、事のされめなり、事によき程にされめあるは、すくに心のされになる物にて候、仁に心之徳愛之理とあるも、愛の理すくに心の徳にして二つにあらす、それと例なるへし、されは日用行事のうへより、取與去就の間に至る迄、含糊不斷の心を持しては、いかでか道理に當るへき、此心にてはたどひ學問しても、苟且因循して、行に敏とあたはねは、過を改るに吝にして、善に遷る事速ならず、又なにをもて徳にすゝむへきや、よりて百行すへて心のされあるを下地とするにあらず、孔子も君子の行を論し給て、義以爲質とはの給はすや、又坤の六二を論し給て、敬以直内、義以方外との給ひ、又剛直を論し給て、質直にして好義ともの給へり、是をもて義の簡要なる事をへし、たゞ人心の害をなし、仁義の仇となる物は、私欲にて侍る、私欲あるか故に、邪智に誘外物に引れて、かの仁の情あり哀をしりてすななる物も、忽にひすかしく、こはしくなく、知れば、天理のかよひたへしく、人欲日に熾になるるかし、たどへは木を蟲の齧るかごとく、知れば、喬木も枯槁に同じ、それよりして心のされも鈍くなりゆく程に、義もついにうせ

◎義と心のされ

七十一

はてぬるる悲しき、たどへは刀にさひの生するか如し、其はかね腐ぬれば、利刀も頑鐵に同じ、是仁亡ふれば、義も一時にはろひて、我心あらぬ物になるるか如し、この故に孔門の學、仁をもとむるを要として、仁をもとむるには私に勝を本とす、されば顔子仁をとへるに、孔子克己復禮をもて告給へり、禮は天理の節文人事の儀則とあれば、身を檢するの防閑にして、私に勝の機括なり、一日私に勝て禮に復しなば、枯たる木のふたゝひ榮に向ふかとど、さびにし刀の新に研を出るかごとく天理流行して本心の徳全かるへし、但顔子はもとより天理人欲の分にれいて判然として疑なきか故に、すぐに進修の目を問給へり、其餘の學者は念慮行事の上において、此天理人欲の分を眞に不知しては、しるて私に勝むとすとも、いと難かるへし、さる故に孔門の教は、博文を約禮に先んし大學の法は、致知を誠意正心に先んす、是にてしるぬ、道は仁義にすぎすといへども、禮智をすて、仁義に至るの理なし、易にも聖人の徳を論して、知崇禮卑といへり、知崇は天なり、禮卑は地なり、いよく崇ければ、いよく卑し、これ成始成終の道なり、この故に横渠の張夫子知禮をもて教をたて、知禮成性の説あり、されどそれは横渠に限らざるへし濂洛關閩の學はすへて格物に本つきて知を致し、持敬によりて禮をはなれず、誠に孔門以來學者不易の法とすへし、

浩然の氣

翁幼少にして手習せし時、世にもてはやす今川のふみをよみ習て、仁義禮智ひとつも闕ては諸道成

就しかたしといへるを、今におはへ侍る、了俊さしたる學者とも聞へねども、此一言は不思議にいひあてられし、名言ともいふへし、さて仁義禮智いづれも大切なる中に、仁に次て義の大切なる事は、孟子浩然の氣にていよくしるく侍る、浩然の氣は、至大至剛天地の間に塞るといふにはあらずや、各考て見給へ、かくはかり盛大なる物か、いかなれば義より生するといふにやあらん、人は天地の正氣を得て、浩然たる物にて候へども、私欲ありて心のきれをなつまする程に、其氣いつとなくちゝけて小さくなる事にて候、されば浩然の氣は、心のきれより生する物としるへし、しかるに心にきれなき人のくせとして、世話に牛の一さんといふやうに、やゝもすれば機嫌にまかせ、調子に乗しなどして、一概に物を決行して快しとす、是は眞のきれにあらず、反て大に氣をるこなひ、心の刃もこはれつへし、いよくきれぬ物になりなんころうたてけれ、孟子に義を集めて生すとあれば、一時一事のきれにてきはひを取て、浩然の氣を生すへきとにはあらず、其工夫日用の間、事の大小輕重によらず、道理は當りては、いさゝか狐疑せず、たゞ平等に心のきれを用ひて、一蹴兩斷して宜きに合にあり、これかれたひぐかくのよくにしてやまねは、此氣常にたるますして、丈夫になる程に、後には氣より心のきれを助けつゝ、義と合體して、おのつから浩然たるにも至るへし、但氣にて心のきれを助くるといふ事よく體認してしるへき事にや、たどへはこゝに二人あり、極寒の時に當て、拂曉にふたりなからいひあはせつゝ、同じく起出るに、ひとり寒さを痛て

おくるにもうく、ひとりばさむさを事どもせず、速におく、其故をいかにと問に、稟賦の強弱によるにもあらず、そのすみやかに起る者は、上戸にて酒氣あればなり、是氣にて心のされを助くるの左驗とすへし、しかるに浩然の氣は義より生じて、其生したる氣か又義を助くること、いと奇妙に覺へ侍る、前年韓文をよみて、其雜說の中に神龍の事をいふにてしりぬ、龍は誠に靈異ある物かな、氣を嘘て雲を生し又わか生したる雲に乗て日月に薄り陵谷を汨く是雲は龍より生じてまた龍の變化をたすくるにあらずや、今浩然の氣は心のされより生じて、又心のされを助くるにたとふるに、一理なるへし、しかいへはとて、しぬて氣力もちひて、よはさを強しとし、むさしさを盈りとするは、いはゆる助長するにて、かの宋人の苗を抽て長するの類あり、此氣自然の生路を妨けて、大きに集義の害を貽すへし、たゝなにの作爲もなく集義を事とするにあり、孟子に必有事焉といふは、たとへは人かたろさし當て緊要の事あれば、朝夕ろこに心をとめてすておかぬ物なり、そのあとく集義するは必定一事あるなり、必ず字最力あり心の一定する所なり、しかるにおよる世間の人、忘ねは助長す、助長せねは忘る、勿忘勿助長といふて、ふたつの間をしらするなり、忘れもせず助長しもせずして、心のされを用おればおのつからにふらす又はるあねすして、浩然の氣もこれより生すへし、先儒をもて持敬の法を論すれば、持敬もまたあゝに同じかるへし、いかにとなれば、敬はた儼然としてなれる事あるか如しとしかいふへし、されはとて敬に執泥して此心をしめて拘定

すれば、他病を生して、その害忘るゝよりも甚し、朝鮮の李晦齋かいひしやうに、たとへは鷄卵の手にあるがごとし、勿忘は手にとる事を忘ぬなり、忘るれば取おとすへし、勿助長は力をいれて握りかためぬなり、握りかたむれば握り潰すへし、ふたつの間を體認して持敬の法をしるへし、もとより存心集義二致なければ、持敬養氣二法あるへからず、是等は簡要深切の事なり、たゝ一場の談話とさゝ給ふへからず、

敬の工夫

座中ひとり、敬字の義は、程朱の説最詳明親切にして、なにの疑もなきやうには候へども、敬の工夫は、學者第一の事にて候へは、もし翁の思ひよられたる事も候は、承たくころ候へといへは、翁いやと程朱のとき給へる外に、翁か今更申へき事は侍らす、但程朱の説あまり反復切要なる故に、吾黨の學者ふかく取過て、いとむつかしくなりぬるまう、反て程朱の心にもかのふましく覺へ侍れ、翁はたゝ常人の心にあてゝ、俗語に引さけて申たく候、敬は心のむさを眞直にして、わきへおかぬやうに、心のもとをたはねて、末のちらぬやうに、身の番人となるやうに、事の目つけとなるやうに、是にて敬はのこりなくころ候へ、此翁か語、至て淺きやうに候へども、淺うして反てふかく、至てやすきやうに候へども、易くして反て難し、各是を身に驗て見給は、主一無適も、常握々の法も、此外になき事としり給ふへし、事新敷申様に候へ共、天下に至極大切にて又至極たも

ち難き者の此心にて候、孔子も出入無時莫知其郷との給へり、然るに其至極大切なるものを粗畧にし、至極難持ものを心安く存知候程に、此心放逸するよりして諸悪もおこり萬事もやふるゝろかし、しかれば敬はうの大切にしておふなき物をたもつ時の心にて候、古人の執玉捧玉盈にたとへしもけにさる事うかし、今若寶玉をとり盤水の盈るを捧けはすおしも手をゆるさず、氣をゆるめざるにてあらん、其心にて心をたもつを持敬といふ也、されど玉もどらばどらなん、盈るも捧けはさけなん、此心の執かたたく捧けかたさは中くうれにたとへてやむへきにもあらず、いつも申ことく心は神明靈活なるものにて候也、只ひなしく無爲にしてはならぬものにて候、あるは事に接り、あるは事にしたかひさなくして隙に物する時は無用の事を引出して、彼へ移りこれへ移り、水のつどふかことし、無根の念をささして、とさまに思ひあうさまに思ひ、麻のみたるか如し、荀子と是を偷心といひ、釋氏は是を流注想と名づく、是我人ある心の持病なり今翁か心のむきを真直にして、わさへゆかぬよふといふは是を療する主方とすへし、さて心火とて心は火に屬するものなり、心のむき正しからざる時は、心のはさき亂れて用ゆるにたへず、黃勉のいわれしやうに心は一炬の火にたとふ、其本を堅く引束て火をとますときは、光つよくして、風にもたへす雨にもさへすもし本のつかねはとけてゆるまらんには、たとひ火をとますとも、光よはく打ちりて、滅ぬへし、翁か本をたはねて末のちらぬやうにはおをいふなり、ひとりのある時は、身のある所に心ありて、

に身をまもるを敬と云、是身の番人なり、事にひかふ時は、事のある所に心ありて、常に事を察するを敬とす、是事の目付なり、今敬の事を翁に申せどならば、大かた是にたかひたる事はあるましく覺へ侍る、然るに是等の工夫は、いはい病氣的中したる良藥なり、おの上にいふへきならば、藥の用やうひとつにて候、其用ひやうは前に申おどく孟子養氣の法に外ならず、翁かねて孟子をよみておもへらく、養氣持敬ともに必有事焉といふ一言にて、もはやうの理盡たる事なり、いかにとなれば、養氣持敬何の替りたる事かあらん、いつれも本來の面目なれば、鳶のどひ魚のおどると、同じく現在わか當然の事ありとして、つねにるおを離れすして居るまでの事にて候、此外毫髪も加ふる事はなかるへし、しかるに忘るれば、るの有事所をうち忘る、助長すれば、氣力を用ひてしめて作爲す、忘れもせず、強て作爲もせず、其間に自然の天機を自得して、持敬の法とすへし、昔加賀にありし時、ある士人持敬の法を問じに、翁持敬の説をあらはして是にあたへき、其大略おもへらく、たとへは心は悍馬のとし、持敬は悍馬を御するかおとし、我氣たるみて、鞍よはく韁ゆるめは、馬駆出して泛濫の患あり、是忘るゝなり、されはとて力をもて馬を制しつゝ、韁をゆるよく引はりて、馬の口を痛むれば、馬なつみ苦みて、おるよくかすなりぬ、是助長するといふべし、たゝ行さるのみにあらず、反て馬の邪氣をさうひて、後にはのりすまひなとして、いろくせつくものろかし、いはゆる非徒無益而又害之にあらずや、されの聲控中を得緩急程よかなへは、お

のつから進退疾徐た、我心にしたかひて、自由ならずといふ事なし、是をもて持敬の法をしるへしといひしか、はや四十年にちかき事なり、其間し人も、今は昔語りになりたりとて、翁感愴いといふかく見えし、

民は王者の天

ある時論語郷黨篇の講訖りて、その式負販者一とあるにつけて、魯諸客に對して王者以レ民爲レ天民、以レ食爲レ天、この意いかん、各いふて見給へといへば、座中ひとり民はこれ邦の本なり、民歸すれば邦存し、民叛は邦亡ふ、邦の存亡は民にあり、故に王者は常に民を尊て天とす、食は民の命なり、食を得れば民いき、食を失へば民死す、民の死生は食にあり、故に民は食を尊て天とすといふ意にてあるへく候、翁さやうにとき候ては、上下兩意にさこへ侍る、是は二句ともに所詮農をもんするを主意にしていへる事にて候、天より人を生ずれば、又五穀を生して人の食とす、人あれば食あり、食なければ人なし、天下豈食よりおもき物あらんや、民は天下の爲に食を生ずるもの也、それを天より王者にあつて給へば、王者は民を仰尊て天とすへし、一夫をも輕慢るへからず、昔は諸國の民數をしる籍を王に獻すれば、王も拜して受給ひ、孔子も民數の籍を負たるものは、式し給しとなり、又民としては思ふへし、天より我人命を續なる天下の大切なる物を、我等は、わたくして作らしめ給へば、民は食を仰尊て天とすへしと、かりにも耕作を粗略にすへからず、是風

俗の本治亂の係る所にて候、今其有増を申侍るへし、むかし三代の時は上に民をもて天とするの心ある故に、租税を薄うし凶歉を極ひ、困厄流離する事なからしむ、よりに郡縣の民土着に安し、農業をつとめ、米穀を出して君上に奉し、食をもて天とせざるはなかりし、其風おのつから市朝にも移りしかば、士大夫をはしめ、商賈等に至迄、大抵勤儉にして華奢をいましめ、遊惰の俗ある事をさかす、暴秦に至て民を天とするの心なかりし程に、頭會笑飲民に虐取してやまさりしかば、はては郡國離叛さ、四方土のこどく崩れて、天下の亂民間より起りしるか、炎漢起りて天下泰平無事になりしかども、逐末射利の徒日よ出來て、富商大賈封侯にひとしく、食貨の權を恣にせしかば、村閭の民もろれに化して、豪奢になかれ、游佚を事とす、賈誼か治安の疏を見てしるへし、然れども上に民を天とするの心なを残りて、しばし詔を下しつゝ、農は天下の本といふ事を郡國に告諭し、租を免し復を賜ひ、郡吏の貪欲をいましめ、其上孝弟力田をもて下を率ひ、たゞ務て本を崇ひ末を抑へし事、くはしく漢史に見へ侍る、されはこゝかの文景の時、君臣恭儉にして、阜厚を致せし事は、三代以後の治世とも申へし、是によりてつら／＼古今を考るに、上代は格別にて候、後世に至ては、郡縣の風市朝に移るはよく、市朝の風郡縣に移るはあしく、其故は市朝の風は奢侈を貴ひ、郡縣の風は樸素を失はず、しかるに近來市朝の事を承るに、國に貪墨の吏あり、郷に貨殖の家あり、いつれも公には法禁を守り、貨賂を遺さくともめれども、私には利欲をつとめ、宴樂を好

○風ハ王者の天

まざるはなし、しかも私智を逞ふして已か悪を隠し、上を欺き人を誣るをかしこき謀とす、其會をさくに、食膳美をつくし歌舞艶を競ひ、一日の費數十百金に及へども、互に是を風流とし、おしども思はず、少しも儉素正直なる人をみては、これをうねみにくみて、世をしらぬ田舎人なりとて、群り聚りてこれを嘲笑ふ程に、ひとりの齊語衆楚の咄しさにたへねは、つるに一統の風となりて、田舎までも見および聞および、華美をつとめ、詐偽を習ふころ、いとなげかしき事なれ、されは世ころりて驕奢を貴ひぬれば、その費用過分なるにつけて、已か諸欲を快うするに、金銀たければかなひ難き程に、おしなへて金銀を貪りもどめざるはなし、よりて天下の金銀、常に有力の人のために兼併せられて、おのつから流行も滞るるかし、るれに金銀は世を歴て滅し、米穀は年々逐て生ずる物なれば、金銀は日に貴く、米穀は日に賤し、食饌の士は、いやしき米穀をもて貴き金銀に易る程に、家費いよくたらず、貨殖の家は、貴き金銀をもていやしき米穀を買程に家費いよく餘りあり、しかるに有数の金銀をもて無限の驕をさはめ、有用の金銀をもて無用の物に費しぬる故に、金銀日に虚耗しあまねく民間に流行せず、よりて粒米狼戾して極めて價廉なれども、閭里の貧民はそれをさへもどむる力なければ、富民は常に膏粱に厭ども、かたへには菜色ある人あり、富民は常に肥甘に飽ども、かたへには餓死する人あり、中に悪性なる者は、自から死を救んとては法禁をも犯し、盜賊をもするるか、し、こゝをもて見るに、世の困窮な故にこゝに及ふなれば、その

本源風俗の驕奢より起りて、一朝一夕の事にあらず、されど此六七十年以前迄は、世間今よりも猶繁華なりしか、もとより驕奢を好むの俗はありながら、儉素を尙ふの人もおほくありき、それをいかにといふに、其比は前代の故老あまた國にのこりしか、いつれも其父祖わか、り時より、晝夜草野に起臥して、汗馬野戰にいとまなければ、華奢風流の事と夢にもしらす、其子孫も家風に習て、いは、今いふ田舎風なりしかども、おのつから文ならし質にあまり、かりにも虚ならして實にあつし、甲斐しく頼もしく、しかもまめやかに情ありし、いつしかさやうの人もうせはて、在朝の士大夫世祿に浴し、泰平なるまゝに、うき事をしらねは、宴安をのみ懐て、其鳩毒ある事をさどらす、驕奢淫佚こゝに至るもあやしむにたらず、まいて貨殖の家遊俠の徒は、論する事なかるへしされは、其弊郡縣にも移るといへど、今とても田舎にはさすか古風のこりて、市朝とは同じ物にもあらず、もとより民はねろかにして兇暴なるまゝに、大悪をする人もあり、又は一概にて分別なき程に、難儀に臨ては、己か怒にたへす上にたてあふ事もあれども、大やう市朝の人の邪智をもて、人をた、かかるやうなことはなき程に、おのつからすなほなる方もありて、恵に感しやすく、理におるゝもすみやかなり、己かなりはいたにあれば、みつからたる事をしる事うかし、た、郡長たる人、民を天とするの心を忘れず、歳の豊凶にしたかひて賦税を上下し、飢寒の患なく、父母を養ひ妻子を畜ふにたるやうに相計らひなは民案堵してなかく流離の愁なからまし、さる上にて條法を設け

○民ハ王者の天

て威刑をしめし遊惰をいましめ、紛奢を禁しなは、一郡感服して、好風俗となるへし、もろゝの郡縣一統にかくありなは、其風れのつから市朝にも移りなん、今市朝にあらゆる人數夥しといふも天下の郡縣に比せば、十分の一にもたらさるへし、それさへ市朝の風盛なれば、郡縣へも移るるかし、況や四方の郡縣、各安堵して阜厚になりなは、其風天下へ移りて、樸實日に勝、華靡日に減しなん、しからは驕奢の風やうやく變して儉素に復せん事、うたかひなかるへし、

富士のすう野

た、思ふへし民は邦の本、郡國は邦の藩屏なり、もし郡縣の民憔悴流離しなは、天下の勢もこれより薄くなるへし、古より民窮しては亂を思ふといへは、郡縣危ければ國も危く、郡縣安ければ國も安し、さきに郡縣は治亂のかゝる所と申つるは是よて候、ひとり風俗のもと、いふはかりにては候はず、ひかし憲廟の御時、ある士人の好學あてけり、其人按察使に命せられて、畿内の郡縣を巡りしか、首途に臨て學問の師に贈言を乞しに、其師此たひ道中にて富士山の下を通り給ん時、よくするのを見ておかれ候へ、あれ程の山は、あれ程のすうのなくてはたもつへからず、すへて山は上より土下りて下の埤厚なるにてころ持候へ、もし上かさありて下はろく、上大きにして下小さくば、忽に崩れつへし、此度上の御爲をねはさは、た、下を厚うするやうに御意得候へ、此外に申へき事は候はずといひしどなん、是易の剝卦の意にていへるなるへし、剝卦上を艮にす、艮は山なり、下

を坤にす、坤は地なり、これ地上に山ある象なり、山は高く上に位すれども、下は地に附てはなれず、是山は地を基本とするなり、人の上たる人、上を剝落して下を厚うすれば、邦安うして山の地上に安置するかもし、もし下を剝落して上にませば、山在二地上二の象にむく程に、やかて危かるへしとなり、其に付て翁か愚案にて考候に、只今市井無頼の徒、多く府下に介居て國の害をなし侍る、第一人家に火をつけて大害を貽し候、是大方は郡縣の流氓にて候、郡縣困窮して流離に及身の置所なきまゝに、なにの心當もなく府下に出候へども、生活すへきやうなく、又故里へ歸りてもよる方なく候故、盜賊をして身命をつなき申外はなく候、もし郡縣困窮せず、父兄親族土着してあらは、それらにも勘當せられて立のく程のものは格別にて候、其外はたとひ府下において、手振すとも、かなはずは故里へ歸り候へし、身のより所あるに眼前極刑に陥るを見なから、身をすて、惡事をいたす事あるましく候、又諸國より追放せられて流浪する者も、郡縣賑ひ候は、しるへにつきてたよる所もあるへく候へども、それ右に申通にて候故、諸方の惡黨ことごとく府下に萃まるにて候、されは郡縣や、もたかになり申さす候ては、府下の盜賊やみかたかるへく候歟、それ無用の華奢を専にする風俗に候故、貴族厚祿の家より、すこし時めくものに至るまで、下人を召抱るに今様のはさら男の異形に作れるをわらふになんありける、下部にても謹厚なる者に、さやうなるはなし、よりて世上に溢れものども、宅内の側屋にあつまりて飲酒博奕し、はては醉臥して、多くは失火

するをもしらす、又其最悪性なる物は、貨をぬすみ難をのかれんとしては、みつから主人の宅に火をつくるもあるやうにさへ侍る、是は主人たる者の意得あしきに起り候へども、畢竟華奢をこのむの流弊にて候、とにかくに市朝の奢侈を抑へ、郡縣の困窮を賑はすにしくはなかるへし、

天下の寶

されど古より太平百年に及び候へは、大かたは奢侈風をなし候、今奢侈を抑へ、儉素を崇んじならは、節儉廉直の士を擧んで官に有しむるにあり、號令科條の及へきにあらず、第五偷いへらすや、以身教者從、以言教者訟、官長身正しければ、一官の畏懼ておのつからしたかひ官長正しからねは言語をもて教といへども、其下争訟て心服せず、法令屢下れども、いよ／＼多事になりて治まらかたし、所詮官長ろの人にあらずればなり、もとより國政は、法令を闕へからすと云へど、法は人をもて行はる、人なければ法虚しく行はれず、孔子も爲政在人其人存則政舉、其人亡則政息とのたまへり、翁昔ある故人の家に會して二典の文を論せしか、曆數の事に及へり、翁いふは先曆の法始て虞書に見ゆるといへど、後世を経て元に至て精しくなりし、ろのかみ此法たに具りなは義和に命して候せしむるにも及はさらまし、主人聞て、いやさはいふへからず、天は運動の物なり、運動の人をもて候せずしては、其ささしの忽微なるを覺へず、曆法は一定の物なり、曆法にのみおたねて、人の目力をもて審にせざるは、聖人敬天の心にあらずといふを聞て、心に銘してふか

◎天下の寶

八十四

く感服しき、天度は萬古不易にて、遲速盈縮常ある物なり、ろれさへ動物なれば、定法の及はざる所あるるか、況や人心變動常なく、是非互に見へ情偽紛ひつ、一定の法をもてつくすべきにあらず、この故に材は取へけれども、畜夫の利口は張釋之これを黜く、賊は罪すへけれども、掾吏の首は吳祐これを賞す、鹿を放つをもて託國の仁をとり、卵を盗めども干城の將をすす、公孫弘か布被は、儉に似て矯情の姦をしるへく、郭子儀か奢欲は、奢に似て汚行の譏を貽さす、もし一定の格に泥んで、萬變の事を制せんとならは、いはゆる柱に膠して瑟を鼓し、舟に刻て劍を求るなり、いかて變にあひ宜きにかなふへき、たゞ其人を得て、法を人にたねて行はしむれば、操縱進退時により事によりて變通する程に、法を用て法に用られず、法華を轉して法華に轉せられず、さやらの人多く官にあり事に任せは、國政なりの滯る事あらん、法も行はれ衆も服して、日に治平ならむかし、されは天下の寶なにか人材に過たる物あるへき、この故に楚は白珩を寶とせずして賢を寶とすと王孫圉かいひし事、楚語に見へたり、梁惠王吾國に徑寸の珠ありて、車の前後十二乗を照すとて、齊の威王に誇られしかは、威王寡人四臣ありて千里を照す、何ろ十二乗れみならんやといはれしには、惠王も慚る色ありしとろ、ろれに付て申も恐れなれど、ひろかに感し奉るは東照宮の御事なり、ある時一役人闕たる事ありしに、ある老臣に何かしを代りに仰付らるへきと思しめす、其人からいかなるると御尋ありしに、其人はかねて臣かもとへ出入いたし候はねは、いか

◎天下の寶

八十五

やうの人物にて候や存知し候はぬよしを御いらへ申せば、御氣色かはりて、麾下の多き諸士を、のこらす其人からをしれといは、わか誤なり、又は汝諸士の善惡を必しもしるべき職にもあらぬに問てしらぬをとかめは、わかひか事たるへし件のものは麾下人多き中にも、日ころ祿もなみにこへて、人にしられぬ程の身にもあらず、るれに汝は第一群臣の善惡を見聞置て、わか今のことく尋る時はいひ聞するを職とするものなり、いつれに付ても存知せずといふてさてやむべき事かは、さやうの事とはしらて、おもき職をいひつけ置しは、わか目かねちかひたるにてころあれ、よく思ふて見候へ、すへて武道に志ふかき士は、家老又は權柄の人よ諂ひ追従せぬ物るかし、さやうなる中によき人あるへし、るの埋れぬやうにとつねに氣をつけ心にかけてたつねもとめてころ、君の爲を思ふとはいふへけれ、刀脇さし茶湯道具の類に、名物埋れてあると聞ては、なにどうとり出してわれに見せんと思ふへし、るれはいかやうの名物にてもあれ國家の用にたゝす、なくても事欠ぬものなり、たゝ實の中の實といふは人にとゝめたるなり、これはわれ常々口くせのやうにいふ事なれども、るれをよるの事にしてうかどさく心から唯今のやうなる返答をはするるかし、さて汝等かもとへ出入するものはかり立身する事とおもは、諸士の心たてあしくなりて、權家にこひ諂ふをよしとせん、されは麾下の士恥をしり義を守るは、國家の元氣なり、るれに諸士の心きたなくなりて恥をしらす、鼻は曲りても息さへいてなはと思ふやうになりもさなは、なに事をするも苟偷よしして義を守

る、心なかるへし、しからは人の元氣うせて死するごとく、國家の元氣衰へて、やかて敗亡に至るも難かるへきにあらず、向後汝等こゝに心をつけて、大切の事と覺悟いたし候へど仰ありけるど、竊に此仰によりて考るに、人材を至寶とし給ひ、四維を國の元氣とし給ふ事は、誠に國家の龜鑑、宗廟の基本たるへし、我朝の人主に、つゝに此御面影に似たるもさかす、古今にすぐれさせ給ふ御事といふへし、中に老臣を御しかりありし事、こかう申に及はず、周禮に冢宰あり、歴代に吏部あり、常に六卿の上に居てために人材を撰ふを已か職とす、其外閥閥の家も、所識の材を保任して朝廷に登進ひるを奉公としけり、しかあれと後世に至て、古道日に衰へ、君相ともに是を急務とせず、常に人の賢否をしるに心なければ選舉の道ありといへど、治聞宏詞身言書判の末事にすさす、吏部たる人も、身銓衡の職にありといへど、簿書期會さし當りたる事をのみつとめて、第一の本職を取失ひし事、代々もてしかなり、況や本朝にねるて鎌倉より以來君相たる人、此さたに及ふ事をさかす、しかるに此嚴命をさきて、るのかみの老臣たる人、たれか恐懼諛動して、上の盛意に承順さる者あらん、むへも御治世以後、人材輩出し庶政修舉し、文明日て附け、天下泰平の化に浴せざるはなし、是皆

東照宮の御遺澤にあらすや、日夜奉仰も餘りあるへき事なり

風俗は政の田地

るに天下國家には、風俗といふ物はかり大切なるはなし、君上の威は天の如く、其勢……
 は雷の如し、たれか背くへきなれども、世語に大勢に手なしといふやうに、二世の風俗には勝かた
 なる程に號令法度も、それにて一過は改るやうなれども、つゝに風俗にけをされて、あまねく
 下へ達しかたく、なかく末まで遂さる程に、たゞ局面はかり取傳て、はては風俗のなりになりてや
 むろかし、たとへは風俗は田地あり、政は穀種の如し、たとひ嘉穀の種にても、地こしらへあしく
 しては、ろたちかたし、ろの如く善政良法といへども、風俗といふのはすしては行れかたし、穀種の
 ろたゞん事を欲せば、地こしらへするにしくはなく、政令の行はれん事を欲せば風俗をといふる
 にしくはなし、されば風俗のものは人君の身にあり、人君たる人、身をねさめて下を化するといふ
 は、古今不易の道なり、人君の身ねさますしては、下たる人なを自當にすへき、しかれども古
 より善惡ともに久しく堅まりて、世の風俗となりて急には改まらぬ物ろかし、中惡に移るはやす
 く、善に移るは難き習なれば、今風俗を改んとならば、たゞあしきかたへゆかぬやうにつなきたも
 つにあるへし、是を風俗を維持すといふなり、風俗を維持する事は、君一人の力にては及かたし、
 時の執權をはしめ、もろく官長として群下の上になる人、各君の意をうけて身をおさめ行を慎て
 、人の手本となるやうにたにあらは、其下にたつ人、おのつから恐るゝ事あり恥ることありて法令
 もさくへき程に、風俗も改りてゆくへし、今の御代

上には儉素を尊ひおはし、毛頭も御榮耀なき事は、天下のしりたる事なれども、未々の驕奢は
 いまたやまず、常に聲色を遠ざけられ、晝夜御政事に御心を盡さるれども、未々の淫佚はいまたや
 まず、されは
 上の御盛徳は、翁つれか數ならぬ身にさへ、常に仰き奉る事なれば、まいて歴々諸役人として、た
 れか
 上の御旨をうけさる人あるへき、さこそ各油断はあるまじけれども、久しく衰へ来りたる風俗な
 れば、かくあるにてやあらんかし、萬治寛文のところかどよ、世に朝はやりて、貴富の家互によき朝
 を購りもどめし程に、其價しきりに踊貴しけり、阿部豊後守忠秋も其ころ朝をすかれて、常に籠を
 座側に置いてなかせてきかれけり、それをさる列侯なる人さへて、其ころ世にかくれなき朝を厚價に
 てもどめて、ある官醫をもて、ちかきころめつらしき朝をもどめ得て候、御慰に進したきよしをい
 はせけり、ろの官醫豊州のもとへ来て其旨を達して、御もらひ候は、さうよろこひにてあるへく候
 といひければ、豊州さかれて、先へよく意得てとはかりにてどかくの返事なし、しはらくありて近
 習のものを呼て、朝籠の口をみな庭のかたへむけよとある程に、みな外へむけければ、其口をの
 りなくあけよとある程に、皆あければ、朝籠らす籠をいてとひさりぬ、かの官醫見て不審にお
 もひ、久しく御手馴し鳥にて又立歸り候にやといへば、豊州いやさにてはなし、今日より残らす放

ちやるにて待るさて序なから申す、某おとさ上の御威光にて人に執しれもはる、身に物はずくしき事にて侍る、某このころふと鶴をすき候へは、はやさやうにさこゆる人もればし候、向後はふつと鶴すきをやめ侍るへしといはれしかは、かの官醫も手持なくみへしとて、わか敷寄たる事はやめかたし、人の志とてたましく贈る物は、もらひてもさてあるへきを、上の御爲を忘れよりして、かり初の事にも、世の風俗へも移り、わか權威にもなるやうの事はかたくつゝしまるゝ程にかくありけり、其外同じきころ執權の衆は、いつれもつゆ身に驕なく、權にはこらす、なに事もおほやけに沙汰せられし程に、其風下に移りて、末々の役人までも廉潔質直なる人ありて風俗を維持せしりかし、されど翁おもふに、風俗の上より下へ移るとさる事にて、又下より上へも移るにてありけりたどへは上より下へ移るは、水の源すめは下流すみ、源濁れば下流濁るかことし、下より上へ移るは、下流泥塞すれば、其泥を上へ推のはせて、漸々上流に及ふか如し、今富商大買の子弟、武人俗吏の悪黨、其外市井無頼の徒、日夜娼家戯場をもて家とし、酒色博奕をもて事とす、其風上へ移りて、列侯郡守の身に、ひろかに娼家の遊を好むもあり、士大夫といはるゝ身に、さうふて戯場の風を學ぶもあり、是皆下より上へ移るにあらすや、今此流俗を正さんとならば、いよく上にたつ官長を沙汰して、源を澄すともよりの事にて、又下にある悪黨を搜決して、下流の泥を浚ふへし、しかるに今比屋の賤民ども、日ころ府廳へ手遠き程に、たどひ宛告する事ありて官へ訴へん

としても、大かたは口上拙く、禮義をしらねはにかに府廳の晴なる所へいて、は、事の子細をくわしく陳する事あたはず、るれに下吏いさゝか推恕の心なく威勢を慕る程に少しにても無調法なる事あれば殿譴せられ、一言にても口上相違する事あれば詰問せらるゝ、よりて我に十分の理ありても、府廳へ訴るをはなはた難事とす、るの上府廳はた、一所にて、四方の訴は日々にかさなりて山の如し、中々手およひかたく、たどひ輕き事にて、滞りて多くの日かすを經る程に、其間比隣什伍相與にたひゝ應へ召出さるゝ一圓のわつらひとなり、費用もかゝる故に、るれにこりて、大かたは下にて無爲にすますをよしとす、かくては姦賊悪黨いかてか國にたへぬへき、所詮府廳手遠く、又は訴る事たやすからず、むつかしき故りかし、今姦惡を浚治せんとならば、方々にあまた小廳をたて、圍圍を設け、人を擇て其長とし、るの手寄ゝに幾街と各受取の限を定め、すへて府廳に屬せしむへし、さて什伍の法をいよいよ、嚴にし、比隣互に相いましめて、善をすゝめ惡をこらし、もし凶根にして人の言を用ひず、衆目にあまる程の惡ある者をは、たどひ其人國家の法をおかす事はなくとも、すみやかにるの手寄の監司へ告しらするやうにし、其場にて兪議の上、輕科ならば當座にすまし、重科ならば禁獄もいたさせ、追て兪議の趣を委細に具狀し、其人を併せて府廳に遣して、廳主の處決を仰ぐへし、しかあらは府下の人家な事にても官に達するに、府廳に至るの勞なく、府廳も小廳の成獄を受けて聽断せば日々應對簡易にして、下より訴る事も、壅滯するの患な

◎天下ハ天下の天下

九十二

るへし、それのみならず下の悪黨郷曲の間に隠るへきやうなく、人々庸行をつゝしむ心も出来て、急に感服する事はなくとも、面革には至りなん、かくして時月を経なは、風俗も漸々改りぬへし、たゞ官長たる人、大かた無事を専にし、姑息を安んじ、其下を治るに、公法をさへ犯さねは、見ゆるしきゝのかすをよしとす、それにては風俗の改まるへき期もなかるへし、もし一旦の料簡にていは、風俗の僉議は、迂遠ざるやうに聞かれども、翁はふかく恐れて、國政を妨げ、士風を敗るのことは、こゝにありとねもへり、腐儒迂闊の故態とやいはん、しかしながら杞國憂天の愚人ともふへし。

天下の天下

春過夏来て日もう、うくなかきころ、天氣も折から清和にて、庭の緑樹もしげりあひつゝ、花にまざるといひしもさる事とおもはず、翁か身のわつらはしさも、やゝこゝろよく覺へしかば、ひとり明窓のもとに巻をひろけて、古今の事を歴観し、いと感慨ふかゝりしに、いつも見馴し心しりの人さへあまた問来て、かたみに書を講じ文を論じて、日をくらしけるが、座中の人々いかゝ思ひけん於戲前王不忘といひしを、翁さゝとがめて、各申さるゝ如く、只今天下泰平なるか故に、世にある有徳有位の人は、もとより親を親とし賢を賢とし、我等ことさ徳もなく位もなきいやしき身までも、樂を樂とし利を利として優游して卒に歳は、これ皆泰平の餘澤にあらすや、歐陽永叔豊樂亭記を

著して、宋の太祖四海の亂を定めて、天下の人をしてゐなから百年泰平の樂みに安んせしむ、たれか其恩のふかきをしらむといへり、翁も亦おもへらく、

東照宮風に櫛り雨に沐し、御一生の力を盡し、撥亂反正し給ひてより、今百有餘年に及て、干戈動かす、四海浪靜かにして、天下泰平の化に浴しぬ、又誰か御恩のふかきを戴かざる、然るに我等ことさいやしき身にて申すは恐れあれども、上の御盛徳をのへて世に傳へ廣るは、儒臣の事なれば、さしてふかく憚るへきにもあらす、それにつきて、御盛徳の事おほき中に、日ころふかく奉と感て、あまねく世にしらせ度とおもひ侍る事あり、今各のために語り侍るへし、天下は天下の天下、一人の天下にあらずといふ事は、六韜の書にいて、天下の君たる人は、常に忘るまじき事にて候、最萬世不刊の名言と申すへし、されど中國にても、三代を除ては、れより創業の君、大かた天下を得るを我一人の樂として、天下の天下とするはなし、むかし明の太祖創業のはじめ、中山王徐達、軍中にて病を得ると聞給ひて、いろき召かへし、諸醫を召ていろく療治せられしかども、終にかなはさりしかば、太祖自から山川社稷に禱て今數年徐達か命をわたへ給へ、さるにおゐては、達か死せん時、朕か命も一度にとり給へと神に告給へり、太祖の諸將徐達を第一とす、天下を平定するの功、徐達にしくはなし、此時天下甫定まりて、達先死しわれひとり残りて泰平の樂を享るの本意なき事をかなしみて、せめて數年天下の安きを共にして、死なば諸どもに死なんと、わか命をかけて

◎天下ハ天下の天下

九十三

神にちかへるなるへし、翁明の史録を讀て、こゝに至て歎息しておもへり、古より眞主は別の事なり、馬援か光武を見て、帝王有眞といひし、むへさもあらんかし、もとより徐達が死する時、天下すでに明に歸して、冢嗣も定まり、社稷も固く、たとひ太祖崩じ給ひても、うぶに危き事なき程にかくはの給しうかし、されと天下を得ては、おかく存命して、わか身の樂をさわめむどころ思ひ給へきに、功臣の死をかなしみて死を同うせんと禱り給ひしにてしりぬ、あながちに天下を得るをもて樂とせず、なにとて天下を得るを樂とせざるといへは、其心はしめより天下を天下の天下として、一人の天下とせねはなり、漢の高祖光武なども同じ規模なるへし、此大器量なくては天下を得がたし、もし小兒のめつらしき玩物を得て、いつも身をはなさず、人にとられんかど氣つかひするやうにては、たとひ天下を得ても、やかて失ふへし、秦の始皇楚の項羽、我朝にてもちかき比、信長秀吉をもてしるへし、いつれも不仁にして天下を失ふはさる事にて、しかなから天下をたもつ器量に非ずされは、古人も深山有寶無心於寶者得之とはいへるうかし、天正十四年の事かど、長湫合戦の後、

東照宮すてに豊臣秀吉と御和睦ありしか、秀吉使を遠州濱松へつかはし、上洛と號して大坂へ御來會をすゝめられしかども、御同心なかりしかは、頻々使來る事數度に及てやます、それにてもなを御同心なかりしかは、秀吉母氏大政所を質として、御出駕を請れしに、御思案ありて、御上洛ある

へきのよし仰出されしを、群臣危き事おもひて、いづれも一同に申上げるは、もし御上洛なきを秀吉いかられ、鉾楯に及候ども、もとより御弓矢のつよきは申に及はず、それに臣等一命をすて、禦さ候は、秀吉百萬の兵といふども、心やすくは敗れ候まし、それに只今危き所へ御越まします事あるへからすとて、達とて、め奉りしかは、その時いつれも申通にて候、秀吉の威勢におうれて上洛せんといふにはあらず、よくおもふて見よ、天下の兵亂久しく打續て、此比までも干戈おさまらず、都鄙安堵せざるにあらずや、此一兩年の間、漸く天下靜謐にむかひつるに、其秀吉と鉾楯におよひなは、又爭亂始りて天下の大難になりぬへし、もし上洛して不慮の變もあらは、其時は天下のために一命をすてんと覺悟したるうと仰られしかは、群臣みな肝に銘して、とかう申上るに及はさりしとて、岡崎を御首途の時、井伊本多に御身後の事まで仰おかれたれば、御自身にも危しとおはしめさるにもあらず、それにおもき御身といひおしき御命をもて、天下に代らぬと仰られし御一言の誠は、天人に感通すへし、それ故におう天命人心に御かなひありて、天下をたもち給ひしうかし、されは明の太祖は、命をかけて功臣の死を救はんと禱り給ひ、

東照宮は、御命をかけて、天下の難を濟はんとおもひ給ふ、御器量の大きにして、いはゆる寶に心なきは同じ事なれども御仁心の深厚なるは、恐らくは太祖のおよひ給ふ所にあらし、いつの比にかありけむ、ある人の家にて、

◎直諫ハ一番鎗より難シ

九十六

東照宮の御軍功の事など語りあひしか、其序に主人この事語りいて、其忝けなさを思ひどり、賓主ともにおはへす落涙におよひにき、しかるに兵家者流、又は世の智謀を好む者、是等の事を聞ては、主將人心を撓のかしこき謀とおもへり、常に權詐を倚ふ心より見れば、さいふも似合たる評議とはいひなから、是非もなき事なり、さやらの人のためには語るへからず、

直諫は一番鎗より難し

されは古より倭漢ともに、創業の君おほくは天下を一人の天下とおもふ故に、天下を得ては、榮華をさばめ名聞をつとめぬはなし、しかるに天下を御一人の私物とおほしめさぬ故に、御治世の後も、いさゝか御身の御榮華をばおほしよらす、たゞ天下の爲に御思慮を勞して、なかく燕翼の謀を賄しをかれしかは、重陣累洽、御代を逐て昇平なるうかし、關ヶ原御陣以後、いつの比にかありけん、山岡道阿彌前羽半入など御前に伺候し、御閑話ありしに、天下をしろしめさるゝ御身にては、なにても世にまれなる事をあうはしおかれ候は、なかく御名も遺るへく候、うれ故太閤も大佛を建立にて候と兩人申上げるに、各申通大佛殿は未の世迄も残り、太閤の名も傳るへし、されど我は一方の名を残す事をおもはず、たゞ天下のためになるへき事を工夫して、後嗣に貽す外はなし、是大佛殿いくつ建立したるよりも増るへしとおもふと上意ありじとぞ、さて兩人をば、おろかに蔑はかなる事を申すとあうおほしめしけめと恐れなからも、おしはかり奉らるれ、かの朝鮮を征伐し

て、おほくの人を殺し、大佛を建立して多くの財を費しぬるは、天下の害にてあるあれ、國家のためになにか絲毫の益になる事ある、たゞ愚人の耳目をおどろかすばかりにて、少し心ある人は、いまの世迄も眉をしばひるうかし、しかれば未の世に名をのこすとはいへど、ななき賤を招くなるへし、しらすや今日光の御廣、屹として泰山の如く、國々までも奉祀して、仰き奉らざるはなし、是も永代不朽の御名譽とはいふへけれ、るれに別してひとつ感し奉るへきは、かくはかり古今に傑出し給ふ御事にて、御在世の内、御自身の聰明に倣り給はず、常に下の直言を納めさせ給ふこと、眞の御聰明とも申奉るへけれ、古より人君の徳を論するよ、諫をいるゝを本とす、およろ人聖人にあらされは必過失あり、たどひあしき事ありても諫をいるれば、虚損の疾の補藥を受るかとし、虚損おもしろいへと、よく治するの類あり、いかほどよき事ありても、諫をふせげは、虚損の疾の補藥を受るかことし、虚損軽しといへど、不治のおそれあり、しかれども英明の君のくせとして好て自から用る程に、下の直言をふかく忌にくめり、もろあしにてばいつれの代にも、諫議正言などの官をたておきて、求し諫要とすれども、多くは其名はかりにて、直言する人は退さやすく、阿諛する人はすゝみやすし、よりに上に過譽あれども改めず、國に闕政あれども擧せず、是古今の通患なりき、いはんや我朝武家の代になりて、上は専に武威をもて下を制し、下はたゞ勇力をもて上につかふ、言語塞りやすく、下情通しかたぐ、國事日に非なる事、もとゝしてあのみよしなり、しかる

◎直諫ハ一番鎗より難シ

九十七

に上下どもにこれを簡要の事と思ひよる人あるはまれなり、おゝに

東照宮、兵亂騷擾の間にお出まし〜て、常に言路をひらき、下情を通するを御心とし給ふを、古今にすぐれたまひたる御事と申へし、遠州濱松の御城に御座なされし時、ある夜本多佐渡守、井に外様の者三人、御用の事ありて御前に召出さる、御用すみて、三人の者は退出しけるか、中に一人御前にて鼻かみ袋より筆記の物一通取出し、自身に御前へ持てさしあげり、それはなにぞと御尋あれば、日さる私の存しよりに候事とも書付をき申候、は、かりなから萬にひとつも、御意得にもなるへきかと存知候て、さし上候よしを申ければ、それは奇特なる心入かなと御感なされ、佐渡守はさゝてもくるしからず、それにてよみてきかせよと仰らるゝ程に、數箇條ありしを段々よみけるに、一箇條をよみおはる度とに、尤なる事と御あいさつありて、其筆記の物是へとて御取あはし、さて仰られけるは、是に限らず此後も存しよりたる事あらは、少しも遠慮なくいひきかせよとありしかは御聞ど、けあうばされ、かたしけなく存し奉ると申て、御前を立けり、其後に佐渡守残り居けるか、さて彼者卒爾なる仕かたにて候、それに一箇條も御用に立申へきと存する事は、さこへ申さす候と申上げれば、御手をふらせ給ふて、いやとよさして用いたつほどの事はなけれども、其身相應の思案をつくし、内々書付置て我等に見せんとおもふ志は、なによりも奇特なる事りかし、其いひ上る事、用いたてはどり、用いた、ねはとらぬ迄にておうあれ、卒爾なるしかたなど

直隸の一番館より離し

いふへき事にはあらず、惣して上も下も、我身のあやまちはしらぬものなり、されど小身なる者は、心安き友達傍輩とあれば、たかひに身の上の悪き事をいふて吟味もする程に、意付て改る事おはし、是は小身の益なり、大身なるものは、友達傍輩と出合て心安く語るといふ事もなければ、常に出合ものとは、家臣所従はかりなり、それらは大かたの事は御尤とならてはいはぬ程に、我過をしるへきやうなし、しらぬは改る心もつかすして打過るのみなり、是は大身の損といふへし、古より富貴なるもの、國を失ひ家を亡すは、大かた我過をいひきかするものなくて、自身にする事をよきとはかりれもふ故なり、しかればわか悪事を告知する者は、大切に思ふへきにあらすやと仰られしを、佐渡守うけ給りて覺へ居けるか、あるとき嫡子上野介に語りさせ、上の御思慮のふかきにうへて御仁厚なる事をいふて、落涙におよひしに、上野介さゝて、其人は誰にて候つる、其申上候事はいかやうの事にて候やと尋られければ、佐渡守上野介をしかりて、たゝ上の思召の結構なる事を思ふへし、其人の名も、その申上し事も、汝さゝて何にせんとおもふるとて、いひきかせさりしとて、上野介年わかにて、其人を嘲ける心にておかしく思ふて、名をさゝ其事をきかんといはれしを、佐渡守合點して、おさへられしなるへし、其後駿府の御城に御座なされし時、御側に侍座の衆へ上意ありしは、人君はよき家老を持へき事なり、我常におもふに、主君の悪事あるを、主君の怒をもかへり見す、諫言をいゝ家老は、戰場にて一番鎗をするよりも、遙にまさりた

直隸の一番館より離し

◎杉田壹岐

る心はせとふへし、其子細は、敵に向て勝負をするも、身命をかはひてはならぬ事なれども、必
 敵にうたるへきにもあらず、たとひ討死しても、世に名をのこし、主君にもれしされぬれば、死し
 ても本望なる事なり、又敵を討取ぬれば、主君の威にあつかり、恩賞を得て子孫にも傳れば、戦場
 のはたらきは、生死ともに心にいさみあるへし、それとはちかふて、主君の無道なるをなげきて、
 しはく直諫すれば、忠言耳に逆ふ習にて、主君の心にはぬ程に、常にいと嫌はれて、たゞ禮
 貌にてあひしらはれ、日に疎遠になるものなり、それに新進容悦の諂ひもの共、件の家老を事にふ
 れて讒する程に、日を逐て主君の目見せおしくなりて、何をいふても用られず、其時はいかなる忠
 臣も退屈する故に、或は病氣と稱し、或は致仕をねかふて、身を引退く分別するるか、然るに主
 君の氣に背くにもかまはずいくたひもすゝみいて、極諫しなば、主君怒を積て手討にするか、又は
 押おめて出さぬやうにするにてあるへし、それを露も心につけず、たゞわか報國の志をつくして、
 終るは世にありかたき忠臣といふへし、是に比すれば、戦場の一番鎗は反てやすき道理なりと仰ら
 れしとなん、誠に萬世御子孫の御事は申に及はず、すへて人君たる人の永き鑑戒となるへき御言葉
 ともなり、

杉田壹岐

是によりて思ふに、おとしえん 陥陣先登するは、難さやうにて易く犯顔直言するは、易さやうにて難し、然

るに古今君も臣も、おとしえん 陥陣先登の功を貴ふ事はしれども、犯顔直言の忠を重んずる事はしらす
 されは君たり臣たる人、いつれも

東照宮の上意を忘るまじき事なり、寛永のころ、越前故伊豫守殿の家老に、杉田壹岐といふ者あり
 、もとは足輕なりしか、其身の材をもて微賤より登庸せられ、厚祿をうけ國老に列しけり、伊豫守
 殿參勤にて、一年在江戸の内、費用過分なりしを常に前年より支度して、用度たる様にしけるは、
 ひとへに壹岐か功なりしとかや、それはさる事にて、常に犯顔直言して、君の過を匡救する事を忘
 れず、ある時伊豫守殿在國にて鷹狩し、晡時に及て歸城あり、家老ともいつれも出迎しに、伊豫守
 殿おどの外氣色よろしく、家老どもに對して、今日わか者どものはたらき、いつにすくれて見へし
 、あれにて萬一の事もありて、出陣するも、上の御用にもたつへしと覺ゆるるか、其方とも承て
 いつれもよろこひ候へどありしかは、家老ともいつれも、御家のためなるにより目出度御事にて候と
 いひしに、壹岐一人未座にありけるか、黙々として居たりしを、何とろいふかどしはらく見あはせ
 られしか、こらへかねられ、壹岐は何とおもふとありしに、其時壹岐、只今の御意承り候に、は、
 かりなから歎かしき御事に存し候、當時士共御鷹野などの御供に出候とては、さきに御手討にな
 り候はんもはかりかたく候とて、妻子といとま乞して立わかれ候と承り候、かやうに上をうとみ候
 て思ひつき奉らす候ては、萬一の時御用に立へきとは不存候、それを御存知なく頼もしく思しめさ

◎杉田壹岐

るゝとの御意ある、おろかなる御事にて候へといひしかば、伊豫守殿大きに氣色損しければ、何かしとかやいひし者、伊豫守殿の刀もちて側に居たりしか、壹岐に座を立候へといひしを壹岐聞て、其人をばたとにらみ、いつれもは御鷹野の御供してしゝるを逐てかけ廻るを御奉公とす、此壹岐か奉公はさにてはなし、いらさる事申候などて、其まゝ脇指を抜てうしろへなけすて、伊豫守殿のろはへ進みより、たゞ御手討にあうはされ下され候へ、ひなしくなからへ候て、御運のおとろへさせ給ふを見候はんよりと、只今御手にかゝり候は、責て御恩の報し奉る志のしるしと存玄候はんといひて、頸をのへ平伏しけるを見給て、なにともしはて奥へいられけり、其跡にて、外の家老とも壹岐にひかひて、御爲をれもひて申されしは尤にて候へとも、折もあるへき事にて候、今日御鷹野より御機嫌にて御歸りありしに、御氣さきをおられ候事は遠慮もあるへき事におよと云しを、壹岐君へ諫を申上候に、御機嫌を考候ては、よき折とてはなき物にて候、今日はよき序とあり存候へ、其上某事は、御取立のものにて候へは、各とはわけのちかひたる者にて候、御手討にあひ候ても其分の事にて候といひければ、諸家老各感しあひける、さて家に歸りつゝ、切腹の用意して君命の下るを待けるか、日ころ糟糠の妻のありけるにひかふて、ろこにいひをく事たゞひとつ侍り、御身は女の身なれば、直に御恩をうけたるにてはなれども、我御厚恩を荷ふ故に、足輕の妻といはれし身か、今歴々の妻とて、大勢の所従は圍繞せられしは、かきりなき御恩にあらずや、しかればわれ

生害仰付らるゝ跡にても、たゞ朝夕今迄御恩の有かたかりし事を忘れずして、かりにも上を怨み奉る心あるへからず、もし女心にて、我身のものうきにつけて、上を怨み奉るやうなる事を、言葉の未にもつゆをきなは、黄泉の下までもふかく怨と思ふへしといひける、さて今やと待けるに、夜ふくる程に人來て門をたゞししか、召あるまゝ登城すへしとなり、さてこうとおもひて登城しけるに、すぐは寢所へめし入、其方か晝いひし事心にかゝりて寢られぬ間、夜陰なれどもよひつるなり、わかあやまりたる事はどかくいふに及はず、其方か心さしをふかく感し思ふて満足するとの事にて、直に腰の物を賜りしかば、壹岐も思ひ寄らぬ事にて、おほへす落涙に咽ひつゝ拜賜してまかり出けるとう、此事翁加賀にありし時越前の人ありて語りしか、今おもへは此杉田なところ東照宮の仰られし世に有かたき家老といふへし、誠に一番鎗よりも難き事にあらんかし、

伴 大膳

されは巧佞なる臣は、人君の心にかなひて、常に任用せらるれども、大切の事には、剛直なる人ならては用ゑたちかたし、ろれに付て右の杉田事とはちかひたる事なれども、序なからかたり侍るへし、大坂冬御陣の前に、片桐市正攝州茨木の城に據て御味方いたせしに、柴山小兵衛が泉州堺に有て急難なりと聞て、間近く味方の急難を見捨ては、御味方申たる甲斐なき事とおもひ、茨木の城へ引とり一所にならんとて、手下の兵少し引わけてつかはしけるに、其兵攝州尼崎を過て堺にいたら

んどしけるを、大坂より兵をつかわし、茨木の兵を取巻て攻ける程に、尼崎の城へ援兵を乞しかども、城より救はさりしかは、茨木の兵のこらす討死しけり、此時尼崎の城主建部三十郎幼少なりし故、播州池田武藏守より、池田越前宮城大藏などいふ宿將に、士卒を添てつかはし置けるか、此者ども片桐を疑て、茨木の兵を救はざるにてありける、世には武藏守大坂と内通あるやうにも沙汰せしなり、大坂と一たひ御和睦の後、京二條の御城にて、此事御僉議ありしに、武藏守の家臣に、伴大膳といふ者は、上にもよく御存知ある者なりしか、お前にをみて段々申わけいたしけれども御憤いまたどけす、今においてとやかく申候ても、眼前に味方の兵うたる、を見ころせし事、武藏守心底いふかしく思しめざる、よし仰られ、其ま、御座をた、せらる、を見奉り、脇指を抜てうしろへなけすて、御側へ匍匐より、御小袖の裳にすかり、是は御なさけもなき上意にて候、いかに御姫さまの御腹より生れ候はずとて、武藏守も御孫とは思しめされす候や、た、今此申わけ仕らすしては、いつ申わけ仕るへく候やとて、はら／＼と涙をなかしつ、申上げれば、其誠を感じればしめざる、にや、よし今はさ、わけ、るる、いろき歸りて武藏守に申さかせて安堵させよと上意ありしかは、大膳手を合せ平伏して、御禮を申上てまかり出けり、其跡にて御前侍候の衆へ仰られしは、あの大膳か父をも大膳といひて、武藏守か父三右衛門いまた弱年にて庄三郎といひし時の馬卒なりしか、長湫の戦に庄三郎か父勝入兄庄九郎討死したると聞て、同じく討死せんとて、乗つけぬかむとするを

彼か父大膳、其時は何かし男とかいひて、馬の口を取しか、しめて馬を引返してつれてのきけるを庄三郎怒てはなせ／＼といひて、馬上より鎧にて頭を續けさまに二三町か間蹴つけし程に面より血の漣のとくなかる、をもかまはずして、つゐにのかせけり、其時討死せば、むなく死して家も絶なまし、しかるに播州一國の主となりしは、かの大膳か其時の働にて存命したる故うかし、さすが親の子ほどありてあの大膳も、主のために身をかはふ事なきは、ういやつとれもふなり、今の世に、われらか前へいて、さきのやうなる事をいふべき者は、外には覺へず、武藏守はよき人もちたるど上意ありしとなり、ろも／＼大膳か匹夫をもて天下の御威光に對し、主君の爲に一命を抛て、國の宿冤を明かにしけるは、世にたくひなかるへし、されはこゝろ上聽を回し、御氣色も露るのみなり、ふかく御威を蒙りしは、大かたなるへき事かは、しかなから上の御盛徳と申侍るへし、されは是に限らず、鈴木久三郎か池徳の鯉をどりしをば御手討になされんとおはしめすほどの事なりしかども直言を申上げれば、其ま、御怒をやめられ、反て御威しあるはしけり、初鹿傳右衛門か御朱印に墨をぬりて悪口申せしをば、一往放棄せられしかども、長湫の戦に傳右衛門ひろかにかくれて御供して首級を得たりしかは、即時に其場にて御直に前の罪を御免し、戦功を御威しありける其外にも常に御威光を屈せられ、下の義氣を御取たてなされしかは、群士も勇氣を折かれ奉らざる程に、御ために命をすつる事を露いどふ心なかりき、かの織田北條武田上杉の主將も、智謀勇略は

世にすぐれけめども、專に已か威力にはこり、下の勇氣をひしくをもて手柄とせし程に、一旦は盛なるやうなれ共、上一人の威勢はかりにて下の義氣れとろへては久敷はつゝかぬもの也、されはこるいつれもつゝに亡ひしうかし是をもて

東照宮御思慮のふかきをしるへし、其ころ御弓矢のつよかりし事、天下にならひなかりしは、いはれなきにわらず、然れども今世の人、大かたは御武運のつよかりしとはかりいふゆり、もとより御仁徳よかりし故に天命にかなひ給ひしは、自然の道理にして、それはせんきの及ふところにあらずせんきの上にていは、御武運のつよかりし、御弓矢のつよきにあり、御弓矢のつよかりしは、諸士の義氣を御うたてなされしにあり、しかれば下の義氣を御うたてありしは大切の事にて、御孫謀を貽したまへるひとつともいふへし、しかるをた、御武運のつよきとはかり意得るは、いと淺き、事なるへし、

阿閉掃部

前に申つる杉田壹岐か事につけて思ひ出し候、是も越前の士にて候、さして忠義に係る事にては侍らねども、其頃の士風を語り申すへし、秀康卿越前に封せられ給ひし後、阿閉掃部とて、武功の譽ありし者を、厚祿にて召抱られけり、又伯伊勢とて、是も國にて世祿の歴々なりしか、嫡子に鎧の着初させけるに、かの掃部を招待しつゝ、子に鎧さする事をたのみけり、さて饗膳すみ、いはひの

盜に及びし時、伊勢、今日は愚息か鎧の着初にて候ま、御身の御武功の事御物語候て彼に御さかせ候へといひしに、掃部いや某か身の上に、御はなし申へき程の武功は覺へ申さす候、されと御望も黙しかたく候ま、某一生の内に武者振の見事なる士を一人見申て候、その事をはなし申へし、江州志津嶽の戦に、暮方に某一騎余吾の湖のわたりを引候ひしに、阿閉掃部が父阿閉法守とて、明智に柴田方に敵とおほしくてうしろより詞をかけし故、馬を引返し候へは、其人申候は、今朝よりかせ候へども、よき敵にあひ申さす候、御人體を見うけ幸どころ存候へ、御不祥なから御相手になり申へきとてすゝみより候故、それころこなたも望む所にて候へとて、たかひに馬をのりはなし、すてに鎧をわはせんとしけるお、其人しはし御侍候へ、今朝より雑兵をおほく突崩し候故鎧よこれ候ま、鎧をあらひ候て御相手になり候はんとて、余吾の湖に鎧を打ひたし、二三遍あらひつゝ、さらはとて突あひしか、久しく勝負なかりし程に、日も暮はて、ものゝあやめも見へすなりぬ、其時あなたより又詞をかけ、もはや鎧先も見へす候、御殘多くは候へども是までにて候、御いとま申候へし、御名こそ承たく候、某の青木新兵衛と申者にて候とて、某か名をも承り候て、此後又陣頭にて出合候は、たかひに人手にはかゝり申ましく候、もし又味方にて候は、わりなき入魂いたし候へし、さらはとて立わかれしか、是程見事なる武士はつゝに見侍らす、いかゝなりはて候にやと語りけるに、其比伊勢かもとへ心安く出入する青木方齋といふ浪士あり、其日も來て勝手に居た

りしか、此物語をきいて、勝手よりにしりいてつゝ、掃部にむかひて、さても只今の御物かたり承り、今更昔を思ひ涙をおとしてこころ候へ、其時の御相手になり候青木新兵衛は、はつかしなから我等にて候、かく申はかりにては、うきたる事におぼすべく候とて、其時雙方のよろひのおとし馬の毛色を一々いひけるか、ひとつもちかはさりければ、掃部ねとろきつゝ、さてく久しくてあひ候て本望に候とて、手前にありし盃を方齋にさし、是をしるしにとて、腰のわきさしを抜てひきける、それより方齋か名國にたかくなりし程に、秀康卿の耳へも達せしかは、掃部ともし祿にてめし出されけるとろ、其後一伯殿筑紫へ左遷の時、掃部はいかゝなりけんかしらす、方齋は先祿にて加賀へ招かれ、それよりすくに仕へて、子孫相續して今にあり、翁加賀に有し時、ある人此事を語るをきゝしか、青木か武者ふりの見事なるはさる事にて、阿閉か彼か事をいひ出て、名のり合てよろおひし、又伊勢か子の鎧の着初に掃部を招て、子のためにとて武功の物かたりを望し、いつれもさしたる事にてはなけれども、其ころの士風武をたしなみし事しられ侍る、たゝ今人家に子をうたて候に食の喰うめ袴の着初をといはひ候へども、鎧の着初と申事は、大祿の家は存せず、我等とさのいやしき武士の家には承らす候、是も人々武の心懸うすき故にて候、よりにて大小兩刀又は甲冑等のこしらへの華美を專にし、たゝ武を道具と迄意得る體にて候、我朝は武家の治世になりしより、五百年以來、天下武をもて風をなし候故、外の事はしらす、武の一筋は人々つねに忘れず假初の

一言にも慮したる事をいはず、しはらくたつにも脇指をはなさず、文道より見候は、かたくなにいやしき方にてあるべく候へども、是程に心懸す候ては、武の一筋はとをり申さす候、翁かねて學者に申候は、學者の道に志さす事、武士の行住坐臥に武を忘れぬやうにさへ候は、聖賢の域に至らん事も難かるべきにあらず、もとより武も義氣の發する所にて候、古來我朝の武士を見るに、多くは不學にて文道の僉議はうとく候へども、義にあたりては、一命を輕んし、廉耻の心を失はぬは、武義のいたす所にて候、されは鎌倉以來教化は世に行はれす候へども、責て此武義ひとつにて士風をも維持し、國家も治平なる事に候へるに、近來はるの武義さへかやうにおとろへ行候事は、所詮風俗の日に遊惰になり候故と、いとなげかしこころおもひ侍れ

士の節義

ある時の會に、古今節義の事に及けるに、翁いひけるは、孔子季路冉有の二子を父と君とを弑するには不從と仰られて候、少し志あるきは人の、君父を弑するに同意する事あるべきや、二子は孔門の高弟にあらずや、それにかく仰らるゝ事たゝ季氏か不臣をいましめ給ふといふはかりにはあらず、是はいはれある事にて候、たゝ今刀を取て君父を殺す者ありて、我に同意せよといはむには、誰か從ひ申へきにて候、然るに時移り勢變して、君父たる人を殺しても、其跡あらはれず、人もさしてどかめぬやうに成行時は、已か利害にひかれて、覺悟を失ふものにて候、楊雄は王莽か不臣

を弑せしに仕へて、反て莽か功徳を頌し、沈約は蕭衍をすゝめて、和帝を弑し、その謀臣となるさ
 ては明の靖難の時にて見給へ、燕王は建文帝を殺せしかども、在朝の名臣蹇義夏原吉楊溥楊榮を始
 とし、いづれも燕王を奉して、是に臣とし仕へざるはなし、其外歴代不學無識の徒は論するにた
 す、是等は皆一代の文儒として、世に名をあらはす人そかし、是にてしるへし、季路冉有を弑父與
 こ君には不從どの給ふは、二子大義よおめては、見る事明かにして、慥に覺悟のたかはぬ所を、聖
 人見届給てかくの給ひけるを、實に容易の事とはいふへかす、我朝にても、源義朝か父爲義を殺
 すにて見給へ、其身も大惡としらぬにてはなけれども、君命はおもし、父ながら朝敵となりたる人
 なれば、是を救ふ事叶ひかたし、うれに鎌田正清などいふ無愾の輩、いろく拵へていひけるま
 、あへなく是を殺してけり、彼二子はやらの場に至ては、たどひ身命を果しても覺悟をたかふる
 事あるまじきあり、義朝さしも源家の名將と聞ゆれども、勇氣はかりにて、義理にくらく、志節な
 き故に是ほどの理非にまよひたり、いかして長田忠宗かおのれをころすをとかひへき、但此事は
 北畠親房の神皇正統記の論正しうして、最理に當れり、此事の斷案ともいふへし、正統記にいへる
 は、義朝父のくひをさらせたりし事、大きなることかなり、古今にもさかす、倭漢にも例なし、勳功
 の賞に申替るとも、自から退くとも、なとか父を申たすくる道なかるへき、名行かけはてにければ
 、いかてかつるに其身をまたくすへき、程なく滅びぬる事は天理なり、およろかゝる事は、其身の

とかはさる事にて、朝家の御あやまりなり、よく朝議あるへかりけるに、其比名臣もあまたありし
 か、なとか諫め申さゝりける、大義には滅親といふ事のあるり、石碓といふ人其子をころしたる事
 なり、不忠の子を殺すは理なり、父不忠なりとも、子としてあるすの道理なし、保元平治よりこの
 かた天下亂れて、武威さかりに、王位かるくなりぬ、いまた太平の世にかへらざるは、名行のやふ
 れるかしとろ、此時代是程正しき議論あるをさかす、さすか親房、南朝の耆老とて、此見識ある程
 に此議論もあるそかし、ちかきころ明智光秀か、織田信長を弑せんとて、丹波路より引返す時、途
 中にて旗下の將士へ隠謀の企ある事を始めていひさかせ、さて一黨同心せんといふ一紙の誓文を出し
 けるに、軍士たかひに驚き視て、とかうの事に及はざりしに、齊藤内藏介申けるは、此御企て十に
 ひとつも御利運あるへき事にて候は、同意いたすましく候得とも、御敗亡は見へたる事にて候、
 ろれに只今辭退いたし候は、命をおしみて其場をはつし申にて候、ろれは士の義にあらずとて、
 一番に血判しければ、残りの人々も一言に及はす、みな同じけるとなり、孟子に非義之義、大人弗
 り爲といへり、内藏介か義は、大人のせざる所なり、此時光秀をつよく諫てさかれす、光秀か手にか
 かり死なんは、中くまさるへし、萬一光秀本望を達し、永く世にあらは、内藏介いきてをるへき
 や、いきてをらは前にいひたる事はいつはりなり、よしまた其時自殺するにもせよ、賊黨の名はの
 かれ得す、世話にいほる犬死といふへし、畢竟義理の筋にくらき故に、小節に拘り、時勢に逼ら

の歳寒知松柏

百十二

れて、つるに賊黨に陥り、極罪に處せられけるはなげかしき事ならずや。

歳寒松柏知柏

座中ひとり、宋の文天祥謝枋得か事をいひて嘆美するに、又ひとり明の方孝孺か事をいひ出て、孝孺成祖に對して始終少しも屈せず、あくまで成祖を罵て口をさかれ、まのあたり赤族せらるを見て悔さりし、古今義烈の士といふへしといふを、翁聞て、文山か衣帯にのこれる贊、壘山か却聘の書を見給へ、二子の心事明白なる事をしるへし、文山か元の博羅と問答するを見るに、其氣象凛々として犯すへからず、しかも其從容たる事は、方孝孺等か慷慨しで就死にもまさりて殊勝にう覺へ侍る、但文山は宋の丞相にて、もとより國と休戚を同する身なり、壘山は宋の臣たりといへど、顯仕にも登らず國事に預る程、身にもわらねば、宋亡ひて、元に仕へすして、隠れ居ても、さてみなん、然るに八十歳におよへる老母ある故に、しはらくなからへてありしか、後に元人の聘を知けて、つるに食を絶て死しけり、其清節文山と抗衡すへし、趙子昂留夢炎等是を見て、恬然として元に仕へしとて、いかで羞惡の心を失ひけるにや、無恥の甚しきものなり、さて明朝建文の亂に殉國の諸臣、その勇壯義烈いづれも孝孺におとるへからず、古今義氣の集るとあるとや申へき、此時先朝の文武名をしらるゝ程の者、燕王を迎奉せしかと、此諸臣はかり國難に殉ひし事は、誠に堪寒して松柏をしろとも申へし、孝孺か弟孝友か就戮しを孝孺みてうれまては、九族門生ころされ

尸を前に積を見ても、一たひ願る事なかりしか、さすが兄弟の愛忍ひかたくなありけん、おほへす落涙しければ、孝友詩を口つから占て、兄の孝孺に訣れける、其詩に

阿兄何必淚潜々、取義成仁在此間、華表柱頭千載後、旅魂依舊到三梁山。

いとあはれなりし事なり、百世の下までもさく人袂をしほるへし、されど殉難の諸臣は、世に赫著する事にて侍れば、今更申にも及はずこゝに其列にはあらで、殉死よりもまさりて覺ゆるは、建文帝に從て出亡せし二十二人にて候、中にも翰林脩選程濟か貞節は古今比類なき事といふへし、それにつきて建文帝の始末を各はくはしく考へ置給へるや、翁た、今は記臆うせて、たしかお覺しと思ふ事もおほくはたかひぬれば、只あらましを物語し侍るへし、太祖の時懿文太子薨して、建文帝嫡孫をもて皇統を繼れしか、帝年わか材弱くおはせしに、叔父の燕王雄才ありて、偏強難し制見へし程に、百歳の後國家の變あらむ事を太祖かねて慮り給るにや、其時誠意伯劉基博學にて、識緯の事をも奏進せしと聞へしか、劉基などか所爲にもあるにや、ひとつの紅篋を密緘して殛しをかれけり、大難に臨て是を開けといふ事にてありける、然るに燕兵すてに大内に迫て京城守らす、今はかうよと見へし時、命して大内に火をかけさせ、帝自から焚死するやうに物して、其紛れに程濟かの紅篋を打碎きて見れば、度牒三張、三人の名にうへて、袈裟帽子剃刀の類まで内に備りてあり、又篋内に朱書して、應文は鬼門よりいて、其餘は水關の御溝よりいて、薄暮に神樂觀に會すとあり

の歳寒知松柏

百十三

三人の名ひとりば應文、是は建文帝たるへし、ひとりば應能、是は楊應能應し、ひとりば應賢、是は葉希賢應す、程濟急に帝の髪を祝しければ、兩人も同じく髪をおろし、衣を易て袈裟を着しぬ。帝は殿中にありあひける十九人をしたかへて、丑寅の門よりいてけるに、神樂觀の道士王昇舟を臆して待うけつゝ、帝を逐て觀に到りしか、程なく應能希賢を始とし、すへて二十二人來會する時は、すてに薄暮になりなき、かの紅篋の識すこしもたかふ事なきはいとあやしといふへし、それより二十二人の者、妻子をふり捨て、帝にしたかひいつくともなく出亡しけり、應能希賢は比丘となり、程濟は道人と號し、此三人は左右をはなれず、外の十九人は東西に聚散し、道路に往來して、衣食を給し、應援をなし、相與に壹心戮力して、始終一のとし、京城陥りし時、成祖宮人に帝のあり所を詰問れしに、馬后の屍をさしめしければ、さては自から焚死しけるとて、其屍を煨燼の中よりとり出て、禮葬せられしか、其後世に建文帝、いまた死せずと沙汰しけるを聞て、ひうかに天下を搜してやます、胡煥に命じて仙人張三手を訪求めさせられしも、實は帝の踪跡をたつねんためと聞へし、よりにて人に物色せられん事をおろれて、一所に留居するもかなければ、君臣ともに影をかくし、迹をたちて、四方に漂泊す、其後從亡の人皆うせはて、兩比丘も相繼て身交かりければ、程濟一人はかりのありて、帝を奉護しけるか、或は屢空にして出て糧を募り、或は侍病て出て藥を乞、その崎嶇艱難思ひやるへし、帝詩をよくす、名勝を遊歴して、多くは詩を賦して、懷舊の情

をいへり、其中一首覺へ侍る、

半落西南四十秋、蕭々白髮已盈頭、乾坤有恨家何在、江漢無情水自流、長樂宮中雲

氣散、朝元閣上雨聲收、新蒲細柳年々綠、野老吞聲哭未休、

是を吟するに人をして千載の恨あらしむ、帝長命にて、成祖仁宗の兩朝を歴て、英宗正統五年に至りて、粵西におはせしに、帝と同宿の僧ありしか、今において帝といは、朝廷におはれられん事をばかりて、帝の詩を竊て、自から建文帝と稱して出ければ、藩司其僧并に帝を械繫して、京師に送りしに、程濟徒跣にしてしたかひけり、御史鞠問の上、其僧は詐問をもて論死せし程に、帝はさてやむへかりしを、帝南歸の思ひあるによりて、自から其實を白狀せられければ、朝廷舊宮人に命じて探求めしむるに、建文帝たる事無疑に決定せしかは、詔ありて帝をむかへて西内にいれしむ、程濟これを知りて、今日始て臣か職を終ぬとて、終に迹をくらましてのかれさりぬ、その帝に從て出亡してより、あゝに至て三十九年の間、艱楚をなめて、始終つさまとひ、ふたゝひ帝を宮中にいれし事、其貞節の堅きをいふに、古今いまたさかさるとあるなり、狐趙か文公にしたかひ、寧俞か成公に從ひしには、はるかにまさりぬへし、是をもていは、一時殉難はやすく、程濟たる事は難し、孔子のいはゆる其知には及へく、其愚には及へからずとは、是等の事をや申へき、帝すてに宮中に入しかは、宮中の人老佛といひける、つゝに壽をもて終られけるとう、これも古今にためしなくいとめ

つらしき事なり、
◎手折手にふく春風

手折手にふく春風

日かす経て繼て講會ありしに、講はて、翁、前日節義の事を語り候しか、跡あておもひ候へは、いまた申のこして候前日申つる事どもに考て見給へ、盛衰榮枯は世の常なり、るれによりて志をかへぬは、是又士の常なり、もし時のもやうにつきて覺悟を變し、世話にいふえりもどにつくやうにては、なにをもて士と申侍るへき、

水邊楊柳綠煙絲、立馬煩君折一枝、
◎有春風最相惜、
◎感勸更向手中一吹

あれ唐の楊巨源か楊柳の詩なり、此三四の句意婉にしておもしろく覺侍る、よりて其意を翁かぞめる歌に、

なれてふく、名残やれしき、青柳の、手折し枝を、したふ春風、

楊柳の人にとられて、はや木を離れたるとて、春風のうれをよろにしてふきなは、いかに情なかるへきを、おを其手折手をさりやうて、おしみかほに吹ある、いとやさしく覺へ侍る、古より忠臣義士の盛衰存亡をもて心をかへぬにたどへつべく候、翁むかし源平盛衰記をよみて、源氏の士には渡部瀧口鏡、平家の士には彌平兵衛宗清か事を感じしか、又東鑑にて伊東九郎祐清で、前には祐泰とす、今考るに伊藤九郎、兄河津三郎を祐泰といふ九郎を祐泰といふハ誤なり、か事を見て感しけるまゝ、三烈士の傳を半撰ひ置しか、いまた稿を脱せ

さる内に、池魚の災にかゝり、其後ふたゝひ草を起す事もなく打過し程に、今は其文をば跡もなく忘侍る、渡部鏡は、源三位入道頼政か所従の士には第一のものなり、然るに治承年中、頼政高倉宮をすゝめて兵を起せし時、京師を急に發して、倉皇として三井寺へ赴しか、打忘てやありけん競にかくとしらせさりし程に、競しはらく猶豫して家にありしを、平宗盛聞て、日ある競か魁偉なるを見て、己か所従にせまほしく思ひしが、頼政か親臣なれば、請へきやうもなかりしに、おのたひ競ひとり都に残りしとききて、六波羅に參れと人していはせければ參りけり、宗盛對面して、汝今より我につかへは、入道の恩にはまさるへしとて、小槽毛といふ馬に具鞍をき乗かへの料とて、遠山といふ馬を引うへ、黒いとおとしのよろひ胃まで皆具してたひけり、競かしおまり給りて、はくろ笑ひして罷歸りぬ、一族家人打よりて、入道殿是程の大事を思ひたち給ふに、ひとり取のおされしは、眞實に遺恨なり大將のかへうちたへかたらひ給ふはいなみかたし、時の花をかさしにせよといふ事もわれはたゝ此まゝにてあれかしといふを、競いやとよ勇士の義さはあらずとて宗盛よりたひける鎧着て、小かすけにのり、郎等七騎打つれて、三井寺へとて打出しか、六波羅の門前を通りし時、馬にのりなから門の内へのうきつゝ、高聲にいひいれけるは、競ころ只今下し賜りし馬にのり三井寺へ罷越候、御眷顧を蒙り候へども、三位入道の恩忘れかたく候へは、此度死をともにいにて候、御門前をむなしく打過んははいなく候へは、御いとまを申候とて、三井寺にいたり、頼

○手折手にふく書風

百十八

政と一所にありしか、其後宇治橋の合戦に、いささよく討死してけり、彌平兵衛宗清は平頼盛の士なり、平治の亂に、頼朝幼少にて頼盛の家に囚れしを、頼盛の母老尼、清盛に乞て死を救ひけり、其時宗清頼朝を朝夕にいたはりしか、平家西園へ落し時、頼朝かねて頼盛に通問して、疎意なきよしをいはせける程に、頼盛獨一門に叛て都にと、まりける其後平家いまた亡ひすして西海にありし時、頼朝舊恩の謝せんために頼盛を鎌倉に招きしか、宗清をも必召具せらるへきよしをいひれおされければ、頼盛關東に赴くとて、宗清にいさつれて下らんといひしに、宗清いひけるは、頼朝某に下れと候は、定て昔のなしみを思ひいて、所領引出物などして、ろのかみ扶助せし勞を報せんとの事にてあるへく候、今更源氏に諂ひて、其陰により候はんは、西海にある朋友どもの承る所も口惜ころ候へ、君はかくて都に御案堵しおはしまし候へとも、御一門はいつれも西海に流落し給ひ、日夜やすき御心もあるましく候、こゝにて思ひやり奉るも痛はしくころ候へ、鎌倉に御越候て頼朝某かことを尋られ候は、折ふしいたはる事あるよしを仰せられて給り候へとて、鎌倉へは行さりけり其後西海へ下りけるにや、其終をしらす、伊藤祐清は、伊藤祐親か第二子なり、頼朝伊豆に流論の時、祐親に依てれいせしか、祐親禁衛の役に當て京師に赴し間に、祐親か女と通して一男を産す、祐親瓜期に至て京師より歸し後、是を聞て大に怒りつゝ、其男を殺しけり、頼朝をも害せんとするを祐清かなしみ、頼朝をよかく愛護し、ひろかにのかれさらしむ、其後頼朝兵を起して伊豆より

相模へ赴し時、祐親平家のみかたとして、大庭景親等と石橋山おいたりて頼朝を追襲けり、其後頼朝すでに東國を平定し、自から大兵を率て駿河に至られし時、祐親を生捕て至しを、其罪を決する迄、祐親をば祐親か婿三浦義澄に預られ、祐清をめし出して、贖賞を行はれんとありしに、祐清た、御恩にははやく殺され候へ、父囚はれ、其子勳賞せらるゝ法や候、もし我を殺し給はすは、平家に歸すへしといふに、されはとて我を救ひし者を殺すへきやうなしとて、ゆるして放ちやりけり、祐清うれよりすくに京師に奔りて平家に属し、後篠原の合戦に、つゝに討死をとけり、此三人時代も大かた同しく、志節も相似たり、ろの清風高義、源平の間に求るに、其類すくなくおほへ侍る、さて元弘建武の亂に至て、天下板蕩の間、死難死節の士、限なく相見へ候中に、翁かねて安藤左衛門聖秀か事を感じて落涙しける、聖秀は北條高時か臣なり、新田義貞の妻の爲には伯父なりしかは、鎌倉すてに陥る時、彼女房義貞の文に我文を添て、ひろかに聖秀かもとへつかはしける、聖秀は高時か將として新田の兵と戦しか、郎等大かた討死し、聖秀も薄手あまた負て引かへしけるか、高時すてに屋形に火をかけて、東勝寺へ落けるといへは、御屋形の焼跡には、討死のもの多く見ゆるかと問けるに、一人も見へすといふを聞て、口惜き事かな、いさ殿はら、とても死なん命を、御やかたの跡にて心静に自害せんとて、百余騎を相從へて、やかたのあとへ赴しか、今朝まで幾をならへて、さしも奇麗なりし大夏高牆、忽に灰燼となりぬるを見て、聖秀感慨にたへす、涙をさへ憫

○手折手にふく書風

百十九

然として立たる所へ、彼文をもて来りぬ、是を披き見れば、鎌倉の有さま、今はさてどころ承り候へ、いかにもしてごなたへ御出候へ、身にかへても申有むへしとあり、聖秀是を見て大きに色を損して申けるは、われ今まで主恩に浴して人にしらるゝ身か、今事の急なるに臨て、降人になりて出なは、豈耻をしりたる者といはんや、されは女性心にてたとひかやうの事をいはるゝとも、義貞勇士の義をしられは、さる事や有へきと制せらるへし、又義貞ごなたの許否を試むためにいひこさるゝとも、北の方は我かたさまの名を失はしと思はれば、かたく是を拒るへし、只似たるを友とするうたてさよと、一度はうらみ一度は怒り、彼使の見る前にて、其文を刀に拳り加へて、腹かき切て死にける、嗚呼聖秀いかなる人うや、義氣の勇壯、志操の潔白、是に過たる事やあるへき、さて近代にては、武田勝頼の臣、小宮山内膳か節義ころ、最感嘆するに餘りあり、内膳は勝頼近習の臣たりしか、天正年中の事にや、内膳人と争訟しける事ありつるに、勝頼謀人の言をもちひて、内膳か不直に決せしかは、内膳罪なくしてなかく逐しりうけらるゝ程に、是非なく家に蟄居して數月を経けるか、織田の兵甲州に亂入して、勝頼敗北し、故府をすて、温井常陸介を先とし纒四十二人の兵と、天目山中に奔るとさこへしかは、内膳身をもて赴急しか、道にて追付けり、ささの内膳と争ひし者、並に讒せし者を問けるに、いづれもどくに逃去ぬといへは、内膳慷慨としてかたへの人にひけるは、君我をもちひすして棄給ふに、今出て其難に死せば、君の明を損するに似たり、又死せ

ぬは臣の義をやぶる、よし君の明を損するとも、臣の義をは傷らしとて、四十二人同しく國難に殉ひけり、此難に甲州の士、皆勝頼を叛て逃去しに、四十二人はかり、傾覆流離の間につきまといて、いさゝか二心なく、國難に殉ひしは、いつれも節義の士と申へし、中に内膳は、讒をもて宛枉にわひしをも怨す、従者の列にもあらぬ、蟄居の身として、外より來て赴難し事、其忠烈はるかに温井等か上にあるへし、武田滅亡の後、東照宮内膳か忠義をふかく感じ給ひ、其子なくして祭祀の絶るを哀み給て、内膳か弟小宮川又七郎をめし出されしか、其後小田原陣の前、武職の人をさきはめられしに、又七郎をもて御長柄槍奉行お仰付られける、其時内膳か勝頼に對して忠義ありし事をくはしく仰たてられ、誠に武士の手本とおはしめす、又七郎いまた弱年なれども、兄内膳か忠義を感じ思召によりて、重き職を命せらるゝよし上意なんありけるとり、誠に死後のめいはいはく、忠義の驗と申へし、

烈女種なし

翁むかし加賀にありし時、ある人のいひしは、ねよろ人の諸悪、大小によらす、改めぬれば、世にいひわけあり、舊惡は少しも疵にてなし、たゞ改めてもいひわけのたちかたき事ふたつあり、士の死ぬへき場をはつしたると、ぬすみしたると、此ふたつは、一たひ其事ありては、一生の疵となすて、其人なかくすたりぬへし、しかれば士の家に生るゝ者には、男女どもに幼少より節義の事を常

にいひきかせて、忘れさすまじき事なりと尤なる事なり、然るにすへて婦人は柔順を専にして剛健
 をつとめずとはいひながら、士の婦女としては、此一ふしを忘るへからず、もし不慮の變にあはん
 時に、心よはくして節義を欠なは、日あるの婦行もいふにたらず、古より衛の共姜を始として、歴
 代貞節の女世に絶せず、漢の陳孝婦魏の令女か事を、朱子の小學の書にも載せたまひしは、ふかき
 心あるへし、それにつきて衛侯の夫人南子か、忠臣不為三昭々一信上節不為三冥々一情上行といひ、令
 女か仁者不以下盛衰一改上節義者不以下存亡一易上心といひしあり、婦人の言にも似す、耳をおどろ
 かしぬ、聖賢の訓といふとも、是には過ましく覺ゆ、されど令女は言にはちす、其行相叶ひたれば
 、元よりいふへきやうなし、南子は是ほどの見識ありきから、淫行あるよりいと、罪れもく覺ゆれ
 おゝに又丈夫にもまざりて貞節世にすくれたるは、倭漢よく似たる事あり、漢の平帝の皇后は、
 王莽か女なり、父莽漢の臣として、天下を篡ひ、平帝を弑せしか、いく程なく漢兵起て、莽を攻滅
 してけり、皇后宮闕の火に掛るを見て、我なにの面目ありて漢兵に見ゆんやといひて、自から火に
 投してはるひ給ひけり、我朝にては、長岡越中守忠興の夫人明智光秀か女なりしか、父光秀織田信
 長の臣として、信長父子を弑しけるを、羽柴秀吉、西國より軍を還して、光秀を滅しぬ、其後關原
 の亂に、忠興大軍に従て關東に下られける、其跡に石田か兵忠興の館に來て、夫人をとらへかかん
 としけるに、夫人われ一命を惜て、夫家の辱を貽さし、敵のこみいらぬ先にとて、自殺して果られ

ければ、其義にすゝめられて、留守の士、小笠原勝齋河北石見、館に火をかけて、おしならひて腹
 をきる、何の局といふ女房、其外三四人、手に手を取、火中にとひ入て死にき、今に至て世にめつ
 らしくいささき事なりといひ傳へ侍る、かゝる大逆臣の女に、かゝる貞烈の人ありける事、上千載
 をへたて、孝平皇后にならふへし、其外には倭漢ともに、たへて類なき事なり、されは名將に種
 なしと申侍るか、翁は烈女にも種なしとこそ思ひ候へといへは、ひとりの客、いやろの種なきかた
 ねあるにて候へし、此節義の心は、仁義の性を種として生し候、此性なくして氣習よりしからしむ
 る物にて候は、或は勢力の如く、丈夫にはありて、婦女にはなく、或は威儀の如く、良家には餘
 わりて、卑族にはたたらざるにあらむかし、今本性を種として生する故に、父祖にもよらず、世類に
 もかゝらず、善人の子にも悪人あり、悪人の子にも善人あり、男女貴賤にもよるへからず、父祖親
 戚にもよるへからずといふを、翁打感して、是こそ正當の論にて候へ、翁か申は、人類の種あるを
 知て、天性の種あるをしらざるにて候、但それにつきて候ては、婦女又は卑賤に節義の行あるは甄揚
 して、本然天性の種あるを證し、又は下賤のつたなき婦女等にさへかく節義あれば、士大夫をもて
 ろれにおどるへきやはと思ひ候は、人の義心を興起するにもなり候へし、こゝにろの人からにも
 似す、奇特に覺へ侍るは、源義經の妻静か事にて候、静は京師にて名を得たる舞妓なりしか、材色
 をもて義經に寵せられけり、義經都を落し時、静も吉野までつきたまひしか、それより都へかへり居

しを、頼朝鎌倉へめしよせて、義經の行術をとばれけれども、吉野より未はしらぬよしを申す程に、さて放ちかへさるへかりしを、義經の子を懐妊してありける程に、誕生する迄とて、しはらくとめられしか、兼ねて舞曲の藝世に隠れなかりければ、頼朝の藝を見はやとて、鶴岡の祠にてまはせられける、静心うき事に思ひて、再三辭しけれども、しるて命せられしかは、いなみかたく舞けり、頼朝時といひ、所からといひ、静必祝歌をこころ唱ふらめと思はれけるにさはなくて、しつやしつ、しつのをたまき、くり返し、昔を今になすよしもかな、又をしかへして、

吉野山、峰の白雪ふみわけて、入にし人の、あどろ戀しき」とかきてければ、頼朝怒て、今日の事なれり、時世を祝すへきに、叛逆の義經をしたふこと奇怪なりとて、すてに罪にも處せらるへかりしを、夫人政子のわひ言にて事解にけり、静うれを替芥ともせず、程へて都に歸りつゝ、一生世に出でず、身を隠して終りけり、かの草も木もなひさし威に恐れす、勢に屈せず、始終志をたて、義經に負かさりし事高館にて殉死せし輩とも並稱すへし、ちかきころ、京師の醇儒中村惕齋か撰ひしとかやいふ、倭漢貞烈の女を載し姫鏡と題せし書に、是をいひ残しけるころ遺恨なれ、是は静娼家に生れて、出所たしからざる故なるへし、それはさる事なれども、名教を裨くるためには、是等をもすつましき事と、翁はかねて思ひし程に、今各へも申つるうかし、詩にいはいく采討平非無し以下陸この謂なり、

澤 橋 か 母

加賀の前田家より、毎年八丈島浮田家子孫のもとへ、費用のために、小金幾星、丹藥幾包、其外遺細の物件、定數ありて目録の如く、公けの官吏に付して、八丈か島へ達せしむ、翁加賀にありし時、其いはれを故老に問に、澤橋兵太夫といふ者より起りたる事なり、豊臣太閤の時、前田家の先祖、大納言利家の女を、太閤養女とし、浮田秀家に嫁す、是秀家の夫人なり、然るに慶長年中關原師散して後、秀家は石田方の渠魁たれば、死罪に處せらるへかりしを島津家の乞い哀によりて、死一等を減して、秀家并に其子八郎、八丈か島へ竄逐せらる、八郎に乳母ありけるに是はとくに逃去ぬ、其介の女房といふ八郎か幼少にして、乳母に離れて遙々島に赴くを、ふかく泣悲しみ、徒跣にて官廳に詣り、しきりに八郎につれて島に到らんと願ひけれども、制禁ありし程に、是をゆるさず、女房此上はなにの爲にいきてあらむとて、すてに自殺せんとするを官吏おさへて、さて議しけるは、此女房を目前にて見ころしなは、後に上にさこぬん時、不便にねはしめして、など窺さりしどもし御とかめもありなんか、只窺ひ奉りて御旨にまかするにしくはなしとて、窺ひければ、女なればくるしかるまし、島へつかはし候へど、命下りしかは女房限なくよろこひて、秀家父子につれて島へ赴きけり、其時三歳になりし子を抱き、浮田家の夫人のもとへ来て、自は八郎御曹子の御事、餘りいたはしく候へは、御供申候て島へ参り候、此御奉公を忘れおはしませすは、此子を御側の人へ仰

付られ御うたてさせ、人になして給り候へといひすて、さりぬ、夫人其子を常に膝下に置いて撫育し、此子か母は身をすて、我子八郎か先途を見届し者なれば、此子をはわか子とねもふへしとて、所生の如くせられしとなり、其子の父はいかなる者にかありけんしらす、氏は澤橋にてありける、夫人後には加賀に到り、前田家に依ておはせしか、秀家備前の國守たりしによりて、加賀、國人夫人を稱して備前君とす、今に其墓加賀にあり、夫人在世の時、澤橋氏か子成長して、仕へき程になりしかは、前田家へ召仕はるゝやうにふかく付託せられしかは、彼家にて所領給り、澤橋兵太夫何かしと名乗けるか、たゞ、明暮母の事をのみ思ひて涙をおとしけり、いく程おく遁世の願あるよしにて國をさり、形をかへて僧となり、いつかたにありとも行衛しれさりけるに、元和のころにかありけん、將軍家御上洛ありて、二條の御城へ入せらるゝ時、ひとりの僧御駕輿ちかく訴狀を捧げ、るを、御供の中より抑へけれども、さかさりける程に、討てすてんとしけるを、御輿の内より御覽ありて、沙門を聊爾なる事いたし候な、訴狀うけ取候て御跡より召連て参り候へど、御直に上意あり、さてもと前田肥前守家來のよし申によりて、前田大和守、御上洛の御供にてありしに御預ありて、後程なく江戸へ還御ありしかは、大和守召具して江戸へ下りぬ、其訴狀の趣は、某三歳の時、母にて候もの、主家の爲に、八丈か島へ罷越て候、母を島にさし置、其子として跡に残り居候ては、いきてあるへうも覺へず候、御慈悲に母と一所に島へつかはされ下され候へどの事になんありける、官吏

上の御旨を奉りて、思ひとまるやうに再三寛諭ありけれども、御うけ合申さず、所詮思ひ切たる容色なり、上にも其志を不便におはしめさるゝにや、かさねて仰出さるは、島へつかはさるゝ事は、御大法におゐてならせられぬ事なり、島より母をめし返さるへし、島より歸るやうに、文にて申おし候へどありければ、兵太夫申やうありかたき御事に候、たどへ申こし候ても、母中へ承引仕ましく候、されども仰出されにて候まゝ申こし候はんとて、文かきつつかはしけるか、兵太夫申ことく、母島にて其ふみを見て大きに腹たち、我汝か三歳の時、御主の先途を見届けんとして、上へ奉願て、一度こゝへ來りし者か、今汝を見んとて、御主をすてふたゞひ歸るへきやうやある、いと口惜き事を聞ものかなかさねて申こし候は、返答にも及ましといひこしける、官吏兵太夫を公廳へめしよせ、是程に仰出されてかなはねは、上にもなさるへきやうなし、其かはりには、外に願ひ奉りたき事あらは、御かなへ下さるへきよしひ渡しければ、兵太夫かしまりて卑賤の身として、上をはかり奉らす所存を申上候に、重く御取わけありて、是程にまで仰出され候に、此上に私の所存をたて申へきにも候はず、たゞしひとつ願ひ奉り度事ころ候へ、前田家は浮田と由緒ある事にて候へは、彼家より、毎歳助成の金井に入用のもの承り候て、永代島へさしこし候やうに公命下り候は、限なき御恩澤にて候へし、しからは母もよろこひ申すにてあるへく候、某母への孝行このひとつにて候、外に願ひ奉るへき事はなく候よし申上ければ、其事下りて朝議ありけるに、是はくる

しかるまじき事なり、されど金も員數多くはなりかたし、其外の物も、品によりてならぬものもあるへし、所詮僉議して、其員數其物品をきまめて、前田家へ申渡し候やうにどの事にて、今に至るまで、毎歳加賀の家より、定めぬ如くしためて官へ付し、官にて其物件を點檢し、鳥へ送り届けらる事になりたり、此事四方へきこへしかば、列侯の家より争て徴辟せしかども、兵太夫我此後仕官の所存なし、但加賀の家は、舊君の事なれば、是は辭すへからずとて、加賀へ歸參しけるか、程なく病死し、子なくして家絶にける、翁古今を考るに、母子たかひに忠孝の道を盡したる事、是に類すへきはなし、一奇事といふへし、况や匹夫をもて萬乘の尊を動かじ奉りし事、至誠の致す所とも申へし、然るに是程の事を、加賀にてさへ今は沙汰する人も稀なれば、其名世にあらはれずして埋るゝころ口惜候へ、さて上の御仁政は勿論の事うかし、よく下情を御察し、卑賤の義を御うたてなされしは、誠に有かたき御事なり、

御祖訓のごとく、國家の元氣を養はるゝの思しめしにてもあらんかし、淺智短慮の及へざるは、

天野三郎兵衛

他日繼て諸客來會せしに、翁いふやうは前日節義の事を申候つる、但節義は、事變によりてあらはれ候、もし平居無事の時にていは、廉潔耿介の士はと世に貴ふへき物は候はず、官職に任ずれば必成績をいたし、事變にあへば必節義をあらはす、常變ともに國家の用に立ものにて候、すへて智勇

ある士は、一人一職に任しては、一かど用にたち候へども、諸司の職を命するには、人からの廉潔なる士を撰ふへし、いかにとなれば、諸司には必同僚あり、其心廉潔ならざるは、權威を貪り、又名聞をつとむる程に、相うねまねは、必相おもぬるものなり、さる程に外はしめて相和すれども、己は互に相ふせく、うれ故智も勇も相さへられて、剛も剛をなさず、柔も柔をなさず、たゞ僉議かちにて、先格をおひ後難を招かぬやうに裁斷する迄にて候、いかてか國家におゐて推たちたる險を見るへき、よりにて諸事はかどらず、ゆきと、かぬ事もおほきうかし、永祿のころ、

東照宮參河に御座さされし時、御制法を定められ、高力與左衛門清長、本多作左衛門重次、天野三郎兵衛康景を三奉行に仰付らる、其ころ與人の諺に、佛高力鬼作左とちへんなしの、天野三郎兵衛といひしとち、とちへんなしは、左右遷就して一決せぬの俗語なり、此諺をもて考るに、高力はた寛仁にして、本多かあらしきにかまはず、本多はた、勇決にして、高力か慈悲にかまはず、天野は高力か本多か裁斷をうねむ心なく、たゞ道理次第にして、少しも己をたてぬと見へ候、これは三人ともに、人から廉潔にして、奔競の心なき故に、同職にあはせんともせず、又同職をおさへんともせず、互に面々の心のまゝにふるまふと見へし、うこそを御覽なされ、同職に仰付られしか始は思ひくにて、一致せぬやうに見へしに、此三人にて國政たゞしく、諸事治まりし程に、御目かねのつよき事を、人々感服し奉りしとなり、高力本多か人からの事は、くはしくしらす、天野三郎兵衛は

慶長年中、駿州興國寺の城主として、三萬石を領しけり、領地の竹をさらせて、營作の爲に積置
 て、足輕三人をして守らせけるに、御領田原の郷民、此竹を盗取しかば、番をせし足輕見付て盗一人
 をさら殺す、殘黨逃有て、代官井手某に訴ふ、井手郷民の手前を吟味せざる事はあるまじきか、竹
 を盗む事たしかならぬにやありけん、人を康景かもとへつかはし、御領の民を、こなたへ斷なくし
 て卒爾に殺す事重罪なり、速に其足輕を誅すへきのよしをいひやりければ、康景盜を殺すは古今の
 法あり、なにをもて罪とせん、其上かの足輕私に殺すにあらず、康景下知してころさしむ、もし此
 事誤にならば、康景罪に行はるへしとて、少も許容の氣色なし、井手其まゝにてはやみかたき故、
 郷民實は竹をぬすます、無實の罪にてころさるゝを、康景己か足輕に荷擔して、誅せざるのよし言
 上しければ、康景かもとへ下手人出すへきのよし仰出されけれども、前のことくいひて御うけ申上
 す、

東照宮こしめして、康景におゐては、不義の所爲あるへからずもしくは人のいふに欺かるゝにや
 あらん、後日に御糾問ありて、實否を定めらるへきのよし仰出されしか、本多上野介正純を康景か
 もとへつかはされて、たとひ此事理なりとも、一たひ仰出されたる上にて、其通に仰付られねば、御
 威光も輕きやうに聞ゆる間、三人に圖をとらせ、其内一人とりあたりたる者を誅ししかるへきのよ
 し正純申されしかば、御威光輕くなるゝある上おはとかう申上るに及はすとて、御うけ申上にける

さて申けるは、理をまけて罪なきものを殺し我身を立るは、勇士の本意にあらず、所詮身を退る
 にしかすとて、いつちともなく逐電し行方はしれさりけり、其後
 台廟の御時に及て、ある人駿遠わたりの地にてかありけん、其所はたしかに聞す、一人の仙人とお
 はしきに行あひしに、其仙人今は誰の代るといふ、今の君は
 權現様の御子御代を繼せ給ふといふ、

權現様とはたか事うと問ける程に、くはしくいひさかせければ、その時よく合點して土井甚三郎と
 いふものありしか、いまはいかゝありぬると問けると、甚三郎は大炊頭の事なり、此事世に沙汰
 ありて、其仙人は大かた天野三郎兵衛にてあらんといひけるか、康景駿河にありし時、甚三郎すて
 に大炊頭といひしに、かの仙人甚三郎といふを見れば康景にてはあるまじといふ人もあれど、古人
 は眞率にて、いつもよひつけたる名をいふほどに、大炊頭わか名をよく覺へて、かくいひたるに
 もあらんかし、よし其仙人は誰にもせよ、嗚呼康景潔白の士なるかな、無辜をころして、己か身を
 立るは、非義なり、ころさねは、上意にむむくに似たり、とにかくに世にありては、身の一分たゝ
 すと思ひきりて、三萬石の祿を棄て、歸をもちぬるころ、世にたくひなき事といふへし、

結解の何かし

されと潔白なる武士も、世にたへすあるものなり、寛永正保のあろにかありけん、江戸芝の天徳寺

境内のわき寺に、常念佛とて常にたへす念佛を唱る所ありしか、ある夕暮に、住僧外へ出るとて見れば旅人と見へて油單つゝみ頭にかけて、其さまいやしからぬ人の、門前にたゝすみてありしか、やゝ久しくして歸るまでもどの所にありし故、住持あやしみて、何人にて候や、内へ入てやすみ給へといへば、其人いふは、御寺の念佛の聲いと殊勝に覺へ候程に、こゝに時を移して居るにて候、左候は、御茶ひとつ給らんとて内へ入ぬ、住持いつかたよりいつかたへ參られ候ふやと問ければ、某は奥州邊より出たる者にて候、江戸よひかし知たる者の候て、遙々尋參り候へども、年久しき事して候故、其人の行術も今はしれ申さす候、是よりいつかたへなりとも身をよせ候はんとて存し候へといふを、住持さして、はや日も暮て候まゝ、こよひは是にて一宿いたされ候へとてとめけり、翌日住持いひけるは、御身の落つき所もいまだ定まらぬと聞へて候、其間はいつ迄も、御宿いたに申へし、ゆるくと寺に御逗留候へといへば、かたしけなく候とてとまりけり、さてなにくれと物かたりするに、ふるき事など覺へて、たゝ人とは見えざる程に、天徳寺の和尚さして、後は本房へまねきて、ねんころに扶持し置つゝ、寺中の事をまかせしか、残る所もなくよく取さはき、衆僧のしまりにもなりしかは、簡要の人とてたつとひあひけり、其あるある國主の、退休して居るゝ人ありしか、世に年たかく、ふるき事をも覺へて、常に傍にゐて伽にある人あらは、俸祿も厚く、國寶のあしらひにて召抱へむとて、尋求られしに、此寺の檀越、この人にしくはあるまし、

の事とて、この人に告げれば、御志はかたしけなく候へども、某事奉公の望はなく候、今までは申さす候へども、かく御懇意の上はつゝみ申へさにも候はずとて、うゑにて始て名乗けり、それ迄は寺にてなにとか名をつけておりけん、それはしらす、某は蒲生氏郷の家にて、結解の何かしと申者にて候、蒲生の家はろひ候てより、他家に腕くひをにきる心なく、乞食候てなりとも一生をおへつゝ、行倒るゝまでと覺悟いたし候つるに、存知もよらす寺の御恩になりて、今はたゝ此御恩をお報しかたかく候へとて、九戸合戦の時、其外にも氏郷より給りし感狀、其後蒲生滅びて、方々諸侯より招きし書狀とも取出て、座中の人に見せて、もはや是も無用のものにて候とて、火にて焼すてけり、かくて歲月を経し程に、明曆丁酉のとし、江戸中大火にて天徳寺も延焼しけり、結解たゝ某にまかせられ候へとて、和尚をはしめ衆僧をも立のかせ、わか身ひとり跡に残りてかけ廻りつゝ、佛像佛經、其外諸道具ひとつものあらすのけさせ後、もはや思ひのこす事もなし、汝等ものき候へとて、下邊男までもことゝくのかせけり、さて火焼通りてのち、堂間の焼あどに、一人凝然として、手を拱し結跏趺坐して焚死してありけるを見ればかの結解なりけり、寺中の上下、涙をなかしおしみあひしとる、結解いつまで寺のわつらひとなりて存命せん、はいなき事におもひしかども、久しく寺の恩を受ける故、なにとろ今一たひ恩を報して、ともかくもならはやと思ひしに、幸火災に付て、寺の爲に身をすてゝ、一かどの奉公せし程に、もはや是までと思ひてころ自からは

死ぬらめ、其心を思ひやるに、いささよく覺へ侍る、又ちかきこる一人の獨行の士あり、翁わかき時世に沙汰せし事なり、阿部故豊後守忠秋の家にて、物頭をつとめし者のよし、姓名をは今忘れり、何とて子細ありけるにや、忠秋へいとまを取て、江戸八丁堀にて、町の裏屋をかりて住居せしか、年を経るにしたかひ貧困して糧も絶る程に、家主見かねて、朝夕のたへ物つゞけ候しか、病氣つきけるとて、打臥して外へも出てすなりぬるもへ、家主人をつかはま、粥などやうのものもたせ贈りけれども、不食の病とて、るれを辭してうけす、戸をさして人の入來らぬやうにせし間、家主日々戶外より病を尋けるに、始はいらへもしけるか、後はいらへもなかりし故に、近隣のものなど召つれ、戸を破り、内へ入て見れば、具足櫃によりかゝり、膝の上に大小を横たへて、すのぶの上にも一枚敷たるに坐して終りけり、傍に遺書一通あり、披て見れば年來家主の恩を忘れぬよしをししおき、寺へのつかはし物并に家主へ宿代のいまたすすして残りしを、此金にて引取給り候へて、遺書に金を添て残しおきけり、さて具足櫃の中には、己の刻はかりにかゝりやきける鍔一領皆具のまゝにて、黄金三枚いれ置けり、大小のしたても、ふるくころわれ、皆金おしらへのまゝなり、さう衣服は着けし物のみにて、其外鍋釜等のものひとつもなし、百日にも食物をしたゝめたる氣色と見へざりき、此事私にて決しかた、時の町奉行所へ申出ければ、其者の遺書のとく沙汰いたし候へとの事にてありける、後日に忠秋もさかれて、さては餓死しけるよな、不便の事なりと申されし

となり、世に申傳る佐野源左衛門常世か事、なに、出ける事にかたかならず、或人はは太平記北野通夜物かたりの段に見へし、攝津の國難波の浦の老尼の事を取直して、造り出したる物なりといひし、さもあらんかし、るればるれにもせよ、此餓死しける浪士などこそ、今の世の常世ともいふへけれ、上に御大事あらは、一番に馳參るべき事疑なし、されど昔の常世は、ふたゝひ世に出しか、此人はむなしく餓死して果てけるころ、其身もさう無念に思ふらめ、かやうの人、世にうつもれて、語り侍る人もなし、なげかはしき事なり、

二人の乞兒

近世是はと風俗衰へて、利欲にさかしけれども、人の性もと善ある程に、族姓にもよらず、ならはしにもよらず、乞食体の者にも、はからざるに義理をしろの心あるうかし、朱子小學の書に、幸茲乗弊、極て天問と墜といへるは、信にして疑ざる事とこそおもひ侍れ、此十年前、享保癸卯の歳の十二月十七日、江戸室町の商人、越後屋吉兵衛といふ者の手代市十郎、諸方の買置の金請取て歸りしか、金三十兩入たる袋ひとつ見へさる故、さためて途にておとしたるものにてやあらん、もはやあるまじきはおもひながら、もと來し路を段々に尋ねありく程に、ある所に乞食一人ありしか、見どかめてなにを尋候や、もし金をおとさるゝにて候はずやといふをきいて、市十郎うれしくて有のまゝに語りければ、されはとよ我等拾ひ置て候、其主のたつね來ぬ事はあらしと、るれを待てて

かさき程より此所に出るにて候、いよ／＼慥なる事承りて、たかひなくは渡し候へしといふ、市十郎金の員數、又は中にある證文などのやう、一々いひきかせしにさては疑しとて、取出し袋のまゝにて渡しけり、市十郎餘の事に、さてやみかたくて、内五兩取出して、是は責てこの得分にせられよとてあたへけれども、中々受るけしなく、市十郎いひけるは、此かねはなき物にきかめ置しに、ちよの志もへにころ、ふた／＼ひ手にも入れたれ、然るをのあらす我物にすへきにあらす、違て受てくれ候へといへば、よく考へて見給へ、其五兩をもらふ意得ならば、三拾兩を返し申へきや、もとより自分のよくにて捨て置たるにてなく候、定ておどしたる人、主人のかねなどならば、さる難儀に及はるへし、他人に拾はせなば、其落せし人にはふた／＼ひ返るまし、さらば我等拾置て、其人に返さまく思て、拾置たるにてころ候へ、ちよもとへ渡し候へは我等か志通りて候、さらばいとま申候はんとて、其ま／＼ちよをさりとて、見か入りもせて行けるを、市十郎跡をしたひて取あへす、懷中より金一星取出し、けふは寒氣もつよく候、歸られ候は、是にて酒をもとめてたへられ候へとてあたへければ、是は御志にて候ま、申受候て、是にて御酒給申へきとて、ふれをば受て立わかれる、名を尋ければ、名は八兵衛とて、車善七が手下の乞食のよし申候、市十郎宅に歸りて、主人吉兵衛にくはしく語りしかば、吉兵衛聞て感涙にたへす、なにとう右の五兩を八兵衛につかはしたし、明朝早く善七か宅迄持参し、善七にも申させ、八兵衛に合點いたさせ、とかく受候やうには

からひ候へとて、市十郎に手代頭をさしうへつかはしける、さて善七かもとへ行て尋ければ、其八兵衛と申候乞食は、昨夕いつくにてやらん、金一されもらひ候とて、善七へも見せ候しか、なかまの乞食ともよひあつめ候て、ちよの金をもて酒肴もどめ、人にも給させ、其身もたへ候しか、たへつけぬものを多たへ候か、食傷いたし候か、今晩急死いたし候といふを聞て、市十郎おどろき死骸を見と、け善七に此死骸もらひたく候、かまへて粗忽に外へ移すへからすと堅くいひ合せ、さて家に歸り其よしを吉兵衛にいひきかせければ、早々人をつかはし死骸をうけ取、右の五兩のかねをもて、本庄無縁寺にて厚く葬りしとなん、吉兵衛も義に感ずる事商賈には奇特といふへし、日ころ加賀侯家の用をさして出入する故に、手代市十郎ちよの月の廿日に加賀の邸へ來て、かの家の役人に始終語りしとて、翁にさかする人ありき、世に是に似たるやうの事ありと、折ふし人のはなしにきくといへど是程たしかなる事はさかす、よりてさ／＼たる通りを少しものこさす、各にも語り侍る、おもふに八兵衛たゝ人にあらす、いかなれば乞食の黨には入にけん定めてもとはいやしからぬものもありしか、孤貧さはまゐりて、家もなく乞食してありく程に、外の乞食と一例になりて、是非なく善七か手下に屬しけるにもあらむ、されはなからへて甲斐なき事とおもひしか、幸に金を得て酒肉をもどめ、火伴と觀會しける程に、是を限りとおもひて、自から喉などしめて死けるにもあらん、はかりたし、この八兵衛を士とし、又は人の上におくとも、權柄をもて人の物を乞求るやうの事は

決してすまじき者なり、されは世には名は歴々の士大夫とよはれて、實は乞食なる人もあり、此八兵衛は、名は乞食なれども、實は士大夫といふへし、又加賀の國に野田山とてあり、前田家先祖以來代々こゝに葬る故に、家中の諸士も死すれば其麓に葬らざるはすくなし、さる間中元には、家々より墓前に燈籠を具ふ、毎歳の事なり、厚祿の家ころ、假屋を造り、人をつけ置て守もすれ、其外は大かた夜ふくれはともし捨て歸りぬるに、下部の惡黨とも來て、火を打けし、蠟燭を奪取けり、側に乞食とればしき者、こもをかふりて臥し居たりけるか、それを見て、人の祖考のためとて墓にすゝめける物を、さやうに狼籍する事あるへからすと制しけるに、惡黨どももろとも罵て、こもをかふる身として、いらぬ事をいふ奴かなといひしに、うの乞食さゝて、各か今するやうなる事をせぬ故に、こもをかふるといひしと、齊の餓者の嗟來の食を食せざる故に、こゝに至るといひしに語意相似て、おもしろく覺へ侍る、此乞食辭令にもよかりなん、言簡にて意足といふへし、たゞいつもくり事のやうなる事なれども、古も今も、からもやまとも、節義の守りある人あれど凍餓にさへ免すして、溝壑に斃れて、其名も世にしられぬころかなしけれ、もとより幽隱の行を顯揚するは、吾徒の任なり、今物語せし結解の何かし、乞食八兵衛か類世になを多かるへし、翁かさかぬはいかせん、さゝてはいはざるに忍びす、昔我朝勅撰の和歌集を見るに、いやしき野僧妓女の類も、天子公卿と名を列するは、倭歌に尊卑の差別なし、是を倭歌の徳といへり、今翁か節義を語る

とて、良家名族の士に、乞食など逆を並へ舉てひとつに稱するも、其心亦しかなり、節義に貴賤のへたてなし、是節義の徳といふへし、各にもさかれ候て、翁か議論不倫也と思ひ給ふへからず

燈臺もと暗し

三伏の夏もはや半過行しある、人々すゝみかてらに燈臺の巷にとふらひ來けり、折ふし積雨新に露て、夕日梢にのこれるに、庭の竹樹露すゝしく、池の芙蓉風かほり、なよとなく見すくしかたき折からなり、諸客はしわしつゝ、勾欄によりて、詩歌を朗詠しけるか、はやものゝあやめも見ぬはかりに暮ゆけは、やかて内に入て翁にいと申さむといふを今しはしとあれは、さらに宵の間過る程こゝにありて、御物語承らんとて各座につきけり、しはらくありて濁もて至りぬるに、翁ふとおもひよりしまゝ、燭臺をさして、世俗の諺に燈臺もと暗しといふはいかやうの事にたとへていふにやあらん、をのゝいふて見給へとあれは、座客の中ひとりいひけるは、世に何事にてもあれ、外にはかくれなき事を其もとにてさけは却て分明ならぬやうの事にかく申ならし候、但我等か愚見にて是に道理をつけて申候は、孟子の道在邇而遠といふ意にもたとへはたとへつへし、人々に本を忘れて末をつとめ、近きをすて、遠きを求るは、常の事にて候、是を射る者の的にのみ志して、わたりの手前にある事をしらぬにたとへたれば、燈臺のもどくらさにたとへても同じあゝろならんかし、亦ひとり聞て、されは其事にて候、羅大經か翰林玉露に悟道といふ尼の作とて

盡日尋春不見春，芒鞋踏遍蘭頭雲。

歸來笑煞三梅花一嗅。

春在二枝頭已十分。

是も道のちかさに在て遠きに求るたとへなり、ひめもす山野に春を尋くらして、春はとくにわか梅の梅にある事をしらすといへるも、燈臺もどくらさの意にもよくかなひて、いとのおもしろく候へ、又ひとり、道のさはかりにも限らず、外の事にもあるへし、たとへは東晋の時、桓温三秦に打入しに當て、王猛來見しけるに、三秦の豪傑なにとていま一人も見へ來らぬと問しに、桓温か眼のくらさもしられけり、三秦の豪傑王猛に過たるものやあるへき、眼前に豪傑あるをしらすして、豪傑にひかふて豪傑を問しは、燈臺もどくらさにて候はすや、又ひとり、古より倭漢共に英主の遠畧をつとむるか、其威望遠く敵國に及へとも、まぢかく蕭牆のもとに敵ある事をしらすも燈臺もど暗さにたとふへし、近代日本にていは、織田信長關東關西の諸國迄手をのはし討したかへられしかども、手本にくらうして明智におるされし、燈臺もどくらさにあらずやといふを、翁さうて、すへて比喩の語は義理のとりやうにて色々に申さるゝ物にて候、此諺も各たかひに其義をつくされしにて、もはや此外はあるましく覺へ侍る、但各の申さるゝは、いつれも燈臺もど暗しをわしきかたにたとへらるゝにて候、翁は又此諺をよろしき方に取なしてき、度ころ侍れ、又一種の道理もあるへきにや、韓退之か短檠の歌に、長檠八尺空自長、短檠二尺便且光と作れること、短檠も長は燭のものとて、短檠は燭のものとあかるし、夜中に書とてみ字を寫すやうの事には、手

とを明らかにして其用をかなふる故に、短さを貴ふにて候へとも、さうとて一二尺の手燭にては、燭燭のものとてあかるくあるへけれ、此座上にてしてもくまのくらさを照しぬる事は難かるへし、まいて稠人廣座をいかにして照し申へしや、しかればもとあかるくしては遠さをてらし難し、遠さをてらすは必もどくらさのものとしへし、翁いつの比か關尹子を見侍りしに、吾道は處暗か如し、よく明中の事を區畫すといへり、關尹子は關令尹喜か書なり、尹喜は老子の弟子にて、道德經五千言も此人の爲にあらはせると也、今世に傳る關尹子の書は、大かた後人の作にて、尹喜に名を託したる物にてもあらむかし、されど老子の道はたしかに處暗を宗とするにて侍る、但老子の道にも限るへからず、平簡にも簡要とする事也、たとへはわか身くらかりにゐて、くらかりよりあかりを見れば、あかりの事のこりなく見ゆるものなり、わか身あかりにゐて、あかりよりくらかりを見ては、くらかりの事一切見へぬものか、されはくらかりにゐてあかりをみるやうに、己か智見をふかくひらめ養て、くらさより明らかなるを生するやうにすれば、其明悠長寛大にて自然に遠きにおよひなん、それこそ眞の明といふへけれ、もし己か材智にはこり、聰明を盡して、たゝ手もとのあかるきを專にせば、あかりにゐてくらかりを見るか如し、其明淺近短慮にて遠きに及ばざるのみならず、たゝ手もとの事のみ見へて、下手の碁をうつかことし、末の手は見へざる程に、毎々是非をあやまる事も多かるへし、こゝをもて聖人易におゐて、明入地中、明夷君子以莅衆用晦

而明どの給へり、古の聖王冕旒目を蔽ひ、陸績耳を塞くも、聰明の刀はやさをさらふて、晦さどもちひて養はんとなり、古より倭漢どもに大智遠識の人の、己か材智に倣て、好て自から用るをさかす、老子の良賈深藏若虚、君子盛徳若愚といへるも、けにさる事うかし、ちかきころ故板倉周防守か京師に留守たりし時、訴訟をさかれしに、己か材智のはやさり、聲色のうこきなば、我もそれに氣乗し、彼もそれに氣奪はれ、兩造の辭を審かにせず、雙方の情を盡さる事あらんとて、必障子をへたて、わざと手つから茶をひきなどし、たゞ心のちらぬやうにしてきかれしとなり、さすか近代の名人とはいひなからおのつから聖人の心にもかなへり、それ故曲直理を盡し、聽斷神に通し、人々畏服せざるはなし、いはゆる用晦而明なるにあらすや、今に至て世の談者傳へ説して口實とする事枚擧するにいとまゝならず、中にも翁か最感しおもう事あり、周防守ある時京の在家を通られしに、さる家お幼少の子出てあつひしか、あれ周防て通らるれといひしを、周防守馬上にて聞どかめて、我不肖といへど、上の御代官としてこゝにあれば、京中村間に住する者男女老弱をいす、我をかくおしくたしていふ事あるへからず、しかるに此家の兒輩かくいふは、常に家人の我をうらみてかくいふを聞馴し故なるへし、是は定めて子細あるへしとて、其家主の名をさかせて通られしか、翌日其家主を召よせて、汝先年何にても訴訟したる事やある、今尋ぬるは少しもさつかひなる事にてはなし、ありしやうに申へしといはれしかは、始はなにかと辭退しけるか、再三といはれ

て此上はかくさす申上候、それのともそれの月の事にて候、父の配分の事に就て、一類の者と争ひ候て訴へ候しか、其者無貨の事を申かけ候へとも、證人どもを多くこしらへ候て申出候故、御聽斷の上相手の勝に定まり候、其次第かやうくどくはしく語るを、下役人に命して、其年にあたりし御案をくらしけるに、すこしもたかひなかりしかは、其上にていふ、尋きはめて、是はたしかに某か聴あやまりたるなり、いと残念なれども、もはや年久しき事なれば、今更すへさやうなし、其配分ほどを某償て我過を謝すへしとて、自分の金銀を出して其者へとらせられしとて、是にてしるへし周防守己か威勢をつのらす、己か過失をかくさす、我は常に晦に處し明を衒はす、我は常に愚に處て智を先たてす、其心公にして私なし、誠に古今に有かたき明智といふへし、今是等をもて此端を考るに、燭臺はなかくしてもどのくらきにて、其明おのつから遠きにれよふ、君子の道は闇然として日にあきらかなるかことし、もし短うしてもとあかるければ、其明わつかに近うしてやみぬ、小人の道は的然として日にはるふるかあとし、此理をしめて、明かなるものは必もとをくらうすといふ心にて、燈臺もどくらしといふにもあらむかし、但此端の正意は各のいへるとく成へし、翁かいへるをば姑く一説にうなへ給へかし、さしも根もなき事に、あまりくはしき愈々かなとて翁微笑しければ、諸客かやうの事にも、翁の心のつげられやうとて周防の事にて候へとて各感しむへ

運慶の口傳

さて翁いひけるは、月は盈れば虧、花は盛なればちる、家語に子路持満の道を孔子に問ければ、
 明睿智守之^{明睿智守之}以^以愚^愚とのたまへり、翁か前にいへる明を晦に養ふも、聰明を十分に盡さしとなり、す
 へて物は十分につくすを嫌ふ也、なに事をするも七八分にして前をのさして盡さぬをよしとす、も
 し心ゆくまゝに一旦に残さず盡しぬれば、必後に悔みある物也、或人佛師運慶か口傳とて語しは、
 佛を作るには耳鼻をば先大きにすへし、もし耳鼻を十分能程に割れば、後に小さく見ゆる時に、大
 さにしたくてもかなはず、口目をば先小さくすへし、もし口目を十分よき程にあくれば、後にもし
 大きに見ゆる時に、小さくしたくてもかなはず、されは耳鼻を大きにし、口目を小さくするを第一
 口傳とするところ、是はもと韓非子に出て、宋の蘇頌かひひし事也、此木偶人を作る意得は何事にも
 あるへし、しはらく思ひつけたる事にていふに、曲禮に君子不盡人之歡、不竭人之忠、以全交也
 といへり、是等にてもしるへし、人の我爲に杯酒を催しあとして歡愛を篤うするを人の歡といふ、
 人の歡を十分にきはむる故に、あまりしたしくなれば、反て無禮にもなり、あまり興あらむとすれ
 は、反て無興にも成もの也、陳の公子完齊の桓公の爲に親愛せられしか、桓公其家よ就て飲れしに、
 晝迄にてはあきたらすとて、火をもてつけといはれしを臣ト其晝未ト其夜とて夜飲を辭せ
 しは、人の歡をつくさしと也、人の我爲に音問をかゝさすなとして心のみめやかなるを人の忠とい

ふ、人の忠を十分に頼む故に、すあしとゝかねは、必とかひるもの也、聖人易の恒卦におゐて、初
 六の九四に求望の心ふかきをいましめて、浚恒貞凶といへるは、人の忠をつくさしとなり、あゝを
 もて君子はかねて人の歡を盡さず、人の忠を竭さずして、人と始終交を全うするるか、もし國家
 の政にていふとも其理同しかるへし、いやしき諺にいふとく國の仕置は、すり木にて舛の底をまは
 すかことくすへてすみくすり木の行とゝかねところあり、其行とゝかね所、かへりて人のくつる
 き事のよけいと なる程に、久しうしておのつから行とゝく物也、然るを法令を嚴にして急に行と
 くやうにどするときは、終に行とゝかざるのみならず、外にさばり出來て騷動にも及ぶるか、
 易に王用三驅、剛禽といへるも、天子の獵は不合圍とて、網の三面ばかり張て一面を明け、禽
 のにけみちを残す也、其とく政事のおほやうにて、たゝ七八分程にして二三分を残すにたとへてい
 ふなるへし、詩にいはいはく彼有^{彼有}三不^{三不}獲^獲稱^稱、此有^{此有}三不^{三不}飲^飲、彼有^{彼有}三兼^{三兼}遺^遺、此有^{此有}三滯^{三滯}、伊尹婦之利、これ田畝
 の事なから、同時上に寛政あり下に遺利ある事をするへし、又十分に盡さずして、前禽を失ふの心
 也、翁嘗て歴史を考るに、漢は文帝に至り、宋は仁宗に至て最盛なりと稱す、然に二君いつれも寛
 大にして、政事はかどる事なく、行たらぬやうなりしか、天下穩かにして、れのつから治り安かり
 き、文帝の後武帝に至りて、張湯桑弘羊等もちひて、威怒を十分にさはめ、貨利は一毫も遺さず
 是より生靈荼毒し、民心離叛て、漢家の危事殆果卵のことし、仁宗の後神宗に至て、王安石呂惠

卿等を用て新法を造り、功利に趨る、是より朝野騷擾し、民心愁苦し宋朝の禍之に濫觴しけらし、二君みな英明の主にてありしか、いかしてこゝに至るといへば、た、材力に驕り、諸欲を盡さんととして、持滿の道わくらく、三驅の法をしらされは也、宋史に史臣仁宗を賛していはく

四十二年之間吏治若二偷惰而任事蔑三殘刻之人、刑法似二縱弛而決獄多三平允之士、國未三嘗無三驥伴、而不足三以累三治世之體、朝未三嘗無三小人、而不足三以勝三善類之氣、君臣上下、惻怛之心、忠厚之政、所三以培三植國基一者厚矣、

此賛よく仁宗の朝を推論してその理を盡せり、是をもて見るに、仁宗の時君臣ともに聰明をつくす、寛容をたつとふとしれたり、誠に三驅失前禽の遺風といふへし、

法は江河のことし

されは古人も人君は貴明不貴察といへり、明と察とは似て似ぬ事也、明は燭臺にて座を照すかことし、其光たかく其本おくられけれども、坐中をあまねく照すへし、察は紙燭にて物を照すかことし、手もとあかるくして物を見とひる事いちはやけれども、遠きを照すことあたはず、この故に人君の明は燭臺の如くなるへし、紙燭のことくなるへからず、天下の法は、寛大にして江河のことく成へし、瑣細にして溝渠のとくなるへからず、江河は大きにしていちしるればよけやすし、しかも深廣にしてあなとりかたき故に犯しかたし、溝渠は小さくしてしけれはよけかたし、しかも淺狹にして近つさやすき故に犯しやすし、さるによりて昔より江河を、蹈わやまりてはまるものあるをさかす、溝渠にはやゝもすればはまるもの多し、こゝをもて後漢の郎顛か安帝に上つる書に、王者の法は江河のことし、易避して難犯といへり、古今不易の名言といふへし、されどしかあればとて、政は一向に寛大なるをよしとするといふにもあらず、是は科條を繁くして法令煩苛なるを惡むといふ事也、もとより寛大なるをよしとすれども、時により事によりては嚴急にするを貴ふへし、大かた泰平の世は、民俗遊惰に流れ、驕奢を好むるが如し、今是を治るに、もし無事を專にし、簡易をつとめては、舊弊除くへきやうなし、必政事を革め、法令を嚴にして、民の耳目を新にすへし、然るに民は可與樂成不可與謀始とて、民はおろかにして國家の利病をしらす、た、私の利害をのみ先とする故に、其事の始には、己か勝手にあしきを見て、衆譎競起て、異議もまらくなる物るかし、古より明智の人は、るれに少しも拘らすして、其功を成就しぬれば、畢竟天下の利となる故に、つねには上下安堵して、もろともによろこふもの也、是かの晦きをもちひ、遠きを照すの明ならずしては成かたし、小智短慮の人の及へき所にあらず、むかし鄭の子産鄭國の政をせしに、舊俗の弊を改めて、いとさひしく車服の驕を禁し、田廬の制を定めしかは、富人おられて、美服をば獨に入てかくしけり、豪民の兼并する田をばことしく取上て部伍に歸せしむ、さる程に與人これか爲に誦していはく、取我衣冠而稽之、取我田疇而伍之、孰殺子產吾其與之、とまで怨望せ

して近つさやすき故に犯しやすし、さるによりて昔より江河を、蹈わやまりてはまるものあるをさかす、溝渠にはやゝもすればはまるもの多し、こゝをもて後漢の郎顛か安帝に上つる書に、王者の法は江河のことし、易避して難犯といへり、古今不易の名言といふへし、されどしかあればとて、政は一向に寛大なるをよしとするといふにもあらず、是は科條を繁くして法令煩苛なるを惡むといふ事也、もとより寛大なるをよしとすれども、時により事によりては嚴急にするを貴ふへし、大かた泰平の世は、民俗遊惰に流れ、驕奢を好むるが如し、今是を治るに、もし無事を專にし、簡易をつとめては、舊弊除くへきやうなし、必政事を革め、法令を嚴にして、民の耳目を新にすへし、然るに民は可與樂成不可與謀始とて、民はおろかにして國家の利病をしらす、た、私の利害をのみ先とする故に、其事の始には、己か勝手にあしきを見て、衆譎競起て、異議もまらくなる物るかし、古より明智の人は、るれに少しも拘らすして、其功を成就しぬれば、畢竟天下の利となる故に、つねには上下安堵して、もろともによろこふもの也、是かの晦きをもちひ、遠きを照すの明ならずしては成かたし、小智短慮の人の及へき所にあらず、むかし鄭の子産鄭國の政をせしに、舊俗の弊を改めて、いとさひしく車服の驕を禁し、田廬の制を定めしかは、富人おられて、美服をば獨に入てかくしけり、豪民の兼并する田をばことしく取上て部伍に歸せしむ、さる程に與人これか爲に誦していはく、取我衣冠而稽之、取我田疇而伍之、孰殺子產吾其與之、とまで怨望せ

○ 鴟鵂のふみ

百四十八

しかども、三年に及て、驕奢の風やみ、侵暴の害除きしかば、亦誦していはく、我有三子弟、子産誨之、我有三田疇、子産殖之、子産而死、誰其嗣之とて、たかひによろこひけると、子産は惠人なりと孔子もの給ひて、其政民を愛養する事ふかゝりしかども、ひとへに寛を貴ふにあらず、猛なるへき時はかくありしうかし、其後政を子大叔に授けし時、子大叔か寛に過むことを兼てさとりて、火は烈くして民望て畏るゝか故に、火に入て死するものはすくなし、水は懦弱にして民狎て翫ふ故に、多く溺れて死すといへり、此の水火のたとへも前にいひし江河溝渠の意と同じかるへし、然れば古の明王賢相は寛を本とすといへど時によりて猛をも用ひけらし、この故に寛則民慢、慢則則糾之、以猛猛則民殘、殘則施之、以寛寛則濟、濟則以濟寛、政暴以和と孔子もの給へり、一偏には意得へからず、

鴟鵂のふみ

たゞし國家の事は、大小によらず國弊民病は改めすんはあるへからず、其外はればやう舊貫によりて改めざるをよしとす、木の匠のつくれる器も、舊制を改て新しく仕出したるは、一旦勝手に能やうなれども、其すかた下りていやしきのみならず、其用手せはくして廣からず、小まはしにてやすからず、さるまゝにいろゝたくみ出してわつらばしくなりゆく程に、やかてもちひすなりぬるうし、こゝにおかしき物かたり侍る、ある人鴟鵂を畜て、それを囿にして鳥を捕けるに、同じく殺

生する友達のもとよりみゝつくをかりに越けるか、其ふみにみゝつくを畧しつくとかきて、其末につくとみゝつくの事にて候、みゝつくとかき候へは、文字かす多くこと長に成候故に、つくとかき候となかゝることばりけり、それならば始よりみゝつくとかけかしと片腹いたし、文字をつゝめんとて、多くの文字をうへ、詞を短くせんとして、かへりてなかくなる事をしらす、翁世間の事をみるに此たくひねはし、たとへはものをいふにも、常にいひつけたるやうにいへはよきを、我しりかほにからことばなどにて舌短にいひつれば、人きゝとらぬ程に、亦いひなをしながらしていとむつかし、事をなすにも、今までなし來るやうにすればよきを、我かしこけに理窟をもて手廻しにいつればことつかぬ程に、又てなをしなるとして跡へもとる事ればし、かやうの事は物馴ぬ人のある事也、いつれもみゝつくのふみにたくふへし、其外な事によらず、たゞありふりたるやうにすれば、やすらかにして事ゆきぬるを、よろしき仕かたころあれとてあたらしく仕出しぬれば、ことおほくむつかしくなりつゝ、かねてのよういとはちかふ物也、中にも國家の政にはもつとも此意得あるへき事也、古より新進の人、己か材智をあらはさんとして、好て新意を出し、舊政を改る事、いつれの代にもなきにあらず、其内十に二三は益ある事もあれど、大かたは近効をのみ見て遠慮を忘れ、事の易さをのみ見て難さを知らず、さる程に思の外にさはる事おほく出來て、貨財を費し人力を耗しなから、何の甲斐なき事になるうかし、しかのみならず毛を吹て疵を求め、風なうして波

を生し、忠厚の風日に敗れ、奔競の習日に長する程に、たとひ小利を得る共、なかく國家の害を貽す事輕きにあらす、いはんや祖宗の良法成策、先代より用ひ來て、天下の耳熟し目馴し事久し、かやうの類は輕々しくいろふ事あるへからす、宋の熙寧中にしは、法を變しければ、唐虞存舊の論をあらはしけるか、國家の舊物は常に民の耳目に習はすへし、不得と已に非ざるよりは、改易變置して民心を失ふへからすと論しけるころ、尤其理ある事に覺へ侍れ、但るれも一概にはいひかたし、たとへは祖宗の代に、時宜にしたかひ假に建置て、なかく用もへからざる事あり、いまた首尾備はらざる事あり、さやうの類は、後嗣の代に至て、或は改革し或は斟酌してころ、祖宗の志をなすともいふへけれ、もし祖宗の法とてるれに泥て世のわつらひ治のさまたけとも成事を、其まゝさし置なは、何をもて舊弊を改むへき、何をもて善政を行ふへき、又なにをもて孝子慈孫ある事を望むへき、定めて祖宗の心にもかなふへからすとて、翁古を援今を證して語りけるに、夏のみしか夜はやあけわたにちかければ、諸客皆いとま申してまかりぬ、

つれく 艸

わる時諸客來り會してけるに、翁か傍に兼好か徒然草あるを見て、一人の客いひけるは、兼好は倭語に長したる者にて、風景人情をよくいひどり、人に頤を解しめ候、翁も好みて見給へるや、翁いやとよ病中臥しかちにて日をくらしかね候故、かやうの書を見輩によませて承るにて候、これをど

さして好むといふにも侍らすといへは、外の一人、兼好はや、見識ある人のやうに世にも申習はし候、翁はいか、思給にや、翁世に一種の佗人ありて兼好をしたひ侍る、それは彼か名利をいとひ、閑寂を樂しむに同心するもへにて候、翁はうれもたしかには思ひ侍らす、太平記に高師直か爲に艶書をかきし事見へたり、其後伊賀守橘成忠か招に仍て伊賀の國に赴きしか、るおにて成忠か娘に通せし事園太曆に載て、其時の歌なども見へたり、是にてしるへし世に諂らひ色にふけり、隱逸をこのみ名利をいとふといへど、もとより隱者の操ある人にあらす、されは徒然草も佛法に染頭し、諄々として出離をどくかど見れば、女色に垂涎して淫奔を語る、なにの見識かあるへき、されと徒然草に限らす、此程我國の物かたり草子をよませて承るに、事實を記し候書、三鏡花物語などの外は、いつれも取にたらぬものにて候、大かたはあまり佛はなしにてあきはて侍れど、それは世の流弊なればいか、せん、其外ともすれば好色のさたにて、聞に忍ひざる事おほし、中にも伊勢源氏物かたりなどは年弱なる男女には、禁して見すましき物也、淫亂を導く媒とも成ぬへし、しかるに萬紳家に、源氏物語を我國の寶といへるは、いかなる故ともしらす、定て倭語の妙を得たるに心酔しての事にやあらむ、いはゆる庶子の春花を探て、家丞の秋實を忘る、也、るれに近世此物語を註釋し講説して、毛詩に淫奔の詩を擧て勸懲をしめすおとく、人の戒世の教とするといへるは、俗語にいふ杵子定木なるへし、いかにとなれば、二南は脩身齊家の本也、雅頌は論道述徳の辭也、

國風はもとより里巷の男女各言情の詩なれば、正もあり邪もあれども、其邪といふも、媒妁によらずして淫奔するといふはかりにて、いつれか后妃を盗み繼母寡嫂に淫するやうの事やある、又伊勢源氏のとく、邪淫の事のみを始終いひ盡してやむにはわらず、よりて正を見てはみつから勘み、邪を見てはみつからさらすか、伊勢源氏は、いは、長恨歌西廂記などの品にて、其冗長にして醜悪なる物ろかし、然るを聖人垂教の書に比していふは、誠に氷炭蕭蕭をひとしうするなるへし、昔より我國釋教世に行はれて、佛につかふるより重しとするはなく荒淫俗をなして、色に耽るより樂しとするはなし、うれ故に當時わらはしぬる物語も、あの二端をしるすを高致とするならし、さて自餘の記しおく事も、多くは奇怪妄誕の談ならねは、俳諧鄙陋の説也、ひとつとして義理にわたる事なし、責て此徒然草ほどの物も見當らす候、世に賞翫するも理にて侍る、其載る所、佛法のさた好色の事を除て、風景をのへ人情をかたり、又は世にあらゆる種々の事をするしおさけるも、尤おろかに聞ゆる事もあれども、大かたは理趣ある事になん覺へ侍る、中にも雜念をいましめて、我心に主わらましかは、ろこはくの事へ入來らしといひ、懈怠をいましめて、道を學する人、夕には朝ある事を思はず、朝には夕ある事を思はず、たゝ今の一念の上におゐてたゝちにすゝむへしといひ、貝をおほふたとへを引て、萬の事外にむきて求むへからず、たゝこゝもとを正しくして、前程をとふ事なかれといひ、松下禪尼のあかりしやうしをはられし事を引て、世を治る道儉約をもとす

る事をいひ、高名の木のほりかいひし事を引てあやまちは危き程はなくして、安き所になりてある事をいふ、外にもかやうのたくひ多かり、いつれも簡要の旨にて聖賢の教にもかなひぬへし、さすか人物伶俐なる故に其いふ所時とし道理にあたる事もあるにころ、鐵中錚々儒中佼佼といへる類也管中より豹を窺て一斑を見るときいふべし、たゝし是はと頓悟なる人もおほく得かたし、もし聖賢の道を學しめば、中々釋門に陥るには至らし、おしき事也、ろれに釋門に入にし甲斐さへなくて、女色に溺れ一生を誤り、今に至て汚名を殘しつるある、なけきても餘ある事なれ、是よつけても人欲の險しさをしるへし。

青砥か續松

しかはいへと君子は人をもて言をすてすと聖人もの給へり、翁も徒然草にて一の益を得たる事ある侍れ、ろれはかの巻中の一條に、いひやせましいはすやわらましとおもふ事は、おほやうばいはぬかよきなりとあり、又一言芳談とやらんいふ物語を引て、しやせましせすやあらましと思ふ事は、おほやうばはせぬかよきなりともあり、翁いつも言語飲食につけて此語を思ひ出し侍る、いふてあしきとしれたる事は、誰もいはぬもの也、いふてもよしいはてもよしとおもふ事をいふて、やゝもすれは跡にくやむろかし、喰てあたるとしれたる物は、誰もくはぬ物なり、喰てもよしくはてもよしとれもふ物を喰て、やゝもすれは跡にくやむろかし、兼好も身に覺へありてころかくはぢひつら

「よのつねの人の省になる語なり、但兼好は老莊の無爲を尙ふ人なれば、なに事も必しもいはんとせず、必しもなさんとせぬ心にてかくいふなるへし、今翁か此語をもちゆるはさにてはなし、孟子に可_レ以_レ取_レ可_レ以_レ無_レ取_レ取_レ傷_レ廉_レといへる、其意此語と相似たり可_レ以_レ取_レは、はしめかくと見て、可_レ以_レ無_レ取_レは、かさねて料簡をくはふる意なり、されは兼好か此語もかくいへはとて、一概にたゝいはぬかよし、せぬかよしとは意得へからず、其いはすやあらずし。せずやあらずしと思ふ所に意をつくへし、道理にて思ふと、勝手にておもふとのちかひあるへし、道理におゐていふへき事なるを思ひよらすして、勝手にいへぬかよしと思ふていはてやみ、道理においてすへき事なるを思ひよらすして、勝手にせぬかよしとおもふてせずしてやみなは、ひかへかちにて後の悔みころなかるへけれども、ろれにはいつか善にすゝみ、義にいさむへき、されはまるほのすゝますはのすゝさといふ事は、なに事かはしらねども、雨中に笠笠着て尋にゆきしをは兼好もよしとおもへはころ、是をもしるしをさけり、さいつころ太平記を兒童のよむを聞侍るに、北野通夜物かたりに、ひかし青砥左衛門夜に入て出仕しけるに、いつも燈袋に入て持たる錢を、十文誤て滑川へ落したりけるを、よしさてもあれかしとてころ行過へかりしを、其邊の人家へ人を走らかし、錢五十文を出して積松を十把買て是を燃しつゝ、川を渡て終に十文の錢を求め得たりける、さていひける十文の錢は、たゝ今求めすは、水底に沈てなかく失ぬへし、五十文の錢は、商人の手に涉りてなかくうせず、彼と我

○青砥、積松

となにの差別かあるへき、彼此六十文の錢をうしなはず、豈天下の利にあらずやといひしとて、五十文の錢を費して十文の錢を求るは、常人の思案にていは、勝手にさはめてせぬをよしとする事なれども、道理においてすへき所を考てかくするにおり、いは、輕き事のやうなれども拔群の見識なくてはなるまじき事うかし、商人と我となにの差別かあるへきといへるは、楚王失_レ弓楚人得_レ之といふにかなひて、天下の利にあらずやといへるは、楚人得_レ之といふよりも其識量一かさ大なる事也、青砥左衛門たゝうとにはあらず、其言行世に傳らざるころ遺恨なる事なれ、

渡部番

ある時諸客來會せしに、翁いひけるは、ちかき比我國の書をよませて承るに、古より茂村監行の人もあるへけれど、よるき物語などは、少も道理のさたに及ふ事なく、記録の類も、國史をはしめ時政事實の略をしるす迄にて、當時の人物、又は人の言行をは、しるすへき事とおもひよらねはしるし置べきやうもなし、よりに忠臣義士の事も、世に湮没して傳らず、是も我國の一次事といふへし、其後武家の世に成て勇將烈士君のため國のため死を潔うする事、歴擧するにいとまわらず、實て是はすこし風教の助けともなりなにかし、もし上にたち下を治る人にていは、平家治世のはしめ、小松の重盛をころ世に賢人とは稱すれ、父清盛暴逆にして君に背しを重盛との間におて、忠孝ふたつなから嗣す、誠に後世臣子たる者の法とすへし、されと燈籠の大臣といはれ、異國へ金を渡

せし事を見に、材識暗弱恐らくはいふにたらず、其子維盛、浮島か原にて水鳥の羽音におどろきて都へにけ歸り、天下の人口に係りしも、家法殿ならずして、子弟驕泰にたつたか故なり、燈籠の念佛崇をなすなるへし、其餘平家の君臣や、勇壯なるもあれども、それも優柔不斷にして材力弱ければ、將帥は運籌決勝の畧なく、士卒は先登陷陣の勇なし、されは上總介忠清か士大將としていかめしく振舞しも、維盛と同じくにけ歸りしをば、其時の人、ころもたゞさよと嘲弄せしうかし、又筑後守貞能は清盛第一の寵臣にて平家全盛の時は、意氣揚々たりしか喜永年中平家安徳帝を奉して西海に赴し折しも貞能出征して凱旋せしか途中にて車駕に出合しに、ひとり引ちかへて都へ歸しかども、身の置所あさましに、平家の跡を追て西國へ行しか、平家の勢日に盛りて月に危亡に瀕きを見て又逃去て釋門に入つ、肥後入道と稱しける、其後無程源氏の世となりしかは、鎌倉に至り、宇都宮朝綱と舊識のよしみあるによりて、朝綱に因て乞降し故に、一命を助けられ、抖擻行脚して、あなたこなたと餽ひつゝ、一生を終るときこへし、恥をしらざるの甚しきもの也、是につきて渡部右馬允番か事を感じ侍る、義經西國へ落し時、渡部にて番かもとへよりて事のよしをいひければ、番わはれみて見送りけり、後に其事聞へて關東にめされて、梶原にあつけられ、十二年を経たりし程に、鎮西の追討使に天野藤内遠景むかひけり、大將家のさきものにて、十世の宥を得る程の事なりけり、加賀の國に天野何れし一人の頭士ありしか、遠景の子孫也、うれか家に、頼朝より遠景に下し給し御教書一通ありけり、天野藤内遠景は幸公他に異なるの頭、頼朝十代遠景十代所領相違あるへらうすさのけるよしうれを見たる人の語りし

其時鎮西の任はて、歸りしか、上洛の時渡邊を通りて、番か妹をめぐりけり、相具して關東に下向しけるか、遠景此上は彼御氣色におゐては、いかにもし申ゆるすへし、若御承引なくは、遠景申あつかるへしといひければ、番か親類郎等さりども今は右馬殿の召籠はゆるされなんと悦あへり、さて遠景關東に下り着て、いつしか使を番かもとへつかはしていひけるは、思ひかけすかくもかりに成まいらせて候へは、ひとへに親ともたのみ奉るへし、内外に付て疎畧を存すへからすといひやりたりけり、番多年の召人にて、今日さらるへしあすさらるへしといひて、十餘年に及ひければ、かたうと一人もなければ、申なたむる者なし、たましくかゝるたより出來けるは、いかばかりかうれしかるへきに、番かいひけるは、弓箭とる身の、かゝるめにあふ事恥にてあらず、さころたよりなき身なれども、あなちらにのぬしこひねかふへさむこにあらずとて、返事にいひけるは、したしくならせ給ふのよし存知かたく候、番は獨身の者よて候へは、御也かりに成まいらすへき事覺へ候はすとあら、かにいひやりければ、いよく罪おもくなりまさりにけり、され共事は思ひて、ともすれば大將にあしさまに申ければ、いよく罪おもくなりまさりにけり、され共番は少もいたます、物どもせざりけり、かゝる程に大將奥州泰衡を伐し時、番をめしていはれけるは、汝をどくに身のいとせざらすへかりしに、思ふ子細ありてけふまではいけおさたるなり身の安否は能たひの合戦によるへしとて、鎧馬鞍など給りければ、番かしこまり悦てむかひけるか、身命

を借すも、しかりければ、其科をゆるされて本領返し給り、二たひ舊里に歸しとなん、番いかなる人とはしらねど、始終死を守て志をかへさりしにて、其操の廉潔なる事思ひやるへし、當時壁幸の臣にのかりを求めて命をたすかるをさへ屑とせず、いはんや貞能かとく仇を忘れ勢に附て苟免るを幸とせんや、孔子も行己有耻をもつて士との給へり、番かおとさ誠の士といふへし。

大佛の錢

されども忠清貞能かときは、もとより容悦の具臣なればふかくは論するにたらず、翁か日ころうたてしくおもふは、重衡の事にて侍る、其身不幸にして生捕れしは、さして耻辱にあらず、然るに鎌倉に囚れし時は、宴遊の席に臨て艶女に款語し、奈良へ渡されし時は、警衛の士にねかふて愛妾に邂逅す、すへて丈夫のすへき事にあらず、いとみくるしき事也、しかるにそれをはいさか取すして父命によりて奈良の大佛を燬し事を自からも大きな罪惡とくやみおられて、鎌倉にて頼朝の前にて陳謝し、京師にて法然に邂逅しても此事をいひ出してふかくやみしは罪障懺悔の爲とある思はれけり、その愚暗是非もなき事也、近世松永彈正かふた、ひ奈良の大佛をやさしを信長の猛惡にてさへ是をは大罪と思はるればこそ、松永か主君三好義長を弑し、光源院殿をころし奉りし大逆罪にならへて、三の人のならぬ事をしたるとて、彈正をはらしめられしるか、嗚呼佛法の人心を震憾する事何ろあゝに至るや、然るに寛文の頃かとよ、松平故伊豆守信綱執政の時、千年以來金

仙を尊て、かく成たる風俗の後にて、京の大佛を鑄て錢とし、天下を利益せられしころ、先にも跡にもさかざる事なれ、其卓識誠に古今に傑出すともいふへし、御當家創業以後文明日に開きし故に、かくのとき人も出るるか、重衡などをしてさかしめは、ほとんど驚死にも至りつへし、されは伊豆守善政多き中に、始て上聞して天下の殉死を禁し、諸國の人質をやめ、大佛を錢に鑄られし、此三をは世にも大器量の事にいひ傳しなり、殉死を禁せられしは、なかく後世の害を除き、人質をやめられしは、あまねく諸國の患をすくひ、大佛を錢に鑄られしは、大きに古今の惑をどく、天下後世におわて大功徳ありといふへし、但此時伊豆守に限らず諸執政いづれも至公至明にして、諸侯諸役人に對して私のもどめなく、私の怒なく只正道をもて下知せられし程に、其威令下に行はれしかは、諸侯諸役人も各おうれ愼みて、身持も正しかりしるか、己か材智をもて人をふさかす、己か權柄をもて下をあなとらねは、諸役人も執政の威勢には、からず、上の御爲又は官守の事に付ては必、面争て言を盡さるなし、昔魯公伯禽魯に入封の時周公いましめて、平易近民、民必歸之との給へり、かの諸執政この周公の語に本つかるゝにてもなければ、其心公にして治道に明なれば、そのつから聖人の心にもかなへり、されは其餘深今に至て太平の化日に盛なる事、上の御盛徳とは申なから、かの諸執政の力なきにもあらず、中に就て伊豆守の平易にて無造作なりしは、世にたぐひなき事にてありけり、其頃井上新左衛門といふ人は、執政府の從事たりしか、疎直に文飾

なきをもて伊豆守のために愛せらる、新左衛門常に談話を好みて其爲人東方朔に似たり、ある時いつかたよりか鱧を献上しけるを、御前より披露するるとて伊豆守見届られしよ、鱧は塵つきてありしかは、伊豆守氣色損して取次く人をしかられしを、新左衛門傍にありしか、いや鱧には塵ある筈にて候といふを、伊豆守いかにととへは、三番三にちりやたらりと申候はすやといふ時に、伊豆守聞て笑ひつゝ氣色なをりて、とかく物に念のいらぬ故にて候、なに事も念をいゝにしくはなしといはれしを、新左衛門各様には御念のいり候かよく候、我等とさ輕き者は、あまり念をいれ候へは、却てあしき事もある物にて候といふを伊豆守なにか念をいれてあしきやうあるへさといはれければ、其事に候、昔唐の玄宗方士に命して揚貴妃のありかを尋られしか、方士蓬萊宮に到て貴妃にあひし程に、歸て此よしを奏聞せんとて、其しるしを乞しかは、玉の簪をたまはりけり、然るをあまり念過て是は世にたくひあるへき物なりとて、かさねて玄宗貴妃との密語を聞て還報しければ一旦首尾はよかりしか、玄宗方士を疑ひろめられしより思はるゝは、此密語は貴妃とわれふたりなり外他人しるへき事よあらず、然るを方士しりてかくいふは、兼て貴妃と通したるよやと、つゝに方士を誅し給ひしとなり、前の玉の簪はかりにて能候を、あまり念をいれたる故にかくのよしといひければ、又新左か例のろゝるあどをいゝとて一座輿に入てやみける、其後天草の事出来て伊豆守奉命てゆかれしか、不日に賊みな伏し誅て江戸へ歸着せられしに、旅装のまゝ直に登城ありしかは折ふし

城の面々残らす迎勞しけり、新左衛門も衆中にありけるを、伊豆守はやく見つけて、ろくに語る事ごうあれ、今御前より罷りてとて、御前へ出られ、さてやゝしはらくありて、御前より退かれ、衆中にていはれしは、此たひ天草にて、諸侯一度に賊壘へ向ふへしと約束定りて、さておしよする時は、某か本陣にて鐘を撞へし、それを相圖に諸手の衆あつまるへしといひ合せて、會議の間日を経けるか、某おもふには、今夜にても賊方の者か又は馬鹿ものあり忍ひ入て鐘を撞て我衆を誤る事もあらむかと、撞木を取よせて、我側に置けるか、又おもふには、必撞木にも限るへからず、鐘炮やうのものにても撞ましきにもあらずと鐘を地へおろさせ、おもにて巻て置せたり、然る所に賊徒挑戰て、思ひよらす俄に手合せありければ、さらば鐘を撞へしといふに、上へ釣わけこをもとく程に、つゝにまにあはすして、たゝかゝりに懸りて攻潰しけり、其時かのいつろや申されし方士蓬萊宮の物語はかやうの事にこそと、ろこの事を思ひ出せしとありしと也、これ賊れに近き物語なれども、伊豆守理にさどく、人の言をすてす、それになゝ今馬よりおり御前へ出て天草の首尾を申上らるゝ折ふし、常人ならは中々おもひもつけし、たど思ひつくとも、此節はさてやむへき事なるを、只常の氣色にて、淵人廣坐の中ともいはず、我あやまらたりし事をも有のまゝに語られしに、伊豆守の心公にして、器量の大きなもしられける、世に古今の良相とするも、けに理りと覺ゆるるか、是をもて見るに、世の權威にほこり、邊幅を脩る人は、誠に馬援かいはゆる井底の蛙也、嗚呼

いやしかな

泰時の無欲

他日繼ての會に、諸客前日本家の人物をば御評論承りて候、鎌倉以來の人物は多き事候へばあまねく承るに及ばず、其中に翁の取給へる人は誰々にて候や承度候といへば、翁、鎌倉治世の後に至て北條泰時ころ、漢の丙魏唐の姚宋にもはつかしからぬ人にて候へ、わか國にはあまり比類なかるへし、此人梅尾の明慧にあふて、某不肖の身をもて重任に當り、群下に臨み侍る、いかして衆を治め、争をやめ侍るへしとばれしに明慧た、無欲に成給へといはれしを、泰時かかねて某ひとり無欲に成候共、群下なにとて無欲に成候へきといはれけるに、明慧下に目をつけすして御身先無欲に成て見給へといはれしを、泰時ふかく信じて、父義時死去の時、所領財寶大かた諸弟に配分して、其身はわつかにたるはかりとられけるを、二位の尼泰時よ自分のとられやうあまらずくなき事といはれしに、某は家督をうけ候へば、なにの乏しき事もなく候、只弟どものもたかなるやうにところれもひ候へといはれしかば、二位の尼も感涙に及はれしか、其後年を逐て親族肅穆し、鎌倉の武臣も感服しけり、明慧浮屠なれども、孔子の季康子にの給ひし苟子之不欲雖以賞之不竊といふにかなへり、泰時の明慧の一言を信用して鎌倉よく治まりしにて、聖人の言誣へからざる事をするへし、明慧もた、うとにはあらずりけらし、さて泰時家督以後、日ごとにつとめて公廳へ出て、ひね

もう蹇々として庶務を治められしに、群長を待事恭謹にして争を分ち訟を聽る、事明恕なりしと、東鑑を見てしるへし、昔ある老儒の語るをきし、泰時ある時訟をさかれしに、雙方對決しけるか、半に成て一方の相手忽に理に服して、只今迄己か申所をよしと思て候へはこそ争訟に及ひ候へども、今日始て手前の非を覺悟いたして候、此上はもはや一言申にも及ばずとてやみぬ、泰時感して、此争は汝かまけ也、理非によりて決斷すへし、但某今迄多くの訟をさししかども、即座に汝かよく理に服するものを見す、是を賞せずしてなにをか賞すへきとて、別に恩賞を行はれしが、後は争訟もやうやく稀に成て、訟庭も閑になりしとて、此事何やらん古き物語にて見しといひしか忘にき、其後考へもし侍らず、此一事にても、泰時の公明にして無情者は其辭を盡す事を得ず、又恩威ふたつなから正しき事もしられたり、其孫謀のよき後嗣に及て、時頼時宗いづれも遺訓を守り、成法に依てよく政を勤られしかば四方の人心鎌倉に歸嚮せざるはなし、北條氏皇朝の陪臣をもて天下の權を執て、數代の安きを得たるは、泰時の功といふへし、世に時頼を泰時より賢明なるやうに稱しぬるは、意得かたく思ひ侍る、た、早く高位を脱履して浮屠に歸し、微行をこのみ下情を察せられしを、奇特の事とてころいふらめ、それは道理をしらぬ人のいふ事也、其身宗廟社稷の重きを承て、自から佛寺に逃れ、微行を樂とする事やあるへき、君徳を繼し、治體を失へり、人主の法とすへからず、是にて見れと、其治規模近小にして、遠大に味かりけらし、中々に泰時に及ふへき人にあら

話 難 臺 駁

す其外鎌倉の人物を考るに、上下ともにすへて取にたる人なるへし、但建國のはじめ、あまたの人材幕下に群集すといへど、血氣勇悍の人迄にて、いつれも粗暴無識、皆絳灌か下にて候、其中に畠山重忠は、勇力世にすぐれ古今の壯士といふはかりにてもなく、志操潔白にして、さはめて正直の人也、世に和田と並稱するはるの倫に非ず、梶原か讒にあひし時、誓文をもて陳謝せよといひしを、重忠一生偽をいはねは、今更誓文に及へきやうなしとてうけさりしかども、頼朝も疑をのこさず、梶原も怒を加へず、是にてもとより忠信の上下に感孚する事をするへし、其上己か善に伐らす、人の功を蔽はす、おのつから寛厚長者の氣象なんありけり、當時諸將の中に求るに、少しき似たる人もなし、不幸にして三浦と同じく前後北條か爲にころさるゝころいと口惜き事なれ、其最後も、さすかに他よりは一さはいささよく見へしうかし、こゝに至て時政義時か悪、天道にさかひ、人望に背く、其罪誅しても餘りあり、もし泰時なかりせば、北條家の滅びむ事、高時か時々待、ひとりと、田樂入道をのみ罪すへからず、

楠正成

建武中興の人物にては、稲紳家に藤藤房、稻鈴家に楠正成もとより輿論の歸する所にて候、もし人品をいはい、藤房は公卿輔弼の臣たり、正成は將帥禦侮の臣たり、其材の大小をいはい、正成材、藤房の及ぶ所にあらず、藤房龍馬の疎は、直言極諫朝廷を變動す、まことに朝陽の鳳鳴、

話 雜 臺 駁

へし、然れども正成恢復の功とは並論しかたし、其上藤房は一諫の後國をさり世をのかれしか、正成は其身國難に死するのみにあらず、忠義代々家に傳へ、天下にあらはる、當時誰か正成に比する人あるへき、たゞし正成も外の言行世に傳はらされは、その爲人くはしき事はしれ侍らす、世に楠家の遺書とてされく流布する物あれど、おほくは後人の偽作と見へ侍る、しかれども其しるべき事は、争亂の始、一城をもて天下を引受て、始終少しも挫屈せざるにて、其材量のたくましきを思ひはかるへし、殊に仰慕すへきは、天下一盛一衰の間、名將勇士といへども、時勢に附て反側を當とし、朝夕をたもたざる中に、獨楠家のみ子孫累葉かたく遺訓をまもり、一門闔族心を壹にし力を戮せ、各身をもて國に報ひ、三代の間一人も貳心ある事をさかす、古今比類なかるへし、正成徳深厚にして、なかく人心を結ぶ事なからんには、いかてかかくのこくなるへき、然るに世の尙論する人、推尊て諸葛孔明に比するは兩人いつれも兵器をつとめ、興復を謀り、父子國事に死するも同じけれなり、それはさる事なれども、孔明は臥龍なり、道徳を懷抱し、功名を遺外し、草廬にて一生を終んどせしに、はからざるに蜀の先主の三顧に遇て不得已して出仕へしか、一朝關趙か上に立て、君臣魚水のごとく成し、されはるの出處伊尹呂望に近しとなん古人の論もあるやかし、正成はもと功名科中の人なり、

後醍醐帝笠置に臨幸の時、近國の名士を徵れし間、正成も召に應じて參しけり、是るの出處孔明と

は大きに異なる上、恢復の後も尊氏義貞の下に列して、專に任用せらるゝ事をさかす、孔明をもて擬せは恐らくは其倫にあらし、其兵を用るも、孔明は正大にして奇計をもちいす、節制の兵といふへし、翁かねて論すらく、正成か敵を料り兵を用るは韓信に似たり、韓信楚に寄食する時より、既に項王の易制をしり、正成河内に家居する時より、既に鎌倉の易弱をしる、よりて韓信高祖を見て盛に項王の勇を稱へて、其勇は恐るゝにたらざる事をいひ、正成

後醍醐帝に謁して、盛に鎌倉の強さを稱して、其強さは恃にたらざる事をいふ、其後兩人共に多くは籌策を用て取勝し事掌握にあるかことし、韓信は囊沙背水敵を破り、正成は鈞屏木偶敵を慶するを見給へ、兩人の兵を用ること一轍に出ざるかは、何れも摧堅拉銳といへど、韓信か材は敏速に長してよく攻、いまたろの守るをさかす、正成か材は持重にたへてよく守る、いまたろの攻るを見ず、韓信に城を守らしめり、よく正成かよくならんか、正成に敵を攻しめは、よく韓信かことくならんか、古人も攻守勢殊也といへはいか、あるへき、翁かいまた決せざる所也、しかいへど韓信か兵は利欲の私にいて、一身のためにし、正成か兵は忠義の心にいて、國家のためにす、其底積の心おのつから同しからず、むかし河内の人の語りしとて或人翁にいひしは、金剛山のあたり南北の明神と號する祠あり、ろの中坐を正成とす、左右は孫子吳子なり、正成常にわれ天下に武功を立る事は孫吳のかけなりといひしによりて、是を祠祭するところ、是にて今に正成か遺愛の民にあ

る事をするへし、但正成かくのとく絶倫の材をもて、聖賢の道を學ひすして、孫吳か術をのみ崇むしは、遺恨といふへし、湊川にて自殺するとき、弟正季と最後の一念を語る事はなはた陋し、

足利家の亂れ

足利一統の後、幕下の人物にては、細川頼之をある世に良相と稱し侍れ、先君の遺命をうけ幼主を輔け、上を奉し下を御するをみるにや、老成の材といふへし、然れども小術を用て君威を強する事をしりて、曾て陳善閉邪とをしらす、されは義滿昏弱の君にあらず、其輔佐よろしからは、いかやう成英主ともなるへき人ろかし、ろの驕泰をさはめ、僭逆を肆にするに至るは、頼之といへども其罪をのかるへからず、是をもていふに其人稱するにたらす、其外足利家の名門右族、いつれも跋扈將軍にあらざるはなし、應仁文明の頃京都には細川畠山黨を分ち、鎌倉には足利上杉雄を争ひ、日夜合戦して虚き月なし、しかのみならず君臣相害し、親族相殺し、ろの毒鬼域のとく、其暴虎狼のとし、天下に人倫の道絶はて、日月地に墜さる迄にありける、是をろ古今亂世の極といふへし、もろおしにていは、李唐の季五代の初に似たり、いつろや唐書を讀侍しに信宗昭宗の時に至て、其頃君上の廢立多くは人臣の手に出しかは、揚復恭か昭宗を己かたてたるどて負心門生天子といひしをある、古今になき事なれとあるの事にれかしかりしか、其後我朝近代の野史にて、新參の主人譜代の家人に背くやうやあるといひし事あるを見て、さても亂世の風俗からもやまとも

よく似たる事よと思ひ侍りし、されは應仁の後足利家の代を終るまで、前後百年の間、其名將勇士、寒促飛廉か徒にあらされは、賁育駒舎か類なり、中々賢愚得失を論するに及ばず、但鎌倉兩上杉の時、大田道灌あり、名將の譽ありし、然とも翁おもへらく、上杉氏山内扇谷兩黨たりといへども山内を宗室とす、此時越後の上杉房顯山内の家を繼て、其子顯定に及へり、道灌は其父道真より扇谷の上杉定正か家老たれば、定正をたすけて、顯定と嫡庶の義を講し、親族の好を篤して、扇谷の家を安んじてころ、身の輔相たりし甲斐もあるへきを、反て謀をもて山内の權を奪ひしかば、兩上杉不和になりける程に、終に兵難を招て、定正と同じく顯定か爲にころされたり、恐らくは其材主を庇し身を保つにたらざるに似たり、しかいへと武畧すぐれたるのみにあらず、文學に志さし和歌をおのみて、かゝる亂世には得かたき人ともいふへし、翁いづも思ひいて、感吟するは、世に傳るかゝる時さころ命のとよめる歌にて侍る、此歌を世には道灌敵にあらざる、時臨終によみしといへど、さにてはあらず、暮景集とて彼か自からかさわつめし藻草あり、其中に此歌をのせて其詞書に、康正元年の冬藤澤の役に、かたきも味方も入まじり、三日をかさねていとみあらうふ事になりぬ、されども味方の武威つよくして、かたき北條憲定のぬしつゐに自腹して、餘兵をのかし、むなしうあり、あるはわたにあたりてかたみに死するも侍る時、藤澤のかたへの松原のむれにてたゝかふ男あるゆ、味方は中村治部少輔藤原重頼とて、京家の人の世にしつみて、屋形に扶持せられて侍り

しになん、敵の男は栗毛なる駒に乗て、二ツ引りやうに昇り龍の紋付たるさしものなりけり、遠目なからよるひの毛もいかめしう見へける、しはしたゝかふて鎧をわはせしに、目の前に敵の男つさどめられ、やかて中村手つから首を取て我陣に來りて、かうくどなん語りけるに、いまた壯年にもたらぬ男の色しろうしてたけたかゝるへき心地したり、鬘のあたりたゝをらすたさしめつゝ、あはれもいやまし、あたなからにくからぬおもかけなり、中村重頼この心はへのをさしきよ歌ひとつものして手向にとすゝめ侍りければ、その首よひかひて、かゝるとき、さころ命のれしからめ、かねてなき身と、おもひしらすは、重頼返し、なき身とは、誰もしれども、諸どもに、いまはにおよふ、おどをしるおもふ、此道灌の歌は、孔子の給へる勇士不し忘し喪と元といふ心にもかなひ侍らんかし、されと古の勇士の不し忘し喪と元といふは、其志朝夕に義をおもんするにあり、首を刎らるるも義を失はしとなり、必しも戰場に死を輕んずるに限るへからず、我朝の武士のかねてなき身と思ふといふは、其志戰場に死を輕んずるにあり、首をとらるゝともうしろをみせしとなり、あなち朝夕に義を重んずるによるにあらす、其おもひき同しやうにてしかもちかひありとしるへし、されと其會議はしばらくさし置、此事歌にのみならず、敵も味方も、死したるもいきたるもとりくゝささしき事といふへし

武田信繁

足利家の亂れ

百六十九

爰に足利氏の季世、天文永祿の間に至て、賢と稱すへき人あり、甲州武田信玄の弟左典厩武田信繁なり、然るに近代武功をのみ尙ひて、徳行をば稱せざる故に、信玄の名は高けれども信繁の賢はかくれて世に知る人なし、今翁かあらはさずしては誰かいひ出る者あらん、信玄の父信虎、信繁を愛して信玄を廢する心あり、るれ故信玄父子不和なりしに、群臣いつれも信玄の武畧に長したるを見て、信虎をすて、信玄に思ひ附しかば、信玄群臣と謀て、信虎をすかし出して是を拒きし程に、信虎甲州へ歸る事かなはず、今川氏眞の外祖父たるによりて、駿河に出奔して、今川家の寄公となりて、年を経けれども、信玄つゝに父をひかへて國に入るおとなし、信虎後に京都に流落して一生を終たり、信繁信虎の愛子として、信玄を廢して信繁をたてんとするをば、かねて信玄も知たる事なれば、必忌惡むへし、るれに國にのこりて信玄につかふるは、危難の場なり、父を追出す程の人なれば、露友愛の心あるへきにもあらず、しかるに信繁嫌疑の間に處なから、信玄につかへて、兄弟の間少しも遠言ある事をさかす、むかし後漢の東海王強は光武の太子たりしか、廢せられて諸侯王に下れり、明帝母龍によりて、弟をもて立て太子となり給ひけるか、其後明帝の代に至て東海王恭謹にして、上を奉し身を全して終られしをば、前史にも褒稱して記置しるか、されどるれば明帝孝友なればつかへやすかるへし、信繁はるれとはちかひ、殘忍至極の兄につかへて朝夕國に權をとして、人臣の節を失はず、信玄といへども常に親任して疑忌の心なく、始終一のとし、るの忠

信誠實人を感孚するにあらすしていかてかくのどくなるへき、さて川中島にて討死せられしころ尤義にあたりて覺へ侍る、信玄一生の危き折なれば、此時討死せずしていつの爲に命をおしむへき、されは主辱かしめらるれば臣死するの義を守て、あゝよく討死せられしは誠に見危授命といふへし、其子を誦られし條子かさの物を見侍るに、一として恭敬篤實のまにあらざるはなし、其中一條に、たどひ海は野となり野は海となるとも、盡未來際御やかたに對して二心あるへからすといひ、又一條にたどひいかやうの御懸意にても、後庭へ出入すへからすといひ、又一條に、諸人同座する時、もし好色の語に及ば、目にたぬやうにして其座を立へしといふにてしりぬ、信繁人から恭謹なる物から、しかも身を守るおと嚴正にて、かり初にも汚俗に同せず、其高風清節古人に恥ざるへし、又一條に合戦に赴く時、敵ちかくならば、人數を急にわらくつかふへしとあり、是にて信繁戦陣に勇ありて、兵をまはすに熟しぬる事をしれり、しかれば勇威武畧さへ兼備りけらし、易にはゆる知剛知柔萬夫之望とは、此人のたぐひをいふへし、嚮に信玄社稷の慮ありて、はやく此人をたて、世子とし、監國の任にをらしめば、甲州なかく滅さらまし、しかるに昏味剛腹の勝頼に傳へしかば、信玄死していく程なく織田氏のためにはるはされにき、なげかしき事にわらすや、

兵法の大事

後日諸客來會しけるに、例の講はて、翁いひけるは、各日比武田流の兵法を講せらるゝよしき、

侍る、前日申せし信繁の敵近くならは人数をあらくつかふへしといはれしは、いか、輕き事のやうなれ共、尤用兵の要を得たり、信繁も是にて毎度利を得て簡要の事と思はるれば、あらく子息へもいひ傳へられけり、此序に兵法の事をあらく語り侍るへし、翁日ころ兵書を考へ見るに、兵術の要は孫武か十三篇にあり、十三篇の要は軍形兵勢の二篇にあり、おほよう用兵の法は、形勢のふたつに過へからず、しはらく常語にていは、軍形は軍のかた、又は軍のもやうといはんかし、兵勢は兵のきをひ、又は兵の調子といはんかし、軍形は行師の法にして、兵勢は合戦の法なり、軍形は行師の法と云は、今僅に百ばかりの人数にても廻して見給へ、それさへ末々迄は下知と、かぬ物るかし、まいて三軍の師をまはすに、時に當ての下知はかりにしては、いかて自由に廻るへき、た、帥たる人成算より割出して、軍伍を定め、手分を定め、約束を定め、其外の事迄分段を明かにして、人数を一定の形にはめて師をやれば、三軍ひとつもやうになりて、なにの造作もなく廻るへし、軍の強弱はもやうによりて生ずる物也、又兵勢は合戦の法といふは、常の輕き事にも考へ給へ、將急節に臨ては、すこし手延なれば、度を失ふ物るか、まいて合戦の勝負は呼吸の間にあり、それには鎗先に向ては、士卒の勇怯ひとしからねは、どかく猶豫しやすし、た、將帥たる人、こゝに於ては人数をばけしくあらくつかふて、其きをひに乗してすゝめは、おのつから調子ゆゑらすして、勝利を得へし、兵の勇怯は調子によりて生ずる物也、されは孫子に勇怯は勢也、強弱形也、どこ

見へて侍れ譬は猛虎深山にありては百獸震恐せしか、陷穽の中に在に及ては、尾を搖かして食を求るか如し、猛虎にはかに弱くなるにはあらず、又おかしきたとへなれ共、世にいふ女の丑時参りといふ事あり、常には闇かりをさへおろる、物か、嫉妬の怒に乗しては丑時参りして、少しもおろれやらず、其女にはかにつよくあるにはあらず、是にて勇怯の勢にあり、強弱の形にある事をしるへし、但軍形は本なり兵勢の軍形よりしてこゝ出来にけれ、もし軍形亂れなは、士卒勇なりといふども必敗軍すへし、この故に勝兵先勝而後求、敗兵先戦而後求、勝といへり、先勝は軍形にあり、いまた戦はぬ先に、必勝へ手たて定まる故に先勝とはいふ也、先勝て戦へは、兵鈍らず、戦とてはらす、敵を破る事破竹のことくなるへし、よりて孫子に勝者之戦、若決積水於千仞之谿、若者形也、是は必勝の形先定まりて、其勢に乗して戦へは、なにの手もなく勝事をいへり、然るに合戦の場に臨ては、ゆるやかなるを嫌ふて、はけしきをいとはす、おろさを嫌て、はやさをいとはす、もしゆるやかにれるければ、士卒の心たるみて、其勢を失ふものなり、信繁の人数をあらくつかへといひしは、こゝなり、是則兵勢なり、孫子に是を論して激水之疾、至於漂石者勢也、鷲鳥之疾、至於毀折者節也、故善戰者其勢險、其節短、勢如激弩、節如發機といへり、すへて物には鼓の拍子あることく、はり合てはつみのあるは勢なり、竹のふしあることくさはたちて折めのあるは節也、水激して石のおもさを漂はすに至るは、岩にあたるつみのつよければなり、安流する水の

水さき弱きか石をたよはす事をさかす、鷹鷲て鳥の翅をとりひしくに至るは、禽にせまる折めのみしければ也、なかのしする鷹の羽つかひゆるさか毀折する事をさかす、よりに善戦者は其勢必險しく其節必短し、一足も所向をしりりけはさる、一毫も軍法を敗ればさる、かく險しからねは其勢弛ふものなり、日を刻して急にす、みて兵を駐めず、戦勝ては早く引て長追せず。かく短からねは其節のふるもの也、其勢弛ひ其節延れば、士卒倦怠て、必勝利を失ふへし、されは勢、如し贗、勢とは、必はりつめて少しも手をゆるさず、節、如し發機、勢とは、忽急にはなちてしはしものとりせず、あの故に良將の下に怯卒なし、愚將の下に強兵あり、孫子に是を論して善戦者求之於勢、不責、三於人一故能擇人而任勢、任勢者其用人也、如し轉木石、木石之性安則靜危則動、方則止圓則行、故善戰、人之勢、如し轉圓石於千仞之山、者勢也、孫武か此語、一字一句も兵の肯綮にあたらざるはなし、孫武は誠に兵家の祖なるか。

孫臏韓信の兵法

されと孫武か兵法、其書ありといへども、自から兵を用て敵を料り勝ことを制するをさかす、そのかみ吳王闔閭に用られ、十三篇をも吳王に傳授せし事、史記孫子か傳に見へたり、闔閭西のかた強楚を破て野に入、兵威諸國に振しは、定めて孫武か謀より出たる事にてあらんかし、その事實世に傳らねはしるへさやうなし、孫武か後孫武か兵法をもちて、其功天下に著れしは、孫臏韓信のふ

たりにてなむありけり、孫臏は孫武か子孫なりしか、先祖の兵法を傳へて、齊の威王の師となる、此時魏より齊の與國趙を圍しを、威王將田忌に孫臏をさし副て趙を救しむ、孫臏は其前に魏將龐涓と、もに兵法を學ひしか、龐涓の能を嫉て、陰に臏を召て至れば其兩足を斷し程に、此度もた、車中お坐て軍の指圖をしけり、田忌すくに趙へおかむといひしを、孫臏とめて、魏趙久しく相攻ぬれば、魏の輕兵銳卒必外に竭し、老弱運漕して内に罷るゝを謀ていふやう、趙に至らんよりは、速に魏都大梁お赴て其虛を衝んにはしかし、かれ我國の危きをさかば、必趙をすて、歸て自救む、しからばわれ一舉して、趙の圍をとくのみならず、その弊を魏に収るなりとて、直に大梁に向ひしかは、魏師果して趙を捨て還りけるを、迎へ撃て大に勝利を得けり、これ趙を救ひながら、趙を救ふとは見せずして、魏を攻る形をもてしめし、虚に乗する急迫の勢をもて逼りしかは、魏師など趙をすて、歸らざる事を得へき、これによりて見れば、前にいひしとく形にはめきをひにのすれば、わか士卒のみにもあらず、魏を制する事も掌握にあるかことし、孫臏か魏を伐て趙の圍をとくにて、その形勢に熟するをしるへし、されはこゝ孫臏も形格勢禁すれば、おのつから解るおとをすといへり、形にはひれば、敵必形にさへられ、勢にのすれば、敵必勢にせかれて自由を得ぬ程に、をのつから我計中に墮るるか、後十五年ありて、魏より韓を攻し時、韓告急於齊しかは、田忌又將兵として、前に趙を救しよとくすくに大梁に赴きけり、魏將龐涓是を聞て韓を捨て歸る程に

齊師とくに行過て先におり、孫臏田忌にいふやう、三晉の兵素より悍勇にして齊を怯とす、善戦しは敵の勢によりて、その勢のまゝに態と利導して、己か思ふ圖に引付るうかし、兵法に百里而趨利者蹶（蹶のほはよつとつたを）上將（上將のほはよつとつたを）といへり、さらばいよく魏を驕らしめて、百里にして利に趣かしめんとて、齊師魏の境に入て、始て一舍する日は十萬竈をなし、その明日は五萬竈、又明日は三萬竈と、日々にかまどの數を減して、軍行の跡に遺しけり、さる程に龐涓齊師の後を追てをしけるか、是をみて大によろこひていひけるは、我もとより齊師怯き事をする、いかにとなれば吾地に入事三日にして、士卒のにくるもの既に過半に及へり、いさ急に追つめんとて、其日歩軍をすて、騎兵はかりにて、二日の道を一日にうちけり、孫臏其行を度るに、暮に馬陵に至るへし、馬陵は旁に阻隘多くして兵を伏すへし、こゝに龐涓を討取へしと思ひつゝ、大樹を斫り白けて、龐涓此樹下に死なんと大書したり、さて善射るものをすくり、萬弩をろろへて道を夾て伏さしめ、それ等と約して、暮に火の高く擧るを見て、萬弩一度におおれと、其期を待けるに、龐涓果して夜に成てかの斫れる木の下のに至しか、白書を見て不審におもひ、急に火を高く擧て燭しけるに、其書をよみて未（未のほはまほら）畢に萬弩俱におおりしかば、魏師大に破れて、龐涓自刎て、遂に豎子か名をなしつといひて死にけり、龐涓か前に孫臏を足たちし時、人の足をさるは則わか首をさるといふ事をしらす、曾子の戒之戒之、出（出のほはいづる）乎爾（乎のほはえにゆる）者反（者のほはえにゆる）乎爾者也との給ひしあう思ひあたりしか、聖賢の言いつかたかひ侍るへき、是は小人の戒とすへし、

なかく世に、たてじとてころ、あしきらめ、足はたゝねと、首はとりけり、是は翁かたはことなり、足のかはりに首を待たれば、孫臏はかへとくしたりといふへし、しかるに竈を減してみせ、樹をしらけて見せける、ひとつとして敵を形にはめさるはなし、かまどを減して見すれば、敵必道を倍してゆき、樹をしらけて見すれば敵必火を擧で見ると、火を擧れば萬弩俱に發す、萬弩俱に發すれば敵自刎て死す、一として敵を勢にのせさるはなし、よく敵を料りて兵の形勢に熟せずんば、いかてかかくあるへき、孫武か後一人といふへし、災漢の初に至て、高祖の諸將の中に、韓信ころこ兵術に精しく、合戦の上手にてありし、其趙王歇を攻し時、背水の陣にて勝しば、今にあまねく世に稱する事也、兵法に右（右のほはみぎを）倍山陵（倍山陵のほはみぎを）前（前のほはまへを）左水澤（左水澤のほはひだり水を）といへるは軍形の常なり、然れ共兵に常勢なし、敵に因て變化すれば、軍にも常形なかるへし、此時趙兵二十萬と號す、漢兵數萬にたらず、其上皆あつまり勢にて決戦の心なし、韓信これによりて水にろむきて陣せしめたり、水に背きて陣するは死地なり、一足跡へひけは水に逐はめられて死する故に、おのつから面々にせきて討死して戦はさる事を得ず、趙軍漢の軍の死地に陥るを見ては、必なへの用意もなく輕々しくすゝみたゝかふへし、我死戦の衆をもて輕進の兵を擧なば、必一戦に勝利を得へしとはかりしか、はたしてその謀はつれざりけり、然とも水に背て陣せしをば、當時諸將も口には諾せしかとも心には服せず、敵もこれを望見て大

に笑しうかし、あれ敵もみかたも形にはめられ勢にのせられて、みつからおはへす、戦勝ても其勝ける故をしらさりけらし、その外伴りて旗鼓を捨て走て、敵をして空壁逐利しめ、趙旗を抜て漢の赤幟をたて、趙軍の氣を奪ひしなど、いつれも敵を形におとして、自然の勢をもて驅しかはみかたはいよく勇戦し、敵はみつから死を救ふにいとまあらさりけり、孫臏か後、兵の形勢に熟し合戦に長したるは韓信ならし、むへ自から將兵の能を論して、多ければ多くして益善とはいひけり、けにさもと覺へし、然るに孫臏韓信か兵法をもて孫武か書を考るに、符節を合せたるかおとし、おをもて兵法はいよく形勢にわる事としるへし、孫子にいへらすや、先爲不可勝以待敵之可勝とは、先不可勝は、我にあり、萬全不败の形也、敵之可勝は敵にあり、必勝不失の勢なり、其機を形にこめ其戦を勢に決す、其機を形にこむるに當ては、淵のこどくふかく、龍のこどく潜まる、いはゆる藏於九地之下もの也、其戦を勢に決するに當ては、蹶のこどくをこり、雷のこどく擊、いはゆる動於九天之上もの也、忽かくれ忽あらはれ、奇正相生し、虛實相形る環の無端かことし、兵術の妙、こゝに至てもはや加ふべき事なし、但其簡要をいは、兵は神速あるにあり、もし神速ならねは、其計策多くは敵にはかられ、又は長陣すれば、將軍も退屈する程に、軍形兵勢もいつれの處にか用へき、孫子にも兵聞拙速未親巧之久也といへり、善將兵者は、たゞ形勢に明かにして、其餘勝敗の數にあつからぬ事は多くは不調なれども、反て是をもて勝利を得る事

速也、是を拙而速也といふ、兵家の貴ふ所也、若勝敗の數に暗くしてた、屯營を周備にし、號令を煩瀆にして、すきて持久の計とすれば、軍法調熟して、すきまもなく見ゆれども、兵久しければ變生する程に、はては敗軍に及ぶるか、是を巧而久しといふ、兵家の忌所也、況や兵久してやまねは、其間多く財を糜し人を殺し、なかく國家に害を貽すことすくなからず、むかし蜀の先主自將として吳を攻る時、七百營を連ね、三十屯をたて、吳と相拒こと半年に及ぶ、巧而久しといふへし、つゝに兵疲惫沮て、陸遜か爲めに破られたり、我朝にても、近代上杉武田の兩虎爭雄しか、いつれも征法疎かなるにあらす、軍令精しからざるにあらす、然ども先爲不可勝て敵の可勝を待事をしらす、互に一戦の間に勝とをつとめて、しはく相攻る専年を経てやます、是又巧而久といふへし、遂になにの成功なくして、僅に其身を終て國滅にき、たゞ豊臣秀吉は、もとより不仁にして、誅暴止亂の兵にてはなけれども、勝敗の大數に明なりしかは、出師になにの造作もなく、行兵になにの巧計もなく、戦となれば必功を一擧に收む、遂に兵を頓て曠日することをさかす、いはゆる拙而速なるものに近し、其將畧恐らくは謙信信玄の及所にあらし、然れ共慍輕猾賊の人にして、禮樂慈愛は夢にもしらすりし程に、晚節無名の師を起して、朝鮮を征伐し、久しく師旅を暴露し、多く人民を魚肉せしかは、天下の人心離叛きけり、亦兵久して收めざるの弊なり、孫武か一言兵の要旨を得たりといふへし、

兵は詭道

他日繼て諸客來會せしか前日兵家形勢の説くはしく承り感服し侍る、世に兵法を傳る人も一ならず候へ共、大かた上杉武田家の流にて、兵の故實器械には精しく候へども、中々形勢などの沙汰には及ばず、是にて敵を料り勝おとを制するは、なりかたかるべきやうにかねて思ひ侍りしに、翁の論と承り、いよく世に傳るは皆兵の末事にて兵法とするにたらずとこ思ひ侍る、但形勢を審にし智謀をもちる候事、仁義の兵にもあるべきにや、聖賢の道にはすこしたかひたるやうに覺へ侍るはいかゝといふに、翁聞て、それはよき不審にて候、兵は聖人の常道におらず、いはゞ權道ともいふへし、身つから義を制する權度なくしてはにはかに用ひかたき道にて候、とかく兵は別段の事にて、常には用ひざる道と意得給ふへし、さらば古今兵の異同ある事を語り侍るへし、戰國以來料敵制勝の術を兵と申候へども、元來甲冑の士を兵といへば、兵は士卒の事にて候、ひかし荀況古今の兵を論して五とす、湯武の仁義、桓文の節制、秦の銳士、魏の勇卒、齊の技擊是なり、王者の兵は、道德に本つさ、仁義を崇ふ故に、三軍心を同らし力を戮せて、君上の難に赴く事、子弟の父兄を衛り、手臂の頭目を捍くかとし、是を仁義の兵といふ、桓文の兵は、倡義を守り、律令にしたかふ故に、三軍畏威て一人も節義を踰る事なし、是を節制の兵といふ、嬴秦の兵はたゞ賞罰を威にし、首級を尙ふ、曾て兵に節制ある事をしらす、然とも士卒を淬勵して勇敢を信ふか故に、敵に

赴て戰死する事をたのしむ、其強き事魏齊の兵に比するに甚優れり、勇の兵と勇力の卒を募り、齊の兵は技擊の材を選ひ、一朝かりあつめて敵と闘し、其兵たゞ利を要して、あへて死に敵の志なし、是によりていふに、秦の銳士より以下は、やゝ優劣ありといへど、一切に武力をもて取勝のみ、すべて兵法ある事をさかす、兵法は節制の兵より以上にあるへし、仁義の兵といへども、僅に兵といへば形勢智謀をすてぬ事にて候、是を捨てはいかて敵を料り、勝ことを制し候へき、もとより仁義の兵に後世の兵のよく詐偽を尙ひ反間を用るやうのむつかしく巧なる事はあるましく候へども、たゞ敵と對したる正面におゐて、或は敵の銳氣を挫き、或は敵の惰氣をうち、或は不意にいて、或は險阻に逼る、とかくに敵を制して敵に制せられず、制をいたして敵に致されざるやうに謀るは兵の法なり、昔趙宋の時、いつれの戦にか、ある一將城守して敵に圍れしに、災天の事にて有けり、敵しかりに戦をいとみしかども、堅く城を閉て兵を出さず、一人に冑をさせて庭中にたゞせ置けるか、時を移して冑火のとくなりて、其人堪かたかりける時に、敵もさころ困まんと量りて、急にさりて出ければ、敵一こらへもこらへずして敗軍しけりとなり、此事を朱子兵を論するといひ出で、兵はかくあるべき事なりと仰られし、語類に見えしと覺へ侍る、されば孔子も三軍を行は、臨事而懼好謀而成者にくみせんとの給へり、異國の事は遠ければ姑し置、我朝武家の世になりしり、天下攻伐をつとめて、戦争やむ事なかりし、建武以來宮方武家かたどて、諸國にたて分れて、

日在合戦に及しかども、いつれも諸國假合の卒をあつめて、衆の多寡をくらへ兵の強弱を争ひ、さ
 くの或は、兩軍よせ合せて相撲角力の場のごとく、一時に勝負を決する外はなし、或は勝時
 もあり、負る時もあり、勝も負も一旦の事にて、むなく士卒を多くころしてやみぬ、なよの
 兵法か論すへき、いはゆる齊の技撃魏の勇卒ともいふへし、足利氏の季世に至て、英雄蓬起し、四
 方に割據して、兵を磨士を養ひ、日ころ拊循して用ひしかは、其兵勇銳にして百戦して挫けず、秦
 の銳士ともいふへきにや、中にも武田上杉などの兵は號令備り、約束明かに師出るに律をもてすれ
 は、桓文の節制にも近かるへし、されは本朝の兵は、こゝに至て始て兵法をも論すへかめり、然れ
 ども當代兵家者流と號する人、多くはかの兵律を傳るのみにて、兵法のものは、敵を料り勝ことを
 制するの謀にありといふ事をしらす、其中ことに理にくらさ人は、兵に荷擔して、國家を治るの道
 も是に外ならずといふめる、先年人のいひしは、ある兵家の説とて、孫子の兵者詭道也とあるを、
 兵は詭道なりとよむへし、兵は詭道なりとはよむへからずとて、翁さへて一笑を發しき、是は
 兵を詭道といふを嫌て、兵はもと正道なれども、時としてはいつはるも道なりといふにやあらん、
 詭字は詐偽の二字と倭訓同しけれども、字義に差別あり、たゞ眞手になく、常格をたかへたる道を
 詭道とはいふなり、されは孫子も能而示之不能、用而示之不用といはすや、よくしてよ
 くすと見せ、用て用ると見せては、いかて敵を料り勝ことを制すへき、よりにて兵は眞手になく、常

法に引ちかへて行ふ道なりといふへし、すくに詐偽の道とはいふへからず、然共此筋を今日の常に
 出せば詭遇して獲禽の心になりて、やかて詐偽に陥るへし、るこそ孫武さすかの明者にて慥に見つ
 けし程に、十三篇の初におゐて兵は詭道なりとはいひしるか、詭道なれば常道にあらず、常道に
 あらずして、いかて國家を治るの道とすへき、況や當代の兵家に相傳ふるは、皆兵の末事なるをや
 、或は城どり、或は軍のろなへ又は古戦の跡を僉議する迄にて、孫子の書をよむ人稀なり、たま
 よむ人ありても、文字にくらさ故に詭道二字の義にさへ通せず、何とて孫子のふかさ意を得へきや
 、さるによりて其説を聞に、多くは臆見に出て相違したる事也、無知妄作といふへし

不レ忘レ向レ君

後數日ありて諸客來會せしか、前日兵の拙速を貴ふ事を承候てより、自分にも考へ見候お、兵に限
 らず大かたは何事も不調法にして速なるかよく候、然るをあまり思案過候て仕方のみきやうにとこ
 しらへ候へは、多くは文に拘り實を失ひ候故、やゝもすれば機會におくれ候て、後悔する事も出来
 候、是巧にして久しきの害にて候といへは、翁さへて、さにてある候へ、但其速なるに本源あり、
 たゞ常に心ゆるまず、氣たるまざるを本源とす、心ゆるます氣たるまされは、事物お奪はれぬ程に
 心のつから落着候て緩やかなる物にて候、されはすみやかなるは緩やかなるより生すると思ひ給ふ
 し、もし速なるかよしとて俄にすみやかにすれば、心せき氣さはかしく候程に、事に當て狼狽し

いかさのみならず、却て不慮の害をも招うかし、近代諸侯の家にある宿老の武臣を見るに、
 のかみ兵戦の世を経てのつから心ゆるます氣たるまぬ故に、緩急の場に臨て其速なる事他人
 の及ふへき所にあらず、翁加賀にありし時、其先祖越後の堀の家に住へし者ありて語りしは、越後
 守の家老に堀監物とて名ある者あり、監物二代あり、二代監物へ、慶長十五年弟井後直奇と守主人越後守伏見の
 邸にて、日暮に客を送り出けるに、越後守に怨あるものありしか、かくれ居て急にさき懸しを、越
 後守も扱あはせし所に、監物はるかのうしろより一番に來て彼者をさき倒しけるを、左右に供した
 る士共諸ともに打とめけり、後日に右の士とも監物に逢て其日の事をいひ出て、日暮といひ、不慮
 の事といひ、我等とも心ならず少しをくれ候ひしを、御身にははるかの跡に御渡り候つるに、いか
 なれは一番に手に御あひ候にや、不審なる事にころ存候へといへは、いや各とて武邊の某におどる
 へきにてはなく候へとも、某はかねてひとつの覺悟ありての事にて候、各は此覺悟なき故に某を先
 をさせらるゝところ存候へ、此後も各は殿の御供を勤らるゝ事に候へは、向後御心得にもなるへく
 候まゝ、今迄は人に申さぬ事に候へとも傳授いたし候へし、惣して君の御前に伺候し御後に供奉し
 候時は假にも臨へ目をやらず、初中終君に目をはなさずしてをるを簡要の法といたし候、左候へは
 君の動靜針程の事も見つけすといふ事なし、よりに不慮の事ある時も我しらす手にあふ事速なる物
 にて候、此某か一言を必忘れ給ふへからすといひしとなり、是は武の心懸より覺悟したる事にてあ

話 雜 臺 駿

るへけれども、聖賢の心にもかなひ侍るへし、翁日頃論語郷黨篇を讀に君在とさば與々如たりとあ
 るを、朱子の註に威儀中適之貌と云て、又張子の説を引て與々は不忘向君也とも釋しをけり、威
 儀中適にてよく聞へたる上に張子の説を引るゝは、不忘向君といふに一種の義理もあるにや、い
 かやうの意味にかあらんと思ひしか、其後此事をさきて、横渠の説緊要なる事をさとりぬ、かの監
 物か始終君に目をはなさぬといふは、是則不忘向君に非すや、君に扈從し君に侍坐する時の第
 一の意得たるへき事なり、監物もとより横渠與々の説を見て、其にて心付たるにてもなけれど、其
 意をのつから相叶へり、奇特なる事といふへし。

大敵外になし

翁かねておもふ事にて候、今の學者、聖賢の書を讀て、なましむに義理の僉議をいたし候へとも、
 大かたは僉議に目を暮し、何にてもひとつ取とめて身に得たる事は侍らす、是も巧にして久しきと
 申へし、然るに武臣たる人は不學にして一己の見付たる所によりて覺悟を決して直に行ひ出し候故
 、端的に其驗を見せ申にて候、學術なく候へは理に當らぬ事もあるへく候へとも、其得たる所おの
 つから聖賢の教にもかなひ候、いはゆる拙而速なるに候はずや、右の監物か事にて思ひ知給ふへし
 づれに付てこゝに殊勝なる事ころ候へ、寛永のころにかあらん、永井信濃守尙政しきりに昇進して
 龍任せられけるか、其頃井伊掃部頭直孝一代の元老にておはせしに、或時邂逅して、我等事弱年の身

◎大敵の外になし

百八十六

にて、特恩を蒙りて、重職をつとめ候事誠に至極と申へ候、うごもどには御老功の御事にて候へは、我等心得にも成へき事おほし召よりも候は、仰さかされ候へとあれば、掃部頭先感して奇特なる御心得にて候へいかに一つ存じよりたる事候ま、傳授し候へしされとも大切なることをあらさまには申かたし、いよく御聞あり度候は、某か宅へ御越候へといはれしかは、日を定て禮服を着し彼宅へ往れしに、掃部頭出て對面の後、世話に油斷大敵といふ事定て御覺へあるへし、某か傳授外にはなく候、此一言にて候、必御忘れあるなどいはれしと、ひかし周の武王即位のはしめ、大公望を召て、簡約にして行ふて恒とし、萬世に傳ふへき道ありやと問給ひしかは、大公望まうさく、其言丹書にあり、王もし聞ひと欲せば齋戒し給へどありしかは、武王齋戒端冕して東面して立給へり、其時太公望西面して丹書の言を武王にさつていはく、敬勝怠者吉、怠勝敬者滅、義勝欲者從、欲勝義者凶、今油斷大敵の語、鄙諺なれとも丹書の戒に叶へり、然るに君にかへ事を務るに油斷のあしきとは誰もしりたる事にてしかも眞實にしらぬ故に、右の諺をも等閑に聞すくして、こゝに心をとゞむる人なし、よりて毎々油斷して、過失を生し禍咎を招て、ともすれは臍を噬ことればさうかし掃部頭は常に油斷を禁して身に近つけぬ心から、眞實に其事の簡要たるをしらるゝ故に、この諺を大切の事として、信濃守にも傳へられしなり、抜群の識あるに非してはいかてかくあるへき、其上あからさまにいはれず、前に日を定め其人に盛服させて、おもく傳授せ

られしも、かの太公望の丹書を武王に授けし面影あり、かくあらねは其事輕し、うのこと輕ければ其信深からず、其信深からねは、其人の益に成かたし、亦誠意懇到を見るへし、掃部頭學術のありし沙汰もさかねともおのつから聖賢の教に叶へるころ極めて殊勝の事といふへし、我朝武家の代になりて五百年以來、世に是等の人あり是等の事あるをさかす、しかしなから祖宗徳澤仁厚なるか所致なり、これによりて謹て考るに御當家天下をしらしめして仁政四海に廣被せしより、歴代殘殺の風變して、太平禮義の俗となりしか、寛永明暦の間に至て、在廷の諸公運に應じて出て、承化輔治しかば其澤日に隆洽なりしうかし、今其人からを聞に、いつれも篤實簡重寛厚の長者也、其政を謀るには虚文を抑へ、事實をつとめ、人を取には材辨を退け、實行をすゝむ、近世智巧を尙ふの風より見れと、其拙さに似たれとも凡百の有司いつれも廉靜寡欲なりしかは、各守身恭職して時勢に附す、身計をなさゝりき、是によりて庶政あかり、百事熙まり、たゝ此時を別して盛なりとす、勿論時運のしからしむるといひなから、其いはれなきにあらす、然るに篤實の士は謹厚にして用にうとく、材智の士は、敏捷にして事にさとし、この故に古今人材をもちゆるに、多くは徳行をすて、材智の士を取るか、ささ當りよく職を辨し、しはく近効をたつる程に、敏速の功あると見れども、事おほく僉議かちにて、事實常に隠れ、下情常に塞りぬれば、政弊民瘼も是より起るうかし、是によりていふに、兵に限らず治世の政も拙速をよしとして巧運を

◎大敵の外になし

百八十七